第三書

一〇八

新しき戦。——佛陀が死んだ後、人々は尚ほ幾世紀かの間一の洞穴の中に彼の影を示した——一の巨怪なる恐ろしき影を。神は死んでゐる。けれども人間の種屬がある如く、恐らくは尚ほ幾千年かの間、人々が彼の影を示すところの洞穴があるであらう。そして我々は——我々は尚ほ彼の影をも克服しなければならぬ！

一〇九

我々をして我々自らを警戒せしめよ！——我々をして、この世界が一の生物であることを考へるのに對して、我々自らを警戒せしめよ。何處へ世界は自らを擴げ得たか？　それは何で以て自らを養ひ得たか？　如何にしてそれは成長し、自らを增大し得たか？　我々は固より好い加減に、有機體の何物であるかを知つてゐる。そして我々は我々がただ地球の外殼の上にのみ知覺する、名狀しがたくそれ、ぐずぐずした、希な、偶然的な物を、（一切を有機體と名づける人々の爲すごとく）本質的な、普遍的な、永久的な物として解釋し直さなければならぬか？　それは私に嘔吐を催させる。我々をして、一切が一の器械であると信じることに對して警戒せしめよ。それはたしかに一の目的を以て構成されたものでない。我々は『器械』といふ言葉で以て、一の遙かに高過ぎる名譽を彼に歸するのだ。我々をして、我々の近隣の星辰の輪轉運動の如く規則正しき或る物を、一體に又普遍に假定しないやうに警戒せしめよ。銀河を一瞥しただけでも、其處にずつとより荒つぽいより矛盾的な運動がありはせぬか、又永久の直線的な墜落軌道を有つた星辰などがありはせぬか云ふ疑ひを起させる。我々の生きてゐる星辰秩序は一の除外例である。此秩序と、それによつて規定されるかなりの長い期間とは、再び除外例の除外例を可能にした——有機體の形成を。これに對して世界の一般性格は、總ての永劫に亘つて混沌である——必要が缺げてゐると云ふ意味に於てでなく、寧ろ秩序や、編制や、形式や、美や、智慧や、總て我々の美的人間性と呼ばれるものの缺げてゐると云ふ意味に於て。我々の理性から批判されて、不仕合せな投擲は遙に通例であり、除外例は內密な目的でない。そして玩具全體が永久に、決して諧調と云はれ得ないやうな其調子を反復する。そして最後に『不仕合せな投擲』といふ言葉すらも既に、一つの非難を包容するところの人間化である。しかし乍ら、如何にして我々は一切を非難したり讃美したり出來ようぞ！　我々をして、無感情や無理性を、或は其反對の物をそれに歸しないやうに警戒せしめよ。それは完全でもなく、美でもなく、高貴でもない。そしてさうした總て

の物の何にもならうとしない。それは全然、人間を模倣することに努力しない！　それは全然、我々の如何なる美的及び道徳的批判によつても動かされない！　それは又如何なる自己保存の衝動をも、一體に如何なる衝動をも有つてゐない。それは如何なる法則をも知らない。我々をして、自然に法則があると言はないやうに警戒せしめよ。そこには唯だ必要があるだけだ。其處には命令する何者も、服從する何者も、違犯する何者もない。汝等にして、そこに何等の目的もなきことを知るならば、則ち汝等は又、そこに何等の偶然もなきことを知る。なぜと云つて、ただ目的に於てのみ『偶然』と云ふ言葉が意味をなすからである。我々をして、死が生の反對であると言はないやうに警戒せしめよ。生きてゐる者は、死んだ者の一種、甚だ希なる一種であるに過ぎない。我々をして、この世界が永久に新しいものを創造すると考へないやうに警戒せしめよ。そこには永久に持續する如何なる實體もない。物質はエレア派の神のやうな一の誤謬である。しかし乍ら何時我々は、我々の警戒や用心をお仕舞ひにするであらうか！　何時總ての斯うした神の影が我々を暗くしなくなるであらう？　何時我々は自然から全く神をぬき去つたであらう！　何時我々は、新しく見出された、新しく釋放された、純なる自然で以て、我々人間を自然化し始めることを許されたであらう！

一一〇

認識の起源。――恐ろしく長い時の間を通して、理智は誤謬よりほかに何物をも産まなかつた。それの或物は、有用であり種屬保存に役立つことを證據立てた。それに出會はした、或はそれを相續した人は、自分自身及び子孫の爲めに、より大なる幸福を以て其闘を闘つた。いつまでも相續され、結局殆んど人間種屬の根柢基本となつたところのそれらの間違つた信仰箇條は、例へば次ぎのやうなものである。曰く、そこには持續する事物があるといふこと、そこには等しい事物があるといふこと、そこには事物や、物質や、身體があるといふこと、一の事物は、それが見えるところのものであるといふこと、我々の意欲は自由であるといふこと、我々にとつて善いものは、絶對的に善いといふことなぞである。ずつとおくれて始めて、其否定者や懐疑者が現れた。ずつとおくれて始めて、認識の最も無力な形として眞實が現れた。人々は眞實で以て生き得ないやうに見えた。我々の有機體はその反對として採り用ひられた。總てのそれより高き機能は、感官の知覺は、並びにあらゆる種類の感覺は、それらの太古的に體化された根本的誤謬と共働した。加之、それらの命題は認識の内にすら人がよつて以て『眞實』と『不眞實』とを量定するところの軌範になつた――純粋論理の最もかけ離れた領域に

はいつてまで。されば、認識の力はそれらの物の眞實の程度にあるのでなく、寧ろ生活條件としてのそれらの物の年數や、それらの物の體化性や、それらの物の性格にあるのである。生活と認識が矛盾撞着するやうに見えたところには、決して眞面目な戰が戰はれなかつた。其處では否定や懷疑が狂愚と見做される。それにも係はらず、自然の誤謬の對偶を持出し支持したところの、エレア派の如き除外例的思想家等は、此等の反對を生活するのも可能であると云ふことを信じた。彼等は賢人を不變の、非人格の、觀照の普遍の人間として案出した。それらの反對な認識に對する特有な能力をもつた、一であると共に總てであるものとして案出した。彼等は、彼等の認識が同時に生活の原理でもあるといふ信仰をもつてゐた。しかし乍ら斯うした總てを主張し得る爲めには、彼等は彼等自らの情態に就いて自らを欺かねばならなかつた。彼等は自らにありもせぬ非人格性や變化なき永續を歸しなければならなかつた。認識者の本質を取り違へねばならなかつた。認識に於ける衝動の力を否定せねばならなかつた。そして一體に理性を、全く自由な、自分自身から生れ出た活動として考へねばならなかつた。彼等は、彼等もまた有効なものとの矛盾に於て、或は安息に對する、獨占に對する、乃至支配に對する願望に於て、彼等の命題に到著してゐるといふ事實に目を閉ぢた。誠實や懷疑のより精緻な發展が遂に此等の人間をも不可能にした。彼等の生活や判斷もまた、總ての有情的存在の太初的衝動及び根本的誤謬に左右されるものだと分つて來た。そのより精緻な誠實や懷疑は到處に起つた——この反對な格言が生活に適用出來るもののやうに思はれた（その何れもが根本的誤謬と調和し合つた故）處には。從つて生活に對する功利のより高き或はより低き程度に就いて論爭され得た處には。又、新しき格言が一の理智的遊戯的衝動の表白として、總ての遊戯と同じく邪氣なく幸福なものとして、よし生活に有用でないまでも、少くとも有害でないことを證明された處には。漸次人間の頭腦は斯樣なる判斷及び確信を以て充たされて來た。そして此紛糾の中に、醱酵や鬪爭や權力欲を生じて來た。ただに功利や樂欲ばかりでなく、あらゆる種類の衝動も『眞實』に關する鬪爭に參與した。理智的鬪爭は仕事になり、魅惑になり、職業になり、義務になり、品位になつた。眞實なものに對する認識や精進は遂に爾餘の需要の間なる需要となりすました。それ以來、ただに信念や、確信ばかりでなく、吟味や、否定や、不信や、矛盾もまた一の力となつた。あらゆる『惡しき』本能が認識に從屬させられ、それに奉仕させられ、許されたもの、尊敬されたもの、有利なものの光輝を、そして終に善良なるものの目と無邪氣とを獲得した。かくて認識は生活其物の一部となり、生活として絶えず成長し行くところの力になつた——終に認識とそれらの太初的な根本的誤謬とが、いづれも生活として、いづれも力として、いづれも同じ人間の中に、互にぶつかり合つたまで。思想家、それは今、眞實に對する衝動と

それらの生活を保持する誤謬とが、その内に最初の闘を闘つたところの存在である。そのあとでは眞實に對する衝動が又生活を保持する力として自らを證明した。この闘爭の重要さに比べれば、爾餘の一切はどうでもいいものである。生活の條件に關する最終の疑問は此處に持出される。そして實驗を以て此疑問に答へようとする最初の試みが此處になされる。如何なる程度にまで眞實は體化に堪へるか？　――これが疑問である。これが實驗である。

一一一

論理的なものの起源。――人間の頭腦の中なる論理は何から生じて來たか？　それは疑ひもなく非論理からだ。そして其非論理の領土は本來巨大なものであつたに相違ない。けれども、我々が今日推論するのと異つた推論をしたところの無數に多くの者共は滅亡した。尙ほ且つより眞實であり得たではあらうが！　例へば、食物に關して、或は自分に敵對する動物に關して、『均等』を十分屢々辨別し得なかつた者は、徒つて餘りに緩漫に包攝し、包攝に於て餘りに用心深かつたところの者は、かの總ての類似した物の中に直に均等を洞見したところの者に比し、殘存のより僅かなる見込みを有つてゐた。しかしながら、類似した物を均等として扱はうとする優勢な傾向が、一の非論理的傾向が――なぜと云つて、本來均等な物は一もないわけだから――始めて論理のあらゆる基礎を作つたのである。同じく又、論理にとつて缺ぐべからざるものである、實體の概念が起り得ることの爲め（嚴密な意味に於ては、現實的な何物もそれに相應してゐないのだけれど）、事物に於て變化するところのものが久しい間見られず、感じられずにゐなければならなかつた。精密に見ないところのものは、一切を『流の中に』見たものに對し、有利の地に立つてゐた。本來を云ふと、推理に於ける各の高度の細心は、各の懷疑的傾向は、生活に對する一の大なる危險である。判斷を中止するよりも寧ろ肯定する、待つよりも寧ろ迷つたり案出したりする、否定するよりも寧ろ同意する、正しきを守るよりも寧ろ判斷すると云ふやうな、反對の傾向にして若し異常に強く開發されてゐなかつたならば、如何なる生きものも保存されなかつたであらう。我々の今日の頭腦に於ける論理的思想や推理の徑路は、それ自ら個々に皆甚だ非論理的であり、不正當であるやうな衝動の經過や闘爭に相應してゐる。我々は通例ただ闘爭の成果をのみ經驗する。今此原始的な機構は左樣に速に、又左樣に內密に我々の中に働いてゐる。

一一二

原因と結果。――我々は『說明』と呼ぶ。けれども『記述』である――その中に我々が認識や科學

の昔の階級に先んじてゐるのは。我々はより善く記述する。我々は總ての昔の人々と同じだけ僅かにしか說明しない。我々は昔の文化の素朴な人間や研究者が、唯だ二通りの物、所謂『原因』と『結果』とをのみ見たところに、幾通りもの繼次を發見した。我々は生成の觀念を完全にした。けれどもその觀念の上に、その觀念のむかうへは達してゐない。『原因』の系列が如何なる場合にも、ずつとより完全に我々の前に立つてゐる。我々は推理する、あれが續くことの爲めに、これこれがまづ先たねばならぬと。しかしながら我々は、それで以て何物をも會得したのでない。例へば各の化學的生成に際しての性質は、前同樣に『奇蹟』と思はれる。各の推進運動も同じである。何人もその推進を『說明』してゐない。また我々が如何にして說明し得たかよ！　我々は唯だ、ありもせぬ事物で以て、線や、面や、體や、原子や、可分的時間や可分的空間で以て手術をやる。我々一同が先づ觀念に、我々の觀念にするとき、如何にして說明が可能であり得べきぞ！　科學は事物の出來るだけ忠實な人間化と見做すので足りる。我々は事物及び其繼起を記述しながら、いよいよ精密に我々自らを記述することを學ぶのだ。實際は我々の前に一の continuum が立つて居り、我々はそれから少しばかりの部分を遊離さすのである。丁度我々が一の運動を、いつも唯だ遊離した點としてのみ知覺し、從つて本當には見ないで推定する如く。多くの結果が起つて來るときの突然さは、我々を間違ひへ導く。しかし乍らそれは我々にとつての突然さに過ぎない。我々の目にとまらない突然さの斯うした刹那にも、經過の無數の群がある。原因と結果とを continuum として、我々の知覺の仕方に從つてでなしに、勝手なばらばらにされたものとして見るところの、出來事の流を見るところの理智は、原因と結果との概念を放棄し、總ての規定性を否定するであらう。

一一三

毒物論。――一の科學的思考が成立し得ることの爲めには、隨分色々の物が結合されなければならぬ。そして總ての斯うした必要な力はそれぞれに案出され、練磨され、扶育されねばならなかつた！　しかし乍らそれらの物の孤立情態に於て、それらの物は甚だ屢々一の全く異つた効果を有つてゐた――それらの物が科學的思考の內に拘束し合ひ抑制し合つてゐる現在に比べると。それらの物は毒物として働いた――例へば疑惑の衝動や、否定の衝動や、待つことの衝動や、蒐集の衝動や、解體の衝動なぞは。此等の衝動がその並列を理解し、お互に一人の人間に於ける一の有機力の機能として感じ合ふことを學んだ前に、人間の多くの犧牲がささげられた。　そして藝術的な力や生活の實用的睿智も科學的思考と協働する（一のより高き有機的體系が形作られることの爲めに）やうになるのはまだ

まだ如何に遠いかな。さうした日を標準にすれば、我々の今日知つてゐることを學者や、醫師や、藝術家や、立法家なぞが、みすぼらしき古代人と見えねばならなかつたであらう！

一一四

道德的なものの範圍。——我々は直接に、我々がなしたる總ての舊い經驗の助けを藉りて、我々の見るところの一の新しき象形を構造する——いつも我々の誠實及び正義の程度に應じて。道德的經驗をほかにしては何等の經驗もない。官能的知覺の領域の內に於てすらもない。

一一五

四の誤謬。——人間は其誤謬によつて教育されてゐる。第一には、彼は自らを常にただ不完全なものにのみ見た。第二には、自らに空想された性質を附與した。第三には、自らを禽獸や自然に對する間違つた地位に置いて感じた。第四には、常に新しい價値表を發明した。そして暫くの間それを永久的絕對的なものとして受取つたので、或る時はこの、或る時はかの人間的衝動及び情態が第一位に立ち、この評價の結果として高貴にされた。人がこの四の誤謬の効果を控除し去つた時、彼は人情を、人間性を、そして『人間的品位』をも控除し去つたのである。

一一六

群蓄本能。——我々が一の道德にぶつかる處に、我々は人間的衝動及び行動の評價と階段とを見出す。斯うした評價と階段とは常に、一の團體もしくは群蓄の需要の表白である。第一に——そして第二第三に——それに有利なものは、個々のもの總ての價値に對する最上の標準でもある。道德で以て個々のものは、その群蓄の機能であるべく、ただ機能としてのみ自己に價値を歸すべく敎へ込まれる。或る團體を維持するそれと非常に異つてゐた故、そこには隨分色々の道德があつた。そして群蓄や團體や、國家や社會の尙ほ是からさきの本質的改造に關しては、人は、尙ほ非常に飛び離れた道德のあるべきを豫言することが出來る。道德は個々人の中なる群蓄本能である。

一一七

群蓄の良心の苛責。——人類の最も久しく遠き過去の時代には、今日のと全く異つた良心の苛責があつた。今日では、人はただ、意欲し行爲するところの物に對してのみ責任あることを感じ、自分自

身の中に彼の誇を有つてゐる。我々の法律の先生達は總て皆此個々人の自己感情悅樂感情から出立する——宛かも昔からここに權利の源泉があつたかの如く。しかしながら人類の最も久しき時代を通じて、自らを各個別々のものとして感ずるより恐るべきものは何もなかつた。ただ獨で居り、各個別々のものと感じ、服從もせねば支配もせず、一の個性を表現すると云ふのは、それは其時分何等の悅樂でもなく、寧ろ一の刑罰であつた。人は『個性でゐるやうに』罪をさだめられたのである。思想の自由は不愉快その物と見做されたのである。我々が法律や統制を拘束損害と感ずるのに對し、むかしの人々は自我主義を苦しい事と感じ、本當の困厄と感じた。自己であること、自分自身を自己の尺度や衡器によつて評價することは、當時趣味に反してゐた。さうしたことを欲するのは、亂心として感じられたであらう。なぜと云つて、あらゆる悲慘やあらゆる恐怖が獨居といふことに結合されてゐたからである。その時分には、『自由な意志』がその最も近いところに惡しき良心を有つてゐた。そして人が不自由に行動すれば行動するほど、人の個體的感念でなく、蓄群本能が其行爲の中から物を言へば言ふほど、愈々彼は自らを道德的なものに評價した。個人が意欲したのであつても、もしくは意欲したのでなくても、兎に角其蓄群を傷害した一切のものは、當時其個人に良心の苛責を經驗さした。そして更に彼の隣人にも、否其蓄群全體にも！　其點に於て我々の考方は特に變つて來てゐる。

一一八

好意——一の細胞が一のより强き細胞の機能に自らを變へるとき、それは德行であると云へようか？　その細胞はさうしなければならないのだ。さて其より强き細胞がかの細胞を同化するとき、それは惡であると云へようか？　其細胞も同じくさうしなければならないのだ。乃ちそれは其細胞にとつて免れがたいのだ。なぜと云つて、それは豐饒なる補充を追求し、そして自らを更新しようとするのだから。されば、人は好意に於て、同化衝動と歸順衝動とを差別しなければならぬ——好意をより强き者の感ずる場合と、より弱き者の感ずる場合とに從つて。何物かを自分の機能に造りかへようとする强者にあつては、喜悅と熱望とが結合されてゐる。機能になりたがる弱者にあつては、喜悅と熱望とが結合されたことが結合されてゐる。前者は、同化衝動の愉快なる興奮は、弱者を眼前に置いて、本質的に憐憫である。尙ほ且つ此場合忘れてならないのは、『强』『弱』が相對的概念であるといふことだ。

一一九

何等の利他でもない！——私は多くの人々に於て、機能でありたいと云ふ餘饒的な力と悅びとを

見る。彼等はその方へ押し寄せる。そして正に彼等が機能であり得るやうな總ての地位に對する最も精緻な嗅覺を有つてゐる。これに屬する婦人の或る者は、ある男子に於て丁度發育の十分でないやうな機能に自らを造り變へる。かくして彼の財布に、或は彼の政治に、或は彼の社交になる。斯樣なる人間は、それがよその有機體に自らを挿入するとき、最も善く自分自身を保存する。それが彼等に成功しなければ、彼等は不機嫌になり、苛立たしくなり、自分自身を食ひ盡すのである。

一二〇

魂の健康、――『德は魂の健康である』と云ふ、人氣のある醫學的道德的公式（その創始者はキオスのアリストンであるが）は、少くとも實際に使用されることの爲め、次ぎの如く改められねばならなかつた。曰く、『汝の德は汝の魂の健康である』と。なぜと云つて、健康それ自體と云ふやうな物はない。そして一の事物をさう云ふ風に定義しようとする試みは、いづれも皆痛ましく失敗に歸してゐる。汝の目的、汝の眼界、汝の力、汝の衝動、汝の誤謬が、とり分け汝の魂の理想や空想が問題である――汝の肉體にとつてすらも健康が何を意味しなければならぬかを決定する爲めには。されば肉體的健康には無數の種類がある。そして人が特異のもの無比のものに、その頭をもたげることを再び許せば許すほど、『人間の均等』といふ信條を忘れれば忘れるほど、愈々正常的健康、並びに正常的飲食、疾病の正常的經過の概念もまた、我々の醫師等に失はれねばならぬ。そして其時こそ、魂の健康や疾病に關して省察し、各人の特有なる德をその健康情態に置くべき時であり得る。勿論ある一人に於て健康と見えたものが、他の人に於ては健康の反對と見えることはあり得たのである。結局次ぎのやうな大きな問題は、尙ほその儘になつてゐる。曰く、我々は我々の德の發展の爲めにすらも、病氣をせずに濟ませるかどうか？　又認識や自覺に對する我々の渴望が特に、健康な魂を要すると同樣に病的な魂を要しないかどうか？　換言すれば、健康ばかりを意欲するといふのは、一の先入見、一の慮病でないかどうか、そして事によつたらば、最も細緻な野蠻主義退步主義の一例でないかどうか？

一二一

生活は決して議論でない。――我々は、我々が生活し得るやうな一の世界を我々自らの爲めに整へた――體や、線や、面や、原因結果や、運動休息や、形狀內容の假定で以て。今や此等の信仰箇條なしには、何人も生活することが出來なかつた！　けれどもそれらの物は尙ほ證明されたものでない。生活は決して議論でない。生活の條件の中には、誤謬がまた其一としてあり得たのである。

一二二

基督教の中なる道徳的懐疑。――基督教もまた開明に對して大なる貢獻をなした。そして甚だ痛切有効なる仕方に於て、道徳的懐疑を教へた。彈劾しながら、悲慘にしながら、けれども疲れざる忍耐と煩瑣とを以て。それは各個の人間に於ける、其『德』に對する信仰を滅却した。それは古代に乏しくなかつたやうな偉大なる有德者を、永久に地上から消えしめた。自己の完成を信じながら、牛闘の勇者の威嚴を保つて歩き廻つたやうな評判の高い人間を消えしめた。我々が今、懐疑の斯うした基督教的學窓に教養されて、古人の道德書を、例へばセネカやエピクテエトの物なぞを讀むならば、我々は一の樂しき優越を感ずる。そして內密な洞察通觀に充たされる。その際我々には、一人の子供が或る老人の前に、若しくは一人の熱狂した少女がラ・ロシュフコオの前に物を言つてゐるかのやうに思はれる。我々は、何が德であるかをより善く知つてゐる！　しかしながら終に我々は、罪惡や、悔改や、恩寵や、聖化の如き、あらゆる宗教的情態や經過の上にも、這の同じ懐疑を適用した。そして蟲をして存分に掘り穿たしめた――我々が今や總ての基督教的書籍を讀むに際しても、手數のかかつた優越洞察の同じ感情をもつほどに。我々は宗教的感情をもより善く知つてゐる！　そして今は、それを善く知り、善く記述すべき時である。なぜと云つて舊信仰の信奉者等も死んでしまふのだから。我々をして少くとも認識の爲めに、彼等の肖像と典型とを救はしめよ！

一二三

認識が手段より以上のもので。――斯うした新しき欲情――認識の欲情のことだ――なしにも、科學は促進されるであらう。科學はさう云ふものなしにこれまで成長し大きくなつて來てゐる。科學に對する善き信仰は、我々の國家が支配されてゐるやうな、科學に都合の好い先入見（以前はそれが基督教でさへもあつた）は、あの絶對の傾向衝動が左樣に希に科學の中に現はされたといふこと、又科學が欲情と見做されるのでなく、むしろ情態として、Ethos として見做されるといふことに、土臺を置いてゐる。げに、隨分屢々認識の amour-plaisir（快樂に基く愛）――好奇心――で足りるのだ。amour-vanité（虛榮に基く愛）や、それに慣れることや、名譽やパンに對する顧慮で足りるのだ。多くの人々にとつて、彼等が讀んだり、蒐集したり、整理したり、觀察したり、更に物語つたりするよりほか、閑の餘饒をどうしていいか分らないと云ふことですらも足りるのだ。彼の『科學的衝動』は彼等の退屈である。法皇レオ十世は曾つて（ペロアルド・スに宛てた書簡に於て）科學の讃美を歌つた。

彼は科學を我々の生活の最も美しき裝飾最も大なる誇として、幸不幸への高貴なる關與として說いた。『科學なくんば』と彼は最後に言つてゐる、『あらゆる人間的企圖は堅固なる足場のないものであつたらう。固より科學がまつたところで、尙ほ且つそれはかなりに變り易く當てにならぬものであらうけれど！』しかしながら此可い加減懷疑的な法皇は、爾餘の總ての敎會的な科學讃美者と同樣に、科學に對する彼の最終の判斷を言はないでしまつた。人をして、此の如き藝術の友に對し、かなり著しきところのものを、卽ち、彼が科學を藝術の上に置いてゐるといふことを、彼の言葉から聞き出さしめよ。尙ほ且つそれは要するに、彼もまた總ての科學の上に高く置いてゐるところのものに付いて、『啓示された眞實』に付いて、『魂の不朽の救』に付いて、ここに說を爲さないでしまつたのは、只だ禮節を守つたのに過ぎないのである。それに比べては、生活の裝飾や、誇や、媒藥や、確保なぞが彼にまで何であるかよ！『科學は第二義の物であり、何等最終の、絕對の物でなく、欲情の對象でもない』——斯うした判斷はレオの魂を去らないでゐた。科學に對する本當に基督敎的な判斷は！　古代にあつては科學の品位や敬重は、その最も熱心な學徒の間にすら、德に對する追求が先頭に立つたといふこと、人々が認識を德の最善なる手段として崇め祭つたとき、其最高の讃美を與へたやうに思つたといふことに依つて少くされた。認識が一の手段より以上のものであることを意欲すると云ふのは、歷史に於ける或る新しき事なのである。

一二四

無限なるものの地平線內に。——我々は陸を捨てて、船に上つて出た！　我々は我々の背後の橋を——更に、我々は我々の背後の陸を破壞してしまつた！　いざ、小さな船よ！　心せよ！　汝の傍に太洋は橫つてゐる。成程、太洋はいつも咆哮してゐない。そして折々は絹や金や溫良の夢想の如く其處に橫はる。しかしながら、それが無限であること、無限より恐るべき何物もないことを、汝の知るであらうやうな時は來る。おお、自らを自由だと感じた、そして今此籠の壁にぶつかつて行くところの憐なる鳥よ！　陸地への鄕愁が汝を襲ひ（そこにより多くの自由があつたかの如く）、そしてもはや如何なる『陸』もないならば悲しいかな——悲しいかな！

一二五

狂人。——汝等はかの狂人の事を聞かなかつたか？——明るい朝に提灯をともし、『私は神を求める！私は神を求める！』と絕えず叫び乍ら、市場を駈け步つたあの狂人の事を！　そこには丁度神を

信じない多くの人々が集まつてゐたので、彼は大なる哄笑を喚び起した。抑も彼は失くなつてしまつたのか？　と一人が言つた。彼は子供の如く迷つたのか？　と他の人が言つた。それとも彼は身を匿すのか？　彼は我々を恐れてゐるのか？　彼は船に上つたのか！　移住したのか？　かく彼等一同が呼び且つ笑つた。その狂人は彼等の間へ跳び込み、其目を以て彼等を突き刺した。『何處へ神は行つてゐるか！』と彼は叫んだ、『私はそれを汝等に告げたい！　我々が彼を殺したのである——汝等と私とが！　我々一同が彼の殺戮者である！　しかしながら、如何にしてこれを爲したか？　如何にして我我は海を呑み盡し得たか？　地平の全體を拭ひ消す爲め、誰が我々に海綿をくれたか？　我々が此大地をその太陽から釋放したとき、我々は何を爲したか？　今それは何處へ動いて行くか？　我々は何處へ我々自身を動かして行くか？　總ての太陽を離れてか？　我々は絶えず撞き進んでゐないか？　そして後へ、横へ、前へ、總ての側へ？　尚ほ一の上や一の下があるか？　我々は限りなき虚無を通しての如く迷ひ行かないか？　空しき空間が我々に息をふきかけないか？　より冷くなつてゐないか？　絶えず夜が、そしてより多くの夜が來ないか？　提灯が朝にともされてはならないか？　我々は尚ほ、神を埋葬した墓掘りの喧噪についてなんにも聞かないか？　我々は尚ほ神的腐爛の何物をも嗅がないか？　——神々も腐爛するのである！　神は死んでゐる！　神は死んだ儘になつてゐる！　そして我々が彼を殺したのだ！　如何にして我々は、總ての殺戮者の殺戮者は、我々自らを慰めるか？　世界がこれまでに所有してゐた、最も神聖な最も強大なものは、我々の小刀の下に血を流して死んでゐる。誰が我々から此血を拭ひ去るか？　如何なる水で以て我々は我々自身を淨めることが出來たか？　如何なる不淨拂ひを、如何なる神聖な遊戯を我々は發明せねばならぬであらうか？　斯うした行爲の偉大さは、我々にとつて偉大過ぎはしないか？　我々は神々を値して見える爲めばかりに、我々自身神々になつてはならぬか？　そこには決してより偉大なる行爲がなかつた。そして苟くも我々のあとに生れるほどの人は總て皆、この行爲の故に、これまでの如何なる歴史よりも高き歴史に附屬する！』斯う言つて來てかの狂人は口を噤み、再び彼の聽衆を見渡した。彼等も口を噤み、不思議さうに彼を打ち眺めた。遂に彼が其提灯を地上に投げつけた。そして、其爲めに提灯は粉微塵になつて消え失せた。『私はあまり早く來過ぎてゐる』とやがて彼が言つた、『私はまだ宜しき時に達してゐない。この巨怪なる出來事は尚ほ途上に遍歴してゐる。それは尚ほ人間の耳に屆いてゐない。電雷も時を要する。星辰の光も時を要する。行爲も時を要する——それがなされた後にも、見られる爲めに聞かれる爲めに。この行爲は彼等にまで、最も遠い星辰よりも更に遠い。尚ほ且つ彼等はそれを爲したのである！』更に人々の語るところに依れば、かの狂人は同じ日に色々の教會へ押しかけて行つて、そこに彼の Requiem

Beternamdeo（主にある永久の安息）を唱へた。曳き出されて問ひ糺されたとき、彼は常にただ次ぎのやうにのみ答へた。曰く、『此等の教會が神の墓でも墓標でもなかつたら、それは抑も何であるか？』

一二六

神秘的な説明。――神秘的な説明は深遠なものと思ひなされる。事實は、それが淺薄でさへもないのである。

一二七

最も古い宗教心の影響。――各の思慮なき者は思ふ――意志が單獨に働くものであると。意欲が或る單純なもの、無造作に與へられたもの、推論すべからざるもの、自ら明らかなものであると。彼は信じてゐる、彼が何かをする時、例へば一擊を與へる時、擊つところのものは彼であると。又彼が擊たうと欲した故に擊つたのであると。彼はその場合の問題について全く何物をも氣付かない。そして意欲することの感情は、原因結果の假定に對してのみならず、其關係を理解するといふ信仰に對しても彼に十分である。出來事や、打擊に結果することの爲め、仕遂げられねばならぬさまざまな煩瑣な仕事の機構に附いては、かうした仕事の最もつまらない部分だけをでもしようと云ふ意志其物の無能に附いて、彼は何物をも知らない。意志は彼にまで一の魔法的に働く力である。効果の原因に對するものとしての、意志に對する信仰は、魔法的に働く力に對する信仰である。げに、人間が一の出來事を見た場合には何時でも、彼は本來原因としての一の意志を信じた、そして人格的に意欲するところの存在が背景に働いてゐることを信じた。機構の概念は彼にまで遠い處に横つてゐた。しかし乍ら非常に長き時の人間が人格をのみ信じてゐた（そして質量や、力や、事物などを信じてゐなかつた）故、彼にあつては原因結果に對する信仰が根本的信仰になつた。そしてそれを彼は、何物かの起る場合いつでも應用する。今尙ほ本能的に、また最も古くからの隔世遺傳の一片として用ひる。『原因なしには如何なる結果もなし』とか『各の結果が復び原因』とか云ふ命題は、ずつとより狹い命題の概括のやうに思はれる――『働きのなされる處には、意欲されてゐた』とか、『働きは意欲的存在に於てのみなされ得る』とか、『一の働きの純粹な、成果なき經驗といふやうなものは決してなく、寧ろ總ての經驗が意志（行爲や、防衛や、復讐や、返報なぞへの）の刺戟である』とか云ふ命題の概括のやうに思はれる。しかしながら人類の原始時代に於ては、此命題と彼命題とは同一義であつた。前者は後者の概括でなく、寧ろ後者が前者の説明であつた。シ・オペンハウエルは、存在するところの一切は意欲す

る何物かに外ならぬといふ彼の假定で以て、一の原始的神話を玉座に持ち上げた。彼は決して意志の解析を試みたやうに見えない。なぜならば彼は各の人と同樣に、總ての意欲の單純性と直接性とを信じてゐたから。ところで意欲は要するに歡察の目を殆んど逃れ去るほど、それほど實習された一の機構にすぎないのだ。私はシ・オ・ペンハウエルのに對して次ぎの命題を持出す。曰く、第一に、意志が成立する爲めには、快不快の一の表象が必要である。第二に、一の激烈な刺戟が快もしくは不快として感じられるのは、通譯的理智の事柄である。そして其理智は勿論大抵の場合我々にまでそれで以て無意識に働く。そして同一の刺戟が快若しくは不快として通譯され得るのである。第三に、快や不快や意志があると云ふのは、唯だ理智的存在に於てのみの事である。機構の恐ろしき多數は、さうした種類の何物をも有しないのである。

一二八

祈禱の價値。——祈禱は、實際自分自身の考といふものを有しないやうな人々、また魂の高擧が知られずにゐる、若しくは氣附かれずに通り過ぎてしまふやうな人々の爲めに發明されてゐる。此等の人々は神聖なる場所に於て、また休息や品位のやうな物を要求する、生活のあらゆる重要な地位に於て何を爲さねばならぬか？　彼等が少くとも攪亂しないことの爲め、大小を論ぜず總ての宗教の開祖の睿智は、彼等に祈禱の方式を命じた——記憶努力を伴つた、そして手や足や目の均一な規定通りの態度を伴つた、脣の久しき器械的勞働として！　その時彼等は西藏人の如く彼等の om mane padme hum を幾度となく反芻したり、或はベナアレスに於ての如く、神の名をラム・ラム・ラム（と云ふ具合に、雅致を加へて、或は加へずに）共指に數へたりしていい。或は彼シュヌウに其千種の呼名を以て、アラアに其九十九種の呼名を以て呼ばはり崇めていい。或は彼等は祈禱車や珠數を用ひていい。要は彼等がかうした仕事に少時の間繫縛されて居り、我慢の出來る位な外觀を呈して居ると云ふことにあるのだ。彼等の祈禱は、自分自身の思想や高擧を知つてゐるところの信心深き人々の便利を思つて工夫されたものである。そして此等の人々すらも其倦怠の時間を有つ——崇敬すべき言葉や聲の一列や敬虔なる一機構が彼等を益するとき。しかし乍ら、此等の希なる人々——何れの宗教に於ても宗教的な人間は除外例である——が自ら助くることを知つてゐるとしたところで、それらの心の貧しき者共は自ら助くることを知らない。そして彼等に祈禱のぶつぶつを禁ずるといふのは、彼等から其宗教を奪ひ去るのである——それを新教主義が愈々明らかにしてゐる如く。宗教は、彼等が目や、手や、脚や、あらゆる種類の器官で以て安靜を保つてゐるといふことより以上を、彼等から要求しない。と

れによつて彼等は一時の間なりともより美しく、また――より人間に近いものになるのである！

一二九

神の條件。――『神自らも賢き人々なしには成立し得ない』とルウテルが言つた。そしてもつとも
な言葉である。けれども『同様に、神が賢からぬ人々なしにも成立し得ない』ことを、善きルウテル
は言はなかつた！

一三〇

一の危險なる決意。――這の世界を、醜く惡しきものに見出さうとする基督教的決意が這の世界を
醜く惡しきものにしたのである。

一三一

基督教と自殺。――基督教は其成立の時代に於て巨怪であつた、自殺に對する願望を、其力の槓杆
として使用した。それは自殺の唯だこの形式をのみ殘し、それに最高の品位と最高の希望とを纏はせ、
爾餘一切のものを恐ろしき方法に於て禁止した。けれども殉教と禁欲者の緩漫なる自己滅却とは許さ
れてゐた。

一三二

基督教に反對して。――今日では、もはや我々の理窟でなく、我々の趣味が基督教に反對して決定
する。

一三三

公理。――人類がいつもいつも倒れかからねばならぬところの一の避くべからざる假説は、長い間に
は、何等かの不眞實なものに對する最も善く信じられた信仰（基督教的信仰の如き）よりも、一層强
大である。玆に長い間とは、今から十萬年もさきへかけての謂ひである。

一三四

犧牲者としての悲觀家。――生存に對する深刻な不快が優勢になるとき、ある民族が久しく犯して

ゐた大なる攝生上の過誤の影響は明白になる。乃ち佛教の傳播流布は（その成立でなく）、かなりの部分まで、印度人の過度な、殆んど除外的な米食、及びそれに規定される一般的、虚弱化に據るものである。思ふに近代の歐羅巴的不滿足は、我々の祖先が、中世全體が、歐羅巴に於ける白耳曼的嗜好の影響の下に、飲酒へ委ねられてゐたといふ事實に基因するものと見做されていいだらう。中世とは、歐羅巴のアルコオル中毒の謂ひである。生活に對する獨逸的不興は、本質的に云ふと寒がりの病弱である——獨逸の住屋に於ける窖的空氣や煖爐の毒なぞの影響をも計算の中に入れて。

一三五

罪惡の起源。——罪惡はそれが今、基督教の支配してゐる、もしくは曾つて支配した何處でも感得されてゐる如く、一の猶太人的感情であり、一の猶太人的發明品である。そして總ての基督教的道德のかうした背景に關して云へば、實際のところ基督教は全世界を『猶太人化』することを志したのである。如何なる程度にまでこれが歐羅巴に於て成功したかは、希臘の古事物（罪惡感情のない世界である）が今尚ほ我々の情感に對して有つところの緣遠さ——幾時代かをぶつ通して、しかも多くの傑れた個人が缺いでゐなかつたところの、近接や同化へのあらゆる好意にも係はらず——の程度に於て、最も精密に跡づけられる。『汝が悔いる時にのみ神は汝に惠みを垂れる』——かくの如きは希臘人にまで一の笑であり、もしくは怒りである。彼は言ふであらう、『奴隷こそ然う云ふ具合に感じ得たであらう』と。此處にはある權力者が、全能者が、しかも復讐好きな者が豫定されてゐる。彼の力は、名譽の點に關してのほか、如何なる傷害も彼に加へられ得ないほど强大である。各の罪惡は名譽毀損であり、Crimen laesae majestatis であつて、それ以上のものでない！　悔恨や、貶下や、塵埃の中に展轉反側することは、彼の寵恩の支配される最初にして最終なる條件である。乃ち彼の神聖なる名譽の恢復である！　より罪惡と共に他の傷害が惹き起されるとも、病氣の如く人間を順次捕へて縊り殺すところの、深刻な傳播性の禍惡それと共に植附けられるとも、それはこの名聲好きな天上の東洋人を惱まし煩はさない。罪惡は彼に對する侵犯であつて、人類に對するそれでない！　彼が其寵恩を贈つたところの者にまで彼は、罪惡の自然的結果についての斯うした無頓着さをも贈る。神と人類とは、畢竟人類に對しての罪惡なるものがあり得ないほど、それほど離れた、それほど反對したものと考へられてゐる。如何なる行爲も、ただ其超自然的結果をのみ問はるべきで、其自然的結果を問はるべきでない。總ての自然なものを本來下らないものに思ふ猶太人的感情は、斯樣に意欲するのである。これに反して希臘人は、罪過もまた品位を有ち得ると云ふ考により、親近してゐる——プロメトイスの場合

に於ける如く盜奪すらも、アヤアクスの場合に於ける如く、狂暴な嫉妬心の表白としての、家畜の屠殺すらも。彼等は其罪過に品位を附與し體現しようと云ふ要求から、悲劇を發明した。悲劇こそは猶太人が、あらゆるその、壯美への詩人的天分嗜好にも係はらず、最も深刻な本質に於て近づき得なかつたところの藝術であり悅樂である。

一三六

選ばれたる民族。――猶太人は諸の民族の間に自らを選ばれたる民族として感じた。しかも其理由は、彼等が諸の民族の間の道德的天才である（他のどの民族よりも、自分自身の中なる人間をより深く輕蔑したところのあの能力によつて）からだというのである。這の猶太人は彼等の神聖なる君主や聖徒等に於て、丁度かの佛蘭西の貴族等がルイ十四世に於て經驗したのと、類似したところの享樂を經驗した。此等の貴族は、彼等のあらゆる力や獨裁權の彼等から取上げられてしまふのに任した。そして侮蔑すべきものになつてしまつた。これを感じないことの爲めに、これを忘却し得ることの爲めに、比類なき王者的光輝が、王者的權威と權力感情とが必要だつた。そしてそれには唯だ貴族だけが近づき得られた。此特權に從つて自らを宮廷の高い處へ持ち上げ、そこから總ての者を眼下に見下ろしながら、總ての者を蔑視した。そして良心のあらゆる刺戟を超越してしまつた。かくて彼等は故意に王者的權力の塔を愈々雲井遙かに突き上げ、そして自己の權力の最終の屋根石をその上に置いた。

一三七

比喩にて語られたる。――耶蘇基督の如き人物は唯だ猶太の風景のやうな所に於てのみあり得た。私は、その上に絕えず憤り怒つたエホバの陰慘崇高な雷雲の垂れ懸つてゐるやうな風景の事を謂ふのだ。斯う云ふ場所に於てのみ、恐ろしき、汎き、打ち續く夜陰の日を通して、一道の日光が希に突如として落ち來るのが、『愛』の奇蹟として、最も勿體ない『寵恩』の光線として感じられた。斯う云ふ場所にのみ基督は彼の虹や、神が人間へ降りて來るときの梯を夢想することが出來た。他の場所ではいづこでも、明るい天氣や太陽は、あまりにも當り前の有りふれた事と思はれたであらう。

一三八

基督の誤謬。――基督教の開祖は、人間がその罪惡の爲めに苦むほど、何物の爲めにも苦まないと思つた。これは彼の誤謬であつた。自らを罪惡なしに感じたところの、此點に經驗を缺いでゐたとこ

ろの人の誤謬であつた！　かくて彼の魂は、罪悪の發明者なる彼の民族の間にすらも、滅多に困厄でないやうな困厄にあてはまつたところの、あの驚くべき幻想的な慈悲心に充たされた！　しかしながら基督教徒等は、あとで彼等の先生を公平に扱ひ、彼の誤謬を聖化して『眞實』にしてしまつた。

一三九

欲情の色。――使徒ポオロの如き性情の人々は、欲情に對して意地悪い目を有つてゐる。彼等は欲情から唯だ穢いもの、不恰好なもの、落膽させるものをのみ知るのである。されば彼等の理想的目的は欲情の滅却といふことである。神聖なものに於て彼は、欲情からの全き純潔を見るのである。ポオロや猶太人等とは全く異つて、希臘人等は彼等の理想的目的を丁度欲情の上に向けた。そして欲情を愛し押し上げ、鍍金し、神様にした。欲情に於て彼等が明白に、より幸福に自分を感じただけでなく、他の場合より純潔に神聖にも感じた。そして今基督教徒等は？　彼等は此點に於て猶太人にならうと欲したか？　彼等は恐らくそれになつたのか？

一四〇

餘りに猶太人的。――神にして愛の對象にならうと欲したならば、彼は先づ自らを審判と司法とに委しなければならなかつたであらう。審判者は、そして慈仁なる審判者すらも、決して愛の對象でない。基督教の開祖は此點に於て十分に精緻な感じをもつてゐなかつた――猶太人として。

一四一

餘りに東洋的。――！如何に？　人間を愛するところの神が豫定した――人間が彼を信ずるといふこと、又この愛を信じない者に、恐ろしき眼光と脅威とを投げつけるといふことを！　如何に？　全能なる神の感情として、條件附きの愛とよ！　名譽の感情や、苛立たしき復讐心をすら統御し得なかつた愛とよ！　斯うした總てが如何に東洋的であるよ！　『私が汝を愛するならば、それが汝に何であらう？』は既に、基督教全體に對する十分なる批評である。

一四二

乳香。――佛陀は言ふ、『汝の恩惠者に媚びるな！』と。人をして此箴言を基督教の教會の中に反復せしめよ。それは直にすべての基督教的な物の空氣を淨化するであらう。

一四三

多神教の最も大なる功利。――個人が自分自身の理想を樹て、それから彼の律法や、彼の悦樂や、彼の權利を抽き出して來るといふことは、これまで恐らく、あらゆる人間的迷誤の最も巨怪なものとして、又偶像崇拜その物として見做されてゐた。實際に於ても、これを敢てしたところの若干の人々は、いつも自分自身にまで一の辯解をすることを必要に感じてゐた。其辯解は通例次ぎのやうなものである。曰く、『私ではない！　私ではない！　寧ろ私を通じて一人の神なのだ！』神々を創造する、多神教の驚くべき藝術及び力に於ての事であつた――斯うした衝動が自らを釋放することを許されたのは、又それが自らを純化し、完成し、高貴にしたのは。なぜと云つて、それは本來我儘や、不從順や嫉妬なぞに近い、卑俗な下らない衝動であつたから。自分自身の理想への這の衝動に敵對する――これが昔は各の道義の律法であつた。そこには『人間』といふ唯だ一の軌範があつた。そして各の民族は此一の物を、そして最終の軌範を有つてゐるやうに思つた。しかしながら自分自身の上に、自分自身の外に、遠き超世界に人は、軌範の夥しき數を見ることが出來た。或る神は他の神の否定もしくは冒瀆でなかつた！　ここに人は始めて個性を許された。ここに人は始めて個性の權利を尊重した。神

神や、勇者等や、あらやる種類の超人等の、並びに並存人、降存人の、侏儒や、妖精や、ツェンタウルや、サアティルや、鬼物魔物なぞの發明は、個性の私欲や自主の辯明に對する貴重なる豫習であつた。人が他の神々に對して或る神に許したところの自由を、人は終に律法や風習や隣人に對して自分自身にまで與へた。これに對して一神教は、或る正常人の教説の峻烈なる這の歸結は、從つて或る正常神に對する這の信仰（その神を他にしては唯だうその僞りの神だけがあるといふ）は、恐らくこれまでの人類の最も大なる危險であつたらう。我々の見得る限りに於て、大低の他の動物種屬がとつくに到達してゐるところのあの早過ぎる停止が、その時人を脅かしたのである――その大低の他の動物種屬はいづれも彼等の種屬に於ける一の正常動物及び理想を信ずるところの、そして習慣の道義を決定的に血肉に飜譯したところのものとして。多神教には人間の自由精神と衆多精神との雛形が置かれてゐる――自己の爲めに新しき固有なる目を創造し、いよいよ新しき、更により固有なる目を創造する力が。乃ちあらゆる動物の中、ただ人間にとつてのみ、如何なる永久の地平及び眼界といふやうなものもないのである。

一四四

宗教戰爭。――民衆の最も大なる進歩は、今日までのところ宗教戰爭であつた。なぜと云つてそれは、民衆が畏敬の念を以て概念を取扱ひはじめたことを證據立てるからである。宗教戰爭は、諸宗派の精緻なる論爭によつて一般の理性が精緻にされる時、はじめて起るものである。乃ち愚民共さへも理窟好きになり、つまらない事柄を重要視するやうになる。然うだ、『魂の永久の救ひ』が概念上の小差別によつてきまるといふことを可能と思ふやうになるのである。

一四五

菜食主義者の危險。――無暗矢鱈に米食をやつてゐるのは、阿片や麻醉劑の使用へ走らせるものである――無暗矢鱈に馬鈴薯を食べてゐるのが、ブランデエの使用へ走らせるのと同じ具合に。しかし乍らそれは、より精かな影響に於て、麻醉的に働くところの思考及び情感方法へも走らせる。これは麻醉的な思考及び情感方法の奬勵者が、それらの印度の教師等と同じく、純菜食的な攝生的飲食を頌讃し、それを民衆の律法にしようとするのと相應してゐる。彼等はかくして、彼等が充たしてやることの出來る要求を喚起し增進しようと欲するのである。

一四六

獨逸人の希望。――希くは我々をして、民族の名稱が通例惡口からの渾名であるといふことを忘れしめるな。例へば韃靼人は其名稱の由來から云へば『犬』である。斯樣に彼等は支那人から命名されたのである。『獨逸人』は本來『異教徒』を意味する。斯樣にゴス人は彼等の改宗の後、彼等の受洗せざる同類族の大なる集群を呼んだ――七十人譯聖書の彼等の飜譯の手引によれば。そして其內ではあの異教徒が、希臘語に『諸民族』を意味するやうな言葉で以て記されてゐる。（ウルフィラスを見よ）。獨逸人が歐羅巴に於ける最初の非基督教的民族になり、彼等の舊い渾名から追加的に一の立派な名稱を作り出すといふのは、今尙ほ可能の事であるかも知れぬ。彼等の名譽にまでシ・オペンハウエルは、彼等がその目的に對し大に資格のあるものであると見た。かくしてルウテルの事業は完成に到着したであらう――非羅馬的であるべく、又『ここに私は立つてゐる！　私は他に致し方もない！』と語るべく、彼等に教へたところのルウテルの事業は。

一四七

問と答と。——今日未開の民族は、最も先づ歐羅巴人からして何を受け取るか？　歐羅巴人の麻醉藥なる、プランデエと基督敎とを。そして何の爲めに彼等は最も速く滅亡するか？　歐羅巴的な麻醉劑の爲めに。

一四八

何處に宗敎改革が起るか。——大なる敎會腐敗の時代にも、獨逸の敎會は最も少く腐敗してゐた。されば此そ其處に宗敎改革が起つたのだ——腐敗の發端すらも堪へがたく感じられたといふことの徵證として。けだし比較的に云ふと、曾つて如何なる民族もルウテル時代の獨逸より以上に基督敎的でなかつたのである。彼等の基督敎的文化は丁度、さまざまのきらびやかさで花を開かうとしてゐたのである。唯だ、もう一夜が缺けてゐただけだ。けれどもそれが、一切に結末をつけたところの暴風雨をもたらした。

一四九

宗敎改革の失敗。——希臘人のより高き文化に對して、かなり早い時代に於てすらも、新しき希臘的宗敎を建設しようといふ試みが幾度となく失敗したことを語られてゐる。隨分夙くからさへ色々な個性の夥しき數が希臘にあつたに相違なく、その色々なる困厄が信仰及び希望の單一なる處方を以て治すべくもなかつたことを語られてゐる。ピタゴラスやプラトオは、恐くはエムペドオクレスも、そして既にずつと夙くオルフォイス的狂熱家等も、新しき宗敎を建設することを志した。そして初めに擧げた二人は、彼等の失敗をいくら怪んでも怪み足りないほど、それほど純粹な宗祖的資格をもつてゐた。しかるに彼等はやつと宗派を立てるところまでしか到着しなかつた。一民族全體の宗敎改革が失敗して、只だ宗派だけが其頭を持上げる度毎に、人々は推定してかまはない——その民族が已に甚だ多樣になつて居り、粗惡な群畜本能や風習の道義から自らを釋放し始めてゐると云ふことを。それは人々が道義的頽敗及び墮落として誹謗するのを通例とするところの——卵の成熟と卵殼の間近き破裂とを告げ知らしてゐるのだが——重要なる浮沈情態である。ルウテルの宗敎改革が北方に於て成功したのは、北方が歐羅巴の南方におくれてゐたこと、そして尙ほかなりに一樣な一色の要求をもつてゐたことの一徵證である。そして南方舊世界の文化が、漸次日耳曼蠻族の血を極度にまで混入することによつて野蠻化され、その文化的優勢をなくしてしまつたのでなければ、歐羅巴の基督敎化といふことは全然あり得なかつたであらう。個人なり個人の思想なりが、普遍的に無條件に働き得れば働き得るほど、

働きかけられる民衆は、愈々一様であり、愈々低劣であらねばならぬ。そして對立的追求は、自らをも滿足させ實現させようと欲する內的の對立的要求を露呈する。反對に、有力な覇氣ある性質の人物がただ狹隘なる宗派的効果を收めるに過ぎないときは、いつでも文化の實際的向上を推定して差支ない。これはそれぞれの藝術に對しても、知識の領土に關しても通用する。支配されてゐるところには、民衆がある。民衆のあるところには、奴隷制に對する要求がある。奴隷制のあるところには、個性はただ僅かしかない。そして彼等は彼等自身に反對する群畜本能と良心とを有つてゐる。

一五〇

聖徒の批評。——そもそも人は一の德を有つ爲めに、正しくその最も獸的な形に於てそれを有つことを欲はねばならぬか？　——基督教の聖徒等が意欲し需要したごとく。彼等の德を目にすれば、各人が自己侮蔑にとらはれると云ふ考へを以てのみ、人生に堪へ得たところの人々として。だが、かくの如き効果をもつた德を、私は獸的と呼ぶのである。

一五一

宗教の起源に就いて。——形而上學的要求は宗教の起源で（シ・オペンハウエルの然うありたいと思ふやうに）なく、寧ろそれの後芽であるにすぎない。我々は宗教思想の支配の下に、一の『他の（かなたの、下の、上の）世界』と云ふ觀念に慣れてゐる。そして宗教的迷妄の破却により不愉快な空虛と窮乏とを感ずる。そして今此感情から再び『他の世界』が生ひ立つて來る。しかしながら今は、形而上學的な世界たるに止まり、もはや宗教的な世界でない。ところで原始時代に、一般に一の『他の世界』の假定へ導いたのは、衝動や要求なぞでなく、寧ろ一定の自然現象の理解に於ける誤謬であり、理智の困惑であつた。

一五二

最も大なる變化。——あらゆる事物の光輝と色とが變化した！　我々はもはや、如何に古代人が最も近きもの最も屢々なるものを感じたかを理解しない——例へば晝や覺醒情態などを。古代人が夢を信じてゐたことの故に、覺醒情態の生活は彼等にまで異つた光を有つてゐたのである。そして、死の反映やその意義を伴つた生の全體も同樣である。我々の『死』は一の全く異つた死である。すべての閱歷が異つた光を放つた。なぜと云つて、一人の神がその內から照らしたから。遠き未來へのあらゆ

る決心や洞見も同様だ。なぜと云つて、人々は詭宣や秘密の暗指を有し、豫言を信じたから。『眞實』は異つた感じかたで感じられた。なぜと云つて、以前は亂心者が其代辯者と見做されてゐたから――我々をして慄然たらしめ、若しくは噴き出さしめる事なのだが。各の不法が異つた影響を感情の上に及ぼした。なぜと云つて、人々は神聖な報復を恐れたから、そして啻だに法律上の刑罰や恥辱を恐れただけでないから。人々が惡鬼や誘惑者なぞを信じた時分、何が悦びであつたかよ！　人々が魔物の近くに待ち伏せてゐるのを見た時、何が欲情であつたかよ！　疑ひが最も恐ろしき種類の有罪として、又實に永久の愛に對する犯行として、善き高き清き慈悲深き一切の物に對する不信として感じられた時、何が哲學であつたかよ！　我々は事物に新しく彩つた。我々はいつもその上に畫いてゐる。しかしながら、あの老先生の華麗な彩色に比べると、今のところ我々は何をなし得るか！　老先生とは、古代の人間性の謂ひである。

一五三

Homo poeta（詩人としての人間）。――『私自身が、すつかり自分の手でこの悲劇の悲劇を作つた――それが完成されてゐる限りに於て――ところの私が。私が、道德の紛糾を始めて生存へ絡みつけ、かくして唯だ神のみが解き得るほど引緊めてしまつた――げにホラアツがそれを要望してゐる！　――ところの私が。私自身が今第四幕に於て總ての神々を赦してしまつた――道德の爲めに！　今第五幕に於て何が爲さるべきか！　何から更に這の悲劇的解決を取り來るべきぞ！　私は一の喜劇的解決について考量し始めねばならぬか？』

一五四

人生の種々なる危險性。――汝等は、何を汝等が經驗するかを全然知らない。汝等は酩酊したやうになつて人生を走りぬけ、折々一段位轉がり落ちる。しかし乍ら、汝等の酩酊のお蔭で、汝等はその際四肢を挫かない。汝等の筋肉は餘りに衰弱し過ぎて居る、汝等の頭腦は餘りに朦朧とし過ぎて居る――我々他の者が見出すだけ硬く、その階段の石を見出すべく！　我々にとつては、人生が一のより大なる危險である。我々はグラスで出來てゐる。我々が互にかち合つたならば、ああ！　そして、我我が倒れるならば、一切が失はれるのである！

我々に缺けてゐるもの。――我々は大なる自然を愛する。そしてそれを發見した。それは、我々の頭の中に大なる人間が缺けてゐるからの事である。希臘人の場合は異ふ。彼等の自然感情は我々のそれとは別なものである。

一五六

最も有力な人間。――ある人間が其時代全體に抵抗し、それを戸口に堰きとめて糺問するといふことは、一の影響を及ぼさずにはゐない！　彼がそれを欲すると否とはどうでもいい事だ。要は、彼がそれを爲し得るといふ點にある。

一五七

Mentiri（嘘をつく）。――注意せよ！　彼は考へ込んでゐる。直ぐに彼は嘘をつく用意が出來るであらう。これは諸の民族全體の立つてゐた文化の一階段である。希くは、羅馬人が Mentiri（嘘をつく）と云ふ言葉で以て何を表白したかを考へて見よ！

一五八

不便な特質。――あらゆる事物を深刻に見出すといふのは、一の不便な特質である。それは絶えず彼の目を緊張させ、終にはいつも、見出したいと思つたより以上の物を見出させるやうになる。

一五九

各の德が其時を有する。――現在頑强であるところの人間に對し、彼の正直が往々にして良心の苛責を經驗させる。なぜと云つて、頑强は正直のもてる時代と、異つたある時代の德なのだから。

一六〇

德との交渉にかて。――人は德に對しても又、下品でありおべつかつかひであり得る。

一六一

時代の嘆美者へ。――脱走した僧侶と破獄した犯罪者とは、いつもしかみつつらをしてゐる。彼等

の欲するのは、過去のない顔附きといふものである。しかしながら汝等は、將來がその顔に映ずることを知つてゐるところの、又彼等が將來のない顔をするほど、汝等『時代』の讃美者に對してそれほど慇懃であるところの人々を、汝等は曾つて見たことがあるか？

一六二

自己中心。——自己中心は、近くの物がよつて以て大きく重く見える——遠くへ行くにつれて總ての事物の大きさと重さとが減少するのだが——やうな、情感の上の遠近法的法則である。

一六三

一の大なる勝利の後。——一の大なる勝利に於ける最も善きものは、それが一の敗北に對する恐怖を勝利者から取り去つてしまふといふことである。『何故私は一邊も負かされて見ないのか？』と彼は自ら言ふ、『私は今やそれに堪へるべく十分に富んでゐる。』

一六四

休息を求むる人々。——私は、休息を求むるところの人々を、彼等が周圍に置くいろいろの暗黑なる事物によつて認識する。眠らうと思ふ人は、その室をくらくし、或は洞穴へ匐ひ込む。自分が本當に何を最も多く求めてゐるかを知らない、そのくせ知りたがつてゐるところの人々に對する一暗示である！

一六五

あきらめてゐる者の幸福に就いて。——何物かをすつかり、そして久しい間あきらめてゐた人は、偶然再びそれに出會すとき、殆んど、自分がそれを發見したもののやうに想像する。そして各の發見者が如何なる幸福を有することぞ！　我々をして同じ日向にあまりに久しく横はつてゐるところの、それらの蛇よりも賢明にあらしめよ。

一六六

いつも我々自らの社會に。——自然や歴史の中で、私と齡を同じくする總ての物が、私に話しをしかけ、私を賞讃し、私を驅り立て、私を慰藉する。他の物を私は聞かない、或は直ぐに忘れてしまふ。

我々は常に唯だ我々の社會にのみあるのである。

一六七

人間嫌ひと愛と。――我々は、人間を最早消化し得ないのに、尙ほ且つ胃袋一杯にそれを有つてゐる時にのみ、人間にあきてゐると云ふ。人間嫌ひは、餘りに熱望的な人間愛、『人間食ひ』の結果である。しかし乍ら我が王子ハムレットよ、誰が汝をして人間をも牡蠣を食ふ如く食はしめたか？

一六八

或る病人に就いて。――『彼はひどく困つてゐる！』――何が足りないのだ？――『彼は賞讃されたいといふ渴望をわづらつてゐる。そしてその渴望を醫すべき何物をも見出さないのだ。』――解らない話だな！　世界中が彼を崇めまつつてゐる。人々は手で以てかつぐだけで足らず、脣でもかついでゐる！　――『それや然うだ。けれども彼は賞讃に對して惡い聽覺をもつてゐる。あの友人が彼を賞讃すると、彼には友人が自分自身を賞讃してゐるかのやうに聞える。あの敵が彼を賞讃すると、彼には敵がそれに對して賞讃されたがつてゐるかのやうに聞える。最後に爾餘の誰かが彼を賞讃すると（それはあまり多數でない。それほど彼は有名なのである！）、彼は氣を惡くする。なぜならば、彼等が彼を友人にも敵にももちたがつてゐないのだから。彼は言ふのを常とする、『私に對して尙ほ公平無私の如き態度を取り得るやうな人間は、私にまで何の意味があらう！』

一六九

公然の敵。――敵の前へ出ての勇敢はそれだけの物である。それがあつても尙ほ且つ人は腰ぬけであり、優柔不斷な狼狽者であり得る。かくの如くナポレオンは、彼に知られたる『最も勇敢な人間』ムラアに關して意見をのべた。かう考へて來ると、公然の敵は多くの人々にとつて缺くべからざるものである――彼等にして彼等の德にまで、彼等の男らしさと快活さとへ向上せねばならぬならば。

一七〇

群衆と共に。――彼はこれまで群衆と共に歩つてゐる。そして彼等の讃美者である。しかし乍ら他日彼は彼等の敵手であるだらう！　なぜと云つて彼は、彼の怠惰さがそれによつて利益するだらうと云ふ信仰に於て、群衆に從ふのだから。彼はまだ群衆が彼にとつて十分怠惰でないことを知らなかつ

た！　それがいつも前方へ押し出して行くといふことを！　それが立ち停まることを何人にも許さないことを！　そして彼は隨分立ち停まることを悅ぶ方なのである！

一七一

名聲！　一人に對する多數人の謝恩が總ての羞恥を放棄するとき、そのときは名聲が成立する。

一七二

趣味の壞敗者。——(A)、『汝は趣味の壞敗者である——かく人々が到處で言つてゐる！』(B)、『たしかに！　私は各人の其黨派に對する趣味を壞敗する。それを如何なる黨派も私に恕してくれない。』

一七三

深くあることと深く見えることと。——自らの深きことを知つてゐる人は、明瞭を得るやうにと努める。群衆に深く見えたがる人は、朦朧を得るやうにと努める。なぜと云つて、群衆は底の見られない一切の物を深いと思ふのだから。彼等はまことに臆病であり、水に入ることをまことにいやがる。

一七四

離れて。——議會主義、換言すれば、五個の根本的な政治上意見の間に選擇をなすことの公然的許可は、かの自立的にまた個性的に見えたがる、そして其意見の爲めに戰ふことを希ふところの多くの人々の氣に入る。けれども要するに、群畜の上に一の意見が强ひられると、五個の意見が許されるとはどうでもいい事だ。その五個の公然的意見を避け、離れて進み行くところの人は、常に群畜全體を敵にする。

一七五

雄辯に就いて。——誰が今日まで最も說服的な雄辯を有つてゐたか？　太鼓の音である。そして王達がこれを掌中に握つてゐる限り、彼等はいつでも最善の演說家であり民衆煽動家である。

一七六

同情。——憐なる統治者の君主等よ！——あらゆる彼等の權利は今意外にも要求に變化する。そして

あらゆる此等の要求は、間もなく僭望の如く聞える！　そして彼等が唯だ『我々は』と言つたり、『我が民衆』と言つたりするだけでも、意地悪の老歐羅巴は微笑する。げに、近代世界の禮式家の一巨匠は、彼等に對して格別の禮式を行はないだらう。そして恐らくは宣明するであらう――les souverains rangent aux parvenus（君主等は成上りものと伍する）と。

一七七

教育事項にまで。――獨逸に於て高級の人々に大なる教育資料が缺けてゐる。即ち、高級の人々の笑ひが。獨逸に於て此等の人々が笑はないのである。

一七八

道德的開明にまで。――獨乙人等は彼等のメフィストオフェレスを諫止されねばならぬ。同じく彼等のファウストをも。これは認識の價値に反對した二の道德的先入見である。

一七九

思想。――思想は我々の情感の影である――後者よりも常により曖昧な、より空虛な、より單純な。

一八〇

自由思想家にとつての宜しき時。――自由思想家は科學の前でさへも尙ほ且つ其自由を取る。そして當分のところそれを與へられてゐる――教會が尙ほ立つてゐる限り！　その程度に於て彼等は今、彼等の宜しき時を有つてゐるのである。

一八一

從ふと先つと。――A、『二者の中、一は常に從ひ、他は常に先つであらう――運命が彼等を何處へ導くのであらうとも。尙ほ且つ前者は其德と其理智とによつて、後者の上に立つ！』B、『尙ほ且つとや？　尙ほ且つとや？　それは他の人々の爲めに言はれてゐる。私の爲めにでなく、我々の爲めにでなく！――Fit secundum regulam』

一八二

孤獨の中にあつては。——人が單だ獨りで生活してゐるとき、彼はあまり高い聲で話さない。あまり高い聲で書くことをもしない。なぜと云つて、彼は空洞な反響を恐れるから——ニムフ山彦の批評である。そして孤獨の中にあつては、總ての聲が異つて聞える。

一八三

最も善き將來の音樂。——私に取つては第一の音樂者は、唯だ最も深い幸福の悲みをのみ知つて、そのほかの如何なる悲みをも知らないところの人であらう。これまではさう云ふ音樂者はなかつた。

一八四

司法。——案山子を周圍に有つよりも、寧ろ盜む者の盜むに委せよ。これが私の趣味だ。そして總ての事情の下に、それは趣味の問題であり、それ以上の何物でもない！

一八五

貧乏。——彼は今日貧乏である。けれども、總ての物が彼から奪ひ去られたからでなく、寧ろ彼が總ての物を投げ棄てたからである。何を彼が意に介しようぞ？　彼は新しく見出すに慣れてゐる。彼のすき好んでする貧乏を誤解するのは貧乏人共である。

一八六

惡しき良心。——彼が今爲すところの總ては、天晴であり當りまへである。尙ほ且つ彼は、それに際して惡しき良心をもつ。なぜと云つて、當りまへでないことが彼の仕事なのだから。

一八七

表白に於ける「いやなもの」。——此藝術家は、彼が着想を、彼のまことに結構な着想を表白する場合の仕方によつて私を不快にする——彼が愚衆に語つてゐたかの如く、左樣に容態ぶつて、左樣に調子を張つて、左樣に粗惡な說得の技巧を以て。我々は彼の藝術にささげたどれだけかの時のあとで、いつも『下等な連中と一緒にゐた』かのやうに感ずる。

一八八

勞働。――勞働と勞働者とが今日、我々の中の最も閑な者にすらも如何に近く立つてゐることぞ！『我々は悉く皆勞働者である！』と云ふ言葉の中なる王者的禮讓は、ルイ十四世の下に於てすらも、一の譏笑であり無作法であつたらう。

一八九

思想家。――彼は思想家である。云ひ換へれば彼は、事物があるよりも單純にそれを取ることを心得てゐる。

一九〇

讃美する者に反對して。――A、『人は唯だ彼と同等な人々からのみ讃美される！』B、『さうだ！　そして君を讃美する者は君に言ふ、「君は私と同等だ」と！』

一九一

多くの辯護に反對して。――一の主張を傷害する最も意地惡なやり方は、故意に間違つた論據で以て辯護することである。

一九二

人の善い男。――好意が顏から輝いてゐるやうなそれらの人の善い男と、他の人間とを區別するものは何か？　彼等は新しき人物の前にゐて窮屈に感じない。そして直ぐにその人物を好きになる。彼等はそれ故に彼に好意をもつ。彼等の最初の判斷は『あの人は私に氣に入つた』である。彼等にあつては次ぎのものがあとさきに相續く。同化の願望や（彼等はその人物の價値についてあまり疑をさしはさまない）、大急ぎの同化や、所有の悦びや、所有された者に都合の好い行動が。

一九三

カントのキット。――カントは『皆の人』を面喰はしたやうな仕方に於て、『皆の人』が間違つてゐないことを證明しようとした。これはあの人の內密なキットであつた。彼は民衆の先入見に都合よく、學者に反對して書いた。けれども學者に讀ますやうにで、民衆に讀ますやうにでなく。

一九四

『あけつぱなしの』人。——あの人は恐らく常に包みかくした動機から行動してゐるであらう。なぜと云つて、彼は常に傳達の出來る動機を舌の上に、又殆んど打ち開いた手の中に持ち廻つてゐるから。

一九五

笑ふべきかな！——見よ！　見よ！　彼は人々から逃れて行く。しかるに彼等は、彼が彼等の先きに立つて走つてゐるといふので彼を追ふ。かくまでに彼等は群畜なのである？

一九六

我々の聽覺の限界。——我々はただ、我々の答へを見出し得るやうな問ひをのみ聞く。

一九七

されば用心せよ！——我々は緘默の封印（それよりつまらない物と共に）のほか何物をも、それほどよろこんで他人に分たない。

一九八

自尊者の懊惱。——自尊者は、彼を前方へ運び出してくれるものどもからさへも、懊惱を經驗させられる。彼は其馬車の馬を忌々しげに打ち眺める。

一九九

氣前のよさ。——氣前のよさは金持の場合、往々にして臆病の一種たるに過ぎない。

二〇〇

笑。——笑とは、やましさを感じずに、意地惡であることの謂ひである。

二〇一

喝采には。——喝采にはいつも一種の喧噪がある——我々が我々自身に拂ふところの喝采にすらも。

二〇二

浪費家。——彼はまだ、其全財寶を一度計算して見たことのある金持のあの貧しさといふものを有たない。彼は自然といふ浪費家の非理性で以て其精神を浪費する。

二〇三

Hic niger est.（此人は黑い）。——通例彼は如何なる思想をも有しない。けれども例外的な場合には、惡い思想が彼にやつて來る。

二〇四

乞食と作法。——『ベル牽きの缺けてゐるとき、石で以てドアを叩くのは、決して無作法でない』——乞食やあらゆる困窮者は斯樣に思つてゐる。しかしながら何人も彼等を正しいと認めない。

二〇五

需要。——需要は成立の原因と見做されてゐる。實際には、それが往々にして成立した物の結果にすぎないのである。

二〇六

雨ふる間。——雨がふる。私はかの貧しき人々の事を思ふ。それは今、彼等の多くの苦勞をもつて、そしてそれを包み隱す練習なしに寄り集まつてゐる。從つて各人が他人を苦めるべく、そして惡しき天氣にすらもみじめな種類の深切を示すべく、待ち受けて居り心掛けてゐる。これが、ただこれだけが貧しき人々の貧しさである！

二〇七

嫉妬深き人間。——あれは嫉妬深き人間である。彼に子供のあることは願はしくない。彼は子供に對して嫉妬するであらう——彼がもはや子供であり得ないといふわけで。

二〇八

偉大なる人物！――ある者が『偉大なる人物』であるといふことから、彼が一人前の人間であると推理するのは許されない事だ。思ふに彼は一少年であり、或はあらゆる年輩の一カメレオンであり、或は蠱惑されたる一少女であるに過ぎないであらう。

二〇九

理由を問ひ尋ねる一の仕方。――我々の理由を問ひ尋ねる一の仕方がある。それによつて我々は、ただに我々の最善の理由を忘却するのみでなく、總じて理由に對する反抗心や反感が我々の中に目覺めて來るのを感ずる。非常に人を愚鈍にするところの問ひかたであり、正しく專横なる人々の詭計である。

二一〇

勤勉に於ける節度。――人は其父の勤勉を凌駕しようと心掛けてはならぬ――それは人を病氣にする。

二一一

祕密の敵。――祕密の敵を保持し得るといふのは、高貴な精神をもつた人の道德すらも、減多に許容しかねるほどの贅澤である。

二一二

欺かれないこと。――彼の精神は行儀が悪い。それは性急で、いつも苛立たしさの爲めに吃る。そこで人々は、如何に呼吸の長い胸廓の廣い魂の中にそれが住んでゐるかを、殆んど洞察しないのである。

二一三

幸福に至る道。――或る賢い人が或る愚なる人へ、幸福に至る道の何であるかをたづねた。愚かなる人は躊躇しないで答へた――次ぎの町へ至る道をたづねられた人のやうに。『汝自身を嘆賞して街上に生活せよ！』と。『休めよ』と賢き人は叫んだ、『汝は餘りに多くを要望する。汝自身を嘆賞するだけ

で十分だ！』愚かなる人は答へた、『けれども、絶えず侮蔑することなしに、人はどうして絶えず嘆賞することが出來るか？』

二一四

信仰が救ふ。――徳はただ、その徳に對し善き信仰を有する人々にのみ、幸福と一種の救ひとを與へる。しかしながら、その徳が自分自身及びすべての徳に對する深刻なる不信に於て成立するやうな、それらのより精緻なる魂には與へない。乃ち要するに、ここでも『信仰が救ふ』のである！　そして善く觀察して見れば、徳が救ふのでない！

二一五

理想と材料と。――汝は一の高貴なる理想を目の前に有つてゐる。けれども汝は又、汝からそんな神聖な像が作られ得るほど、高貴なる石であるか？　そしてこれなしには、總ての汝の仕事が一の野蠻なる彫刻でないか？　汝の理想の一の濆冒でないか？

二一六

聲に於ける危險。――非常に高い聲を以てしては、殆んど精緻な事柄を思考し得られないものである。

二一七

原因と結果。――結果のあとよりも結果の前に、人は他の原因を信ずるものである。

二一八

私の反感。――私はかの、効果を及ぼすことの爲めに、爆彈のごとく爆發せねばならぬやうな人々、そして其近くにゐる人間がいつも、突然聽覺を若しくはそれ以上の物を失くすることの危險に置かれるやうな人々を好まない。

二一九

刑罰の目的。――刑罰は、刑罰を加へるところの人間をより善くするといふ目的を有つてゐる。これが刑罰の辯護者にとつて最終の逃げ場所である。

二二〇

犧牲物――犧牲物と犧牲をささげる事とに附いては、犧牲獸が見物と異つた考へかたをしてゐる。しかしながら、人は曾つて彼等をして其考をのべしめたことがない。

二二一

愛惜。――父親達と息子等とは、母親達と娘等とが互に愛惜し合ふよりも、ずつと餘計に愛惜し合ふのである。

二二二

詩人と嘘つき。――詩人は嘘つきに於て彼の乳兄弟を見る。その乳兄弟から彼は乳を呑み取つてしまつたのである。されば、嘘つきはみじめなものにされたままで居り、善き良心にさへ來ないで居る。

二二三

感官の代理。――『我々は聞く爲めに目をも有つてゐる』と、聾ひになつた老人の聽白僧が言つた。『そして盲人の間には、最も長い耳をもつた王樣がゐる。』

二二四

禽獸の批評。――禽獸共は人間を彼等自身と同じやうな物――非常に危險な仕方に於て健全なる禽獸的悟性をなくしてゐるところの――に思つてゐるかも知れない。彼等は人間を氣の變になつた禽獸、笑ふ禽獸、泣く禽獸、不幸な禽獸と思つてゐるかも知れないのである。

二二五

自然なもの。――『惡なものは常に自らにして大なる効果を及ぼした！　そして自然は惡である！　されば我々をして自然なものであらしめよ！』かくの如く、大なる効果の渇望者等は內密に推論する――あまりに屢々大なる人物の中に數へられたところの彼等は。

二二六

信用しない人々と其様式。――我々は最も強い事柄を單純に言ふ――我々の強さを信ずるところの人々が、我々の周圍にゐるならば。かくの如き周圍は『様子の單純』へ敎へ導いてくれる。信用しない人々は切言的に言ふ。信用しない人々は切言的にする。

二二七

誤斷、誤斷。――彼は自らを支配し得ない。そこでかの婦人が、彼を支配するのは容易であると論決する。そして彼を捕へるべく索を投げかける。間もなく彼の奴隷になるであらう可哀相なものは。

二二八

調停者に反對して――二の截然たる思想家の間に調停して見ようとする人間は、平凡と云はるべきである。彼は比類なきものを見る爲めの目を有たない。似寄つたものにしてしまひ、均等なものにしてしまひたがるのは、弱い目の特徴である。

二二九

頑強と忠實と。――彼は頑強から、彼にまですつかり見通しになつてしまつた事物に執著する。けれども、彼はそれを『忠實』と云つてゐる。

二三〇

緘默の缺乏。――彼の全存在が說得し得ない――といふのは、彼が自分のなしたる善き行爲について、かつて緘默してゐなかつたことの結果である。

二三一

『根本的な』人々。――認識ののろい人達は、そののろさが認識其物の一部でもあるかのやうに思つてゐる。

二三二

夢。――人は全然夢を見ないか、でなければ面白い夢を見るかである。人は同じやうにして覺醒情態にゐることを學ばねばならぬ――全然覺醒情態にゐないか、でなければ面白く其情態にゐるか。

二三三

危險なる見地。――私が今なす、或はなさざるところの物は、總ての來るべきものにとつて、過去の最も大なる事件だけそれだけ重要である。斯うした異常なる結果觀よりすれば、すべての行爲は同じやうに大であり小である。

二三四

或る音樂者の慰めの言葉。――『汝の生活は人々の耳に響かない。彼等にとつて汝は啞の生活を生活してゐる。そしてメロディイのあらゆる精やかさは、追隨もしくは先行に於けるあらゆるやさしき決心は、彼等からかくされてゐる。成るほど汝は、聯隊音樂を以て大通りを練り歩かない。しかし乍ら此の爲めに善良なる人々は、汝の閲歴が音樂に缺げてゐると言ふべき、何等の權利をも有しないのである。』

二三五

精神と性格。――多くの人々は性格として彼の頂上に到達する。しかしながら彼の精神は丁度さうした高さに順應してゐない。そして多くの人々は反對に。

二三六

群衆を動かす爲めには。――群衆を動かさうと思ふ者は、彼自身の俳優的演出者たることを要しないか？　先づ彼自身を奇怪に明白なものに飜譯し、彼の人物及び事由全體をかうした粗惡化と單純化とに於て持ち出すことを要しないか？

二三七

禮儀正しい人。――『彼は左樣に禮儀正しい！』然り、彼は常に地獄の三頭犬にやる一口分の食物を携へて居る。そして、誰彼の差別なく、汝を私をさへ三頭犬だと思ふ位に臆病である。これが彼の『禮儀正しさ』なのだ。

二三八

嫉妬心のない。——彼は全然嫉妬心なしである。けれども其點に何等のお手柄もない。なぜと云つて彼は、何人もまだ所有しなかつたやうな、又人が殆んど見たこともないやうな土地を征服しようと思つてゐるのだから。

二三九

悅びのない人間。——たつた一人の悅びのない人間は、ある家の內全體を、絕間なき不快と陰暗な天とにしてしまふべく十分である。そして斯うした人間のゐないといふことは、唯だ奇蹟によつてのみ起る！　幸福は全くこんなにまで傳染的な病氣でない——これはどう云ふわけか？

二四〇

海邊に。——私は如何なる家をも建てないであらう（そして如何なる家の所有者でもないことが、私の幸福に屬してゐる！）。しかしながら、どうしても建てなければならぬならば、私は多くの羅馬人と

同じく、海へ突き出してまで建てるであらう。私はあの美しい怪物と共に若干の祕密を分ちたいのである。

二四一

作品と藝術家。——此藝術家は功名心に燃えてゐる。そしてその上の何物でもない。結局彼の作品は、彼の方を見てくれる各人に彼が提供するところの一擴大鏡たるに過ぎない。

二四二

Suum cuique ——私の認識欲が如何に燼であらうとも、私は、既に自分に屬するよりほかの何物をも、事物から取り上げることが出來ない。他の所有物は依然として事物の中を去らないでゐる。ある人間が竊盜もしくは强盜であるといふのは、如何にしてあり得る事ぞ！

二四三

『善』『惡』の起源。——『これは善でない』と感じ得る人間のみが、一の改善を案出するのである。

二四四

思想と言葉。——人は其思想をすらすつかり言葉にしてしまふことが出來ない。

二四五

選擇に於ける賞讃。——藝術家は彼の材料を選擇する。これは彼の賞讃のしかたである。

二四六

數學。——我々は數學の精嚴を、苟くも可能である限り、總ての科學へ持ち込まうと欲する——我がその方法に於て事物を認識するだらうと云ふ信仰からでなく、むしろ事物に對する我々の人間的關係を確立することの爲めに。數學は一般的な、そして最終の人間的知識の手段たるに過ぎない。

二四七

慣習。——總ての慣習は我々の手を氣轉のきいたものにし、我々の氣轉を手ぬるいものにしてしまふ。

二四八

書物。——曾つて我々を總ての書物のむかうへ連れて行つてしまはないやうな書物が何にならうぞ？

二四九

認識する者の嘆息。——『おお、私の貪慾よ！　此魂の中には如何なる無私もない。むしろ一切を熱望するところの一の自己がある。それは彼の目を通しての如く多くの個人を通して見、彼の手を以ての如く捕へたいとねがふ。過去の全體をすら持ち返るところの一の自己で、苟くも彼に屬し得たる何物をも失ふまいとする！　おお、私が色々の物の中に再生させられたらば！』經驗からして此嘆息を知らないところの人間は、認識する者の欲情をも知らないのである。

二五〇

罪過。――巫女の最も聰慧なる審判者も、加之巫女自身すら巫術の罪過を信じてゐたとは云へ、尙ほ且つ罪過は存在してゐなかつた。かくの如き事情は、總ての罪過の場合にあるのである。

二五一

誤傳されたる苦患者。――偉大なる性格の人々は、彼等の崇拜者等が想像するのと異つた苦みかたをする。彼等は多くの惡しき瞬間の賤劣な、下らない興奮によつて、換言すれば自己の偉大さに對する彼等の疑ひによつて、最も峻酷に苦む。けれども彼等の仕事が彼等から要求するところの犧牲や殉教なぞによつてでない。プロメトイスが人間と苦患を分ち、彼自らを彼等にささげる限り、彼は彼自身の中に幸福であり得意である。けれども彼がツォイスや、彼に人間のささげる服從やを嫉ましくなるとき、其時彼は苦患する！

二五二

寧ろ借りたままで。――『我々の姿を刻まれない貨幣で以て拂ふより、寧ろ借りたままにして置くことだ！』かくあれかしと我々の君主は欲ふ。

二五三

いつでも家にゐるやうに。――いつか我々は我々の標的に到達する。そして其時、そこへ行くまでに我々が如何に長い旅をしたかを、得意になつて說く。實際のところ我々は、我々の旅をしたことを心付かなかつた。我々は丁度その故に、我々が何處ででも家にゐるやうに思ふところまで來たのである。

二五四

困惑に反對して。――いつもすつかり沒頭しきつてゐる人間は、いかなる困惑をも超越してゐる。

二五五

模倣者。――(A)、『如何に？ 汝は如何なる模倣者をも欲しないか？』(B)、『私は、人が私のあとから何かをすることを欲しない。私は、各人が自らにさきだつて何かをする――丁度私がしてゐるやうに――ことを欲する。』(A)、『從つて――？』

二五六

皮相性。——深みをもつた總ての人々は、一たび飛ぶ魚を眞似、波頭に遊び戯れることに彼等の幸福をもつてゐる。彼等は事物に表面のあることが、それらの事物の皮相性が——Rit venin verbo(この言葉が許されてあれかし)——それらの事物に於ける最善なものだと思つてゐる。

二五七

經驗から。——多くの人は、彼が如何に富んでゐるかを知らない——如何なる富んだ人々が彼に對して尙ほ且つ泥棒になるかを經驗するまでは。

二五八

偶然の否定者。——如何なる勝利者も偶然を信じない。

二五九

樂園から。——『善惡は神の先入見である』と蛇が言つた。

二六〇

いん・いち・が。——一人は常に間違つてゐる。けれども二人と共に眞實が始まる。一人は自らを證明し得ない。けれども二人は既に辯駁され得ない。

二六一

獨創。——何が獨創であるか？ すべての目の前に横つてゐるとは云へ、まだ何等の名稱をもつてゐない、まだ名稱を與へられ得ないやうな何物かを見ることだ。人間といふものの通有性からして、ある事物を彼等に見えるやうにする第一のものは名稱なのである。獨創的な人々は大抵命名者でもあつた。

二六二

Sub specie aeterni. ——、(A)『汝は愈々より速かに生きてゐる者共から遠かる。やがて彼等は汝を彼等

の名簿から抹殺し去るであらう！』——(B)、『それは死んだ者共の特權にあづかるべき單だ一の手段である。』——(A)、『如何なる特權に？』——(B)、『もはや死なくともいいといふ特權に！』

二六三

虚榮心なしに。——我々が愛するとき、我々は我々の缺陷が包み隱されたままでゐることを欲ふ——虚榮心からでなく、寧ろ、愛された者に苦患させたくない爲めに。然うだ、愛する者は神樣のやうに見えたいとねがつた——そしてこれも虚榮心からでなく。

二六四

我々の爲すところのもの。——我々の爲すところのものは決して理解されない。むしろ常に賞讃されたり非難されたりするだけである。

二六五

最終の懷疑。——さらば結局人間の眞實は何であるか？　それは人間の反駁し得られない誤謬である。

二六六

殘忍の必要なる場合。——偉大をもつた人間は、其第二段の德及び商量に對して殘忍である。

二六七

大なる標的を以て。——大なる標的を以てすれば、人は司法をも超えてゐる——ただに彼の行爲や彼の司法官等を超えてゐるだけでなく。

二六八

何が勇者的にするか？——同時に其最高の苦患と其最高の希望とへ立ち向ふことが。

二六九

何を汝は信ずるか？——あらゆる事物の重要さが新しく決定し直されねばならぬといふことを。

二七〇

汝の良心は何と言ふか？――『汝は、汝があるところのものにならなければならぬ。』

二七一

汝の最大の危險は何處にあるか？――憐憫に。

二七二

汝は他人に於て何を愛するか？――私の希望を。

二七三

誰を汝は惡しき人と云ふか？――常に恥ぢしめようと欲するところの人を。

二七四

汝にとつては何が最も人情にかなつてゐるか？――各の人に恥かしい思ひをさせないこと。

二七五

獲得されたる自由の封印は何であるか？――もはや自分自身を恥かしく思はないこと。

第四書

サンクトゥス・ヤヌアアリウス

汝は焰の鎗を以て、
私の魂の氷を寸斷する。
氷は泡起して今、
その最高の希望の海へ急ぐ——
いよいよ晴れやかに、健かに、
最も愛らしき拘束の中に釋放されて。
斯くてそれは汝の奇蹟を讃美する、
汝、最も美しきヤヌアアリウスよ！

——一八八二年一月、ゲヌアにて——

二七六

新しき年に對して。——尙ほ私は生きてゐる、尙ほ私は考へる。私は尙ほ生きなければならぬ。私は尙ほ考へなければならぬから。Sum, ergo cogito: cogito, ergo sum.（我あり、故に我は思ふ。我は思ふ、故に我あり）。今日では各人が、其願望と最愛の思想とを表白することを自らに許してゐる。乃ち私もまた言ひたい——私が今日私自身に對して何を願望したかを、又如何なる思想が今年先づ私の胸中を通り過ぎたかを、如何なる思想が私のあらゆる今後の生活の基底であり、擔保であり、甘味であらねばならぬかを！　私はいよいよ多く、事物に於ける必然性を美として見ることを學ばうと思ふ。かくして私は、事物を美しくするところの人々の一人になるであらう。Amor fati（宿命に對する愛）。これをして今より後私の愛であらしめよ！　私は醜きものに對して如何なる戰をも開かうと欲しない。私は彈劾しようと欲しない。私は彈劾者を彈劾しようとすらも欲しない。看過をして私の唯一の否定であらしめよ！　そして、これを要するに、畢竟するに、私は今後如何なる場合にも唯だ肯定者ばかりありたいとねがふのである！

二七七

個人的攝理。――我々の生涯には或る一の高頂がある。我々がそれに達した時、あらゆる我々の自由にもかかはらず、又如何に我々が存在の美しき混沌にあらゆる思慮深き理性や善良を拒否したらうとも、尙ほ且つ我々は今一應理智的不自由の最大危險の中にゐる。そして我々の最も苦しき試練に面しなければならぬ。乃ち今は、一の個人的攝理に對する考がはじめて最も銘刻的な力を以て我々の前に立ち現れ、それの爲めに最善なる代辯者と、外見を有つてゐる――我々にぶつかる一切が、一切の物が、絶えず最善なものになるといふことを明白にしてゐる今は。各の日各の時の生活は、いつも唯だ此命題を新しく證明し直すことのほか、何物をも意欲してゐないやうに見える。それが何であつてもいい。惡い天氣もしくは善い天氣であつても、ある友人を失くしたことであつても、病氣であつても、惡口を言はれたことであつても、手紙の來ないことであつても、足を挫いたことであつても、棚を一瞥したことであつても、一の論爭であつても、ある書物を開けて見たことであつても、夢であつても、欺瞞であつても、兎に角それは立處に、或は其後間もなく、『なかるべからざる』ものであつたことを證據だてられる。それは丁度我々にとつての深い意義と効用とに充ちてゐるのである！　そ

こにより危險なる誘惑があるか？　――エピクウルの神々に、あの投げやりな知られざる神々に對する信仰を放擲すべく、そして我々の頭髮の一本一本をすら親しく知つて居り、最も下らない奉仕にも何等の嫌惡を感じないやうな、何等かの周到なる、つまらない神を信仰すべく。今――私は斯うして總てにもかかはらず謂つてゐる！　我々は神々を、それから世話好きな守護神等をも打つちやつて僅かうと思ふ。そして、事件を說明したり整理したりする上の、我々自身の實際的及び理論的巧妙が今、其高頂に達してゐるといふ假定で以て滿足しようと思ふ。我々は我々の睿智の斯うした練達を餘りに高く考量したくもない――我々の樂器を弄ぶに際して起る不可思議なハルモニイが折々餘りにも甚だしく我々を驚かすとき。それを我々自らに歸すべく、餘りに善美すぎるほどに響くところのハルモニイが。全くのところ、折々或る者が我々と共に彈奏する――親愛なる偶然が。彼は時あつて我々の手を導く。そして全智なる攝理も、そのとき我々の愚かなる手が爲し得るより以上に、如何なるより美しき音樂をも工夫し得なかつたのである。

二七八

死に對する思想。――街衢や、需要や、聲音の斯うした混亂の中に生活するのは、私に一の憂鬱的

な幸福を與へる。如何に多くの享樂や、苛立たしさや、熱望が、如何に多くの渇したる生活や生活の陶醉が、刹那々々に現れて來ることぞ！　尙ほ且つ、總ての斯うした嗔噪する者、生活する者、生活を渇望したる者にとつて、間もなく左樣に靜かになるであらう！　如何に各人の背に彼の影が、彼の暗き道連が立つてゐることぞ！　それはいつも、移住船の出帆の前の最終の瞬間に於てのやうである。人々はお互にこれまでより以上に物を言はなければならぬ。時は迫まる。大洋とその荒涼たる沈默とは、總ての喧噪の背に苛々しながら待つてゐる——左樣に貪婪に、その獲物の手にはいることを左樣に確信して！　そして一同は、一同は謂ふ——これまでが皆無或は僅少であつたことを、近き將來が總てであることを。そしてそれ故に此急ぎが、此叫びが、此自己擊倒と自己瞞着とが！　各人が此將來に於ける第一人者でありたいとねがふ。しかし、死と死の靜けさとが此將來に於ける、唯一の確實なものであり、一同に普遍的なものである！　斯うした唯一の確實なもの普遍的なものが、人々の上に殆んど何等の影響するところなきは、彼等が自らを死の同胞として感ずることから最も遠くはなれてゐるのは、如何に奇異なることぞ！　人々が死に對する思想を全く念頭に置くまいとするのを見ることは、私を幸福にしてくれる！　私は生に對する思想を彼等にまで更に百倍も思考の値あるものにすべく、よろこんで何等かの事をなしたいのである。

二七九

星辰的友情。——我々は友人であつた。そして路傍の人になつてゐる。しかしながらこれはあるべきやうにあるのだ。我々はそれを恥ぢねばならなかつたかの如く、それを包み匿したり曖昧にしたりしたくない。我々は二の船である。その何れもが各自の標的と各自の進路とを有つてゐる。我々は前になしたる如く、恐らくお互に横斷し合ひ、一諸になつて一のお祭りをするかも知れない。そして其時健氣なる船は、それが既に標的へ來て居り、一の標的をもつて居つたやうに見えたかも知れないほど、それほど安らかに一の港に、一の日光の中に横つてゐた。しかしながら其時、我々の仕事の全能なる力は再び我々を、色々の大洋と地帶とへ散々にした。そして恐らく我々は、お互に二度ともう見ないであらう。恐らくお互に見るであらう。けれどもお互に二度ともう認識しないであらう。色々の太洋や日光が我々を變へてしまつたのである！　我々が路傍の人にならねばならなかつたのは、我々の上に立つ法則である。丁度それによつて、我々はお互にまでより尊敬すべきものにならねばならぬ！　丁度それによつて、我々の昔の友情に對する考は、より神聖にならねばならぬ！　恐らくは一の巨大なる、目に見えぬ曲線や星の軌道があり、そこでは我々の左樣に異つた道筋や標的が、小さな

道程として計量されるかも知れない。我々をして斯うした考にまで我々自らを持上げしめよ！　しかしながら我々の生涯は餘りに短く、我々の視力はあまりに乏しい――我々があの崇高なる可能性の意義に於て友人より以上のものであり得べく。かくて我々は、お互に地上の敵であらねばならなかつた時にすらも、我々の星辰的友情を信じようと欲するのである。

二八〇

認識する者の爲めの建築。――我々の大なる都市に特に何が缺げてゐるか、これについての洞察が必要である。恐らくは間もなく必要になるであらう。即ち、缺げてゐるのは靜かな、廣い、廣々とした思索の場所である。惡い天氣とか餘りに日當りの善すぎる天氣とかの爲めに、高い長い柱廊をもつた場所で、そこへは車馬や呼報者の如何なる噪音もはいつて來ない。より上品な行儀が僧侶にすらも聲高な祈禱を禁ずるであらう。その建物や組立は、全體として沈思隱遁の壯美を表白してゐるであらう。教會が思索の獨占權を有したやうな時代、vita contemplativ（思索生活）が常に先づ vita religiosa（宗教生活）であらねばならなかつたやうな時代は去つてゐる。そして教會の築いた一切のものが此考を表白してゐる。私は如何にして、それらの物の建築に滿足し得べきかを知らない。それらの物が教會的な職能を剝奪された時にすらも。此等の建築は神の家として、超世間的交通の壯麗な場所として、餘りに哀切すぎ、窮屈すぎる言葉をのべる――我々神をなみする者共がその内に我々の考を與へ得る爲めには。我々は我々自らが石や草木になつてゐたらばと思ひ、此等の講堂や庭園の中を彷徨するとき、我々自らの中を散策したらばとねがふ。

二八一

結末を見出すことを知る。――第一流の名人達は、大きなものに於けると小さなものに於けるとを問はず、完全な仕方で結末を見出すことを知るといふことによつて認められる。それが一のメロディイの、若しくは一の思想の結末であらうとも、それが悲劇の、若しくは國事の第五幕であらうとも。第二流の名人達は結末へ來ていつも不安になる。そして減多に、例へばボルト・フィノに於ける山脈――そこでは、ゲヌアの入江が其メロディイを結末まで歌つてゐる――の如く、左樣に昂然たる、安らかなる均衡に於て海へはいり込まないのである。

二八二

歩きぶり。――偉大なる精神の所有者等すらも、彼等が賤民の、或は半賤民の出であることを暴くやうな、精神上の態容があるものだ。暴露するのは特に、彼等の思想の歩きぶり足どりである。彼等は歩き得ないのである。即ちナポレオンも彼自ら大に忌々しがつた事乍ら、君主らしく且つ『合法に』歩くことが出來なかつた――戴冠式の行列なぞに於ける如く、本當にそれを心得てゐなければならぬ場合に。その場合にも彼は矢張り一縱隊の司令官たるに過ぎなかつた――揚々として、同時にそはそはとして、しかも自らようくこれを意識して。その時代の襞ある衣服を身邊にそよがせるところのそれらの著作者を見るのは笑ふべき事である。彼等は斯くして其足をかくさうとするのである。

二八三

先驅者。――特に勇敢を再び光榮あるものにするやうな一のより男性的な、一の戰士的な時代がはじまることを告げ知らす總ての徵標に私は敬意を拂ふ！　なぜと云つて、それは一の更により高き時代に對して道を開き、其時代が他日要するであらうやうな力を集めてやるわけだから――英雄主義を認識の中に持ち込み、思想や其歸結の爲めに戰端を開くやうな時代に對して。その目的に對しては今日、多くの先驅をなすところの勇敢なる人々が必要である。しかしながらそれらの人々は何でもない物から生じて來るわけに行かぬ。そして同樣に、今日の文明や大都市の文化の土芥からも生じて來ない。彼等は沈默してゐて、寂寥にゐて、決然としてゐて、目に見えぬ活動の中に滿足し持久して行くことを心得てゐる。彼等は內的性向を以て、彼等に於て克服さるべきものを、總ての事物の中に求める。彼等にまで快活や、忍耐や、敦樸や、大なる虛榮の侮蔑なぞが特有であるのは、勝利に於ける安量や、あらゆる敗北者の小なる虛榮に對する寬容が特有であるのと同樣である。彼等は總ての勝利者に對し、各の勝利や名聲に於ける偶然の持分に對し、銳利な自由な判斷をもつた人々である。自分自身の祝祭や、自分自身の仕事日や、自分自身の服喪期間をもつた人々で、命令することに慣れて居り、危氣がない。そして同じく、必要の場合服從することを待ち受けてゐる――一の場合他の場合と同樣に昂然として、同樣に自分自身の事由に奉仕しながら。彼等はより危くされた人々、より恐ろしき人々、より幸福な人々である！　なぜと云つて、私の言ふことを信ぜよ！　――最大の生產力と生存の最大享樂とを收穫する祕訣は、危險に生活するにあるのである！　ヱスウヴの山腹に汝等の市を築け！　汝の船を未踏の海に送れ！　汝等に等しき者共と、又汝等自らと戰の中に生きよ！　汝等が支配者所有者であり得ない限り、盜賊であり劫掠者であれかし、汝等認識する者よ！　臆病な牡鹿の如く森の中にかくれて生きることが、汝等に十分であり得たやうな時代は間もなく過ぎ去るであらう！　終に

認識は手を、それに屬する物の方へ差し伸べるであらう。それは支配し所有しようとねがふであらう——そしてそれと共に汝等がまた！

二八四

自分自身に對する信仰。——一體に僅かな人々が自分自身に對する信仰をもつてゐる。そして此僅かな人々の中或る人は、一の有用な盲目もしくは眞理智の部分的晦冥として其信仰を賦與されてゐる（彼等にして彼等自身の奥底へ見入ることが出來たならば、彼等は何物を認知するであらうぞ！）。他の人は其信仰を先づ自分で獲得しなければならぬ。彼等の爲すすべての善良なるもの、有爲なるもの、偉大なるものは、何よりも先づ彼等の内に住んでゐる懐疑家に對しての駁論である。要はこの懐疑家を説得説服するにある。そして此目的の爲めに大抵天才が必要になる。彼等は大なる自己不滿家なのである。

二八五

Excelsior！——『汝はもはや此上祈らず、此上禮拜せず、此上無限の信任に於て安息しないであらう。汝は一の最終の智慧、最終の善、最終の力の前に立ちどまり、汝の考を取り脱してしまふことを拒否する。汝は汝の七の寂寥に於て、如何なる持續的の番人をも友人をも有しない、汝は頭に雪を、胸に火熱をもつてゐる或る山への望見なしに生きてゐる。汝にとつては最早如何なる報復者もなく、最終の手をもつた如何なる改善者もない。起つて來る事物の中にもはや如何なる理性もなく、汝に起つて來るであらう事物の中に如何なる愛もない。汝の胸にはもはや如何なる安息所もない。そこにはただ見出すことを要するだけで、求めることを要しないのである。汝は何等かの最終の平和に對して自らを防衛する。汝は戰爭と平和との永久の回歸を意欲する。斷念の人よ、汝は總ての斯うしたものに於て斷念しようとねがふか？　誰がそれを爲す力を汝に與へるであらうか？　まだ何人も此力を有つてゐなかつた！』一の湖水があつて、一日流れ出ることを拒否した。そしてこれまでそれが流れ出てゐた場所に一の土手を築き上げた。それ以來右の湖水はいよいよ高くなつて來る。恐らくあのあきらめこそは、あきらめ自體の依つて以て堪へられ得るやうな力をも我々に供給するであらう。恐らく人間は、彼がもはやある神へ流れ去つてしまはないやうな地點からして、いよいよ高く登つて行くであらう。

二八六

枝葉の話。——ここに希望がある。しかしながら、汝等にして汝等自身の魂の中に光輝や溫熱や黎明を經驗しなかつたのならば、汝等はそれらの希望について何を見たり聞いたりするであらうか？　私はただ追想し得るだけだ——それ以上を私はなし得ない！　石を動かしたり、獸を人間にしたりすること——それを汝等は私に求めるか？　ああ、汝等が尙ほ石や獸であるならば、先づ汝等のオルフ・イスを求めよ！

二八七

盲目に對する樂欲。——『私の思想は』と、漂泊者が其影に言つた、『何處に私が立つてゐるかを私に示さなければならぬ、けれども、何處へ私が行くかを暴き知らしてはならぬ。私は將來に關する不確實を愛する。そして苛立たしさや約束された物の豫感によつて滅亡することを欲しない。

二八八

高き情調。——私の見るところを以てすれば、大抵の人々は高い情調を信じない——その場丈けのものでないならば、高々十五分間位のものでないならば。高い感情のより久しき期間を經驗から知つてゐるそれらの少數の人々は別として。しかしながら一の高い感情をもつた人間に、唯だ一の大なる情調の體化になりきつてしまふのは、これまで一の夢であり、魅力をもつた可能であるに過ぎなかつた。歴史はまだそれの如何なるより確實なる實例をも我々に與へない。それにも係はらず、歴史はいつか此の如き人間をも産出し得た——今日では最も幸福なる偶然さへも投げ集めることの出來ないやうな、夥しき有利なる條件が創造され確立された其時に。思ふに、これまで戰慄を以て感得された除外例として、折々我々の魂にもはいつて來たところのものが、それらの將來の魂に通例なる情態となるであらう——高いと深いとの間なる持續的運動と、高い深いの感情とが、踏段を昇るやうにして昇り、又同時に雲の上に息むやうにして息むことの持續的情態が。

二八九

船に乘れ！——各個人に對して、彼の生きかた考へかたの哲學的是認總體が如何に働くか——精しくは溫めるところの、祝福するところの、實らすところの、特殊な光を彼の上にあびせかけるところの太陽の如く——如何にそれが、賞讃や非難から獨立させ、自足させ、富裕にし、幸福や好意を惜まず分けさせるか、如何にそれが絶間なく惡を善に造りかへ、總ての力を開花と成熟とへもつて行き、

憤懣や忌々しさの大きな小さな雑草を生えさせないか、これらの事を考へて見るならば、人々は切願的に叫び出す――おお、多くの斯様なる新しき太陽が更に造られるならば！　悪しき人も、不幸なる人も、非凡なる人も、各自の哲學を、各自の權利を、各自の日光を有たねばならぬ！　彼等への同情は必要でない！　斯うした高慢の出來心を我々は忘れなければならぬ！　これまで左様に久しく人類がそれを學び、それに慣れてゐたのだけれど。如何なる聽悔者をも、降靈者をも、赦罪者をも我々は彼等の爲めに調べることを要しない！　むしろ一の新しい正義が必要だ！　そして一の新らしい解決が！　そして新しい哲學者が！　道德的地球も圓い！　道德的地球も其對蹠人（地球の正反對な面に住する人間）をもつてゐる！　其對蹠人等も彼等の生存の權利をもつてゐる！　そこには尙ほ一の他の世界が發見されねばならぬ――そして一より以上の世界が！　船に乘れ！　汝等哲學者よ！

二九〇

一の物が必要である。――其性格に『様式を與へる』のが、それが偉大なる希なる藝術である！　其天性が强さ弱さに於て呈示する總ての物を呈見し、それからそれを藝術的な企畫に適合させる（各の物が藝術的理性的に見え、弱さも尙ほ且つ目を奪ふまで）ところの人こそ右の如き立派な藝術をなすのである。此處には第二の天性の大なる量が加へられて居り、其處には第一の天性の一部が取り去られて居る――いづれの場合にも、久しき實習と日々の勞作を以て。此處には取り去られない醜がかくされて居り、其處にはそれが壯美に解釋し改められて居る。形式を斥けるところの多くの漠然たるものは、遠望の爲めに貯へられ利用される。それは遠く且つ不可測なものの暗指を與へなければならぬ。結局作品の完成した時、如何にそれが大部小部を問はず支配し形成してゐたところの同一趣味の拘束であつたかは明白になる。其趣味が善いものであつたか惡いものであつたかは、人々の考へるよりつまらない事である。それが一の趣味であると云ふだけで十分なのだ！　斯様なる拘束の中に、自己の法律の下なる斯様なる束縛完成の中に、其最も精やかなる喜びを享受するのは、强き覇氣ある性情の人々である。彼等の激烈なる意欲の熱度は、總ての仕附よき人々、總ての打ち負かされた奉仕の人々の前に出ると減退する。彼等が宮殿を築き、庭園を設けねばならぬときすらも、自然を自由にしてやることは彼等の趣味に適はない。弱い、自分自身の上に權力を有しない、そして様式の束縛を嫌ふやうな性格にあつては反對である。彼等は感ずる――此いとはしき束縛が彼等の上に加へられるならば、彼等がその下に卑俗にならねばならなかつたと。彼等は奉仕するや否や奴隷になる。彼等は奉仕を嫌ふ。かかる理智――それは第一流の理智であり得る――は、自分自身や其周圍を、自由な自然――野

性的な、氣儘な、幻想的な、無秩序な、驚破的な――として形成したり解釋したりすることにいつも心遣ひをする。彼等がさうするのは善い事だ。なぜならば、彼等はたださうしてのみ自分自身をよろこばし得るのだから！　けだし、一の物が必要である。人が自分自身に對する滿足に到達するといふことが必要である――この詩と藝術とを通してであらうとも、乃至あの詩と藝術とを通してであらうとも。唯だ其場合にのみ人は兎に角見るに堪へたものである！　自分自身に不滿足な人は、絶えず其事に對して復讐しようと待ち構へてゐる。我々他の者は、いつも彼の醜き外見を我慢しなければならぬといふ事ばかりならば、彼の犧牲になるであらう。なぜと云つて醜き物を見るといふことは、人を賤しくし陰氣にするものであるから。

二九一

ゲヌア。――私は此市を、此市の山莊遊園地を、また此市の人々の住んでゐる山頂山腹の廣い範圍を、かなり久しい間眺めやつた。結局私は言はなければならぬ――私が過ぎ去つた諸の時代からの容貌を見ると。此地方には大膽な自主的な人々の肖像が撒かれてゐると。彼等は生活した。そして生活し續けることを欲した。かく彼等が、一時の爲めにでなく諸の世紀の爲めに建築され裝飾されたる彼等の家屋を以て私に言ふ。彼等は生活を好きであつた――彼等が屢々彼等自身に對しては如何に意地惡であつたらうとも。私は常に見る――建造者が如何に其目を、遠く近く其周圍に建てられたる總ての物の上に投げ、また市や海や山列の上に投げるかを。如何に此目で以て强制と征服とを行ふかを。斯うした總てを彼は彼の計畫に適應させ、結局それが右の物の一部分になることによつて、それを彼の財産にしようと欲する。此地方全體を、占有及び掠奪欲の斯うした壯大な醫すべからざる利己が蔓り覆うてゐる。そして此等の人々が遠方に於て如何なる境界をも認めず新しき物に對する彼等の渴望に於て、舊き世界のそばに新しき世界を置いた如く、鄕土の內でも矢張り各人か各人に反對して立つた。そして彼の優勝を表白し、自己と隣人との間に彼の個體的無限性を挿入することの方法を案出した。各人は今一度彼の鄕土を自分自身の爲めに略取した――彼の建築的思想で以てそれを壓倒し、また謂はば彼の家のみてくれのいい物にしたことによつて。北方にあつては都市の建造方法を視察するとき、律法や、合法及び服從に於ける一般的な悅樂が威壓を感じさせる。我々はそれに於て、總ての建造者の魂を支配したに違ひない、あの內面的な自己の平等化、自己の秩序化を洞見する。しかるに此處では、どこの角を曲るときにも汝は、海や、冒險や、東洋を知つてゐるある人間自體を見出す。一種の倦怠を嫌ふごとく律法や隣人を嫌ふところの、又既に建設されてゐるもの舊いものの總てを、

怨嫉の目で以て見やるところのある人間を見出す。彼は想像の驚くべき敏慧を以て、斯うした總ての物を少くとも思想上今一度新しく築き直し、彼の手をその上に置き、彼の意味をその上に置き加へようと欲つたであらう――彼の飽くことを知らざる憂鬱的な魂が竟に飽足を想ひ、彼の日に緣なき何物でもなく、唯だ彼自身の物だけが自らを示し得るやうな、ある日當りよき午後の一時の間の事に過ぎないとは云へ。

二九二

道德の說敎者に。――私は如何なる道德をも說かうと欲しない。けれども道德を說かうとする人々に私は次ぎの忠言を與へたい。曰く、汝等にして結局最善の事物と情態とから總ての名譽と價値とを奪はうと欲するならば、是迄通りそれらの物を口にすることを持續せよ！　それらの物を汝等の道德の頂點に置き、朝から晩まで德の幸福に付いて、魂の安息に付いて、正義や內在的の報復に付いて談るならば、汝が斯くして行くにつれて、總ての此等の善き事物は終に名聲と、それ自らに對する街の叫びとを獲るであらう。けれども其時それらの物の上なる總ての金も磨り取られる。そしてそれ以上だ。それらの物の中なる金は鉛に變つたであらう。げに汝等は錬金術の反對技術を、卽ち最も價値ある物の價値をなくすることを心得てゐる！　希くばこれまでの如く、汝等の求めてゐるのと正反對な物を實現しないことの爲め、他のやりかたを遣つて見よ。それらの善き事物を否定し、それらの物から愚衆の喝采と、安易なる運行とを奪ひ去り、それを今一度寂しき魂の蹂されたる羞恥にし、道德が或る禁じられたものであることを言へ！　思ふに斯くして汝等は此等の事物の爲めに、ただそれば かりが何等かの意義を有すると云ふやうな種類の人間を獲るであらう――私は英雄的な人間を意味してゐるのである。しかし乍ら其時それらのものの中には恐怖すべき或物があらねばならぬ。そしてこれまでの如く嘔吐すべき或物があるのでなく！　人は今日道德に關して、マイステル・エックハルトの如く言ひ得なかつたか？――『私は、神が私を神から釋放してくれることを、神に乞ひ求める！』と。

二九三

我々の空氣。――我々は次ぎの事をよく知つてゐる。唯だ散步に於ての如く一瞥を科學にくれるだけである（婦人達の遣方で、又悲むべき事乍ら藝術家等の遣方で）やうな人々、それらの人々に對しては、科學の奉仕の峻嚴や、大事小事に於ける其撓げがたさが、秤量や批判や斷罪なぞに於ける其速かさが、何等かの眩暈恐怖を經驗させる。特に彼を恐れしめるのは、此處に最も困難な事が要求され

ること、最善事が讃美や榮譽を報いられずして爲されることである。軍人共の間に於ける如く、殆んど唯だ非難や譴責のみが聞かれることである。けだし此處ではうまくやるのが原則と見做され、やり、そこなひが例外と見做されるからである。しかしながら、原則は如何なる處とも同じく此處でも、緘默の口をもつてゐる。この『科學の峻嚴』は、最上の社交界の形式や禮儀なぞと軌を一にしてゐる。それは門外漢を恐れしめる。しかし乍らそれに慣れたる人は、此朗らかな、透明な、力强き、强く充電された空氣の中に、この男性的な空氣の中に於てのほか、何處にも生活することを欲はない。他の何處も彼にとつて十分純潔でなく空氣的でない。彼は疑ふ——其處に彼の最善の藝術が何人にも本當に役に立たず、彼自身の悅びにもならぬであらうといふこと、諸の誤解の下に彼の平生が彼の指の間をすりぬけたといふこと、絕えず多くの用心や、多くの隱蔽自制が必要であるといふこと、——大なる無用なる力の損失にほかならないといふことを！　しかしながら此峻嚴明晰なる要素に於て、彼は彼の力を其儘に有つてゐる。此處に彼は飛ぶことが出來る！　何の爲めに彼は、泳いだり涉つたり、獵を汚したりせねばならぬやうな、それらの濁つた水へ再び下りて行くことがあるか！　否！　其處に生活するのは、我々に取つて餘りに困難であり過ぎる。我々が、光線の競爭者なる我々が、空氣の爲めに、純潔なる空氣の爲めに生れたこと、我々が光線の如く最も好んでエエテルの原子に騎り、そして太陽から遠ざからずに、むしろ太陽の力へ騎り行かうとすることを、我々は禁じ得ない！　しかしながら我々は騎り行くことが出來ない。かくて我々は、我々が爲し得る唯一の事をなさうと欲する。即ち、地に光をもたらすこと、『地に光』あらしめようと欲する！　そして其目的に對して我々は我々の翼と、我々の速かさ峻しさとを有つてゐる。その爲めに我々は火の如く男性的である。そして恐ろしくさへもある。我々によつて自らを溫めたり、明るくしたりすることを心得ないやうな人々をして我々を恐れしめよ！

二九四

自然の誹謗者に對して。——その人にあつては、各の自然な傾向が直に病氣になり、何等か醜くするもの或は恥づべきものにすらもなるといふやうなのは、私にまで不愉快な人々である。此等の人々は、人間の傾向や衝動が邪惡なものであるといふ意見にまで我々を誘惑した。彼等は我々の天性に對する、總ての天性に對する我々の大なる不正義の原因である！　自分の衝動へ快適に無頓着に身を委し得る人々はかなりにある。しかしながら彼等は、天性のあの空想されたる『邪惡な本質』に對する恐怖からそれをしない！　その結果、左樣に僅かなる氣高さが人々の間に見出されるのである。其徵

證は常に自分自身に對して何等の恐怖を抱かないこと、自分自身から何等の恥づべきものを期待しないこと、追はるるままに躊躇せずして飛び行くことである――我々自由に生みつけられた鳥が！　苟くも我々の行くところであれば、私々の周圍はいつも自由で日當りがよいであらう。

二九五

短い習慣。――私は短い習慣を愛する。そして多くの事項や情況を學び知る（其甘さ苦さの奥底までも）べき高價を極めた手段と見做してゐる。私の本性は全然短い習慣の爲めに按配されてゐる――その肉體的健康の要求に於てすらも、また苟くも私が見得る限り、最も低級なものから最も高級なものに至るまで。常に私は信ずる、これが今持續的に私を滿足させる（短い習慣も欲情に對するあの信仰を、永久に對する信仰を有つてゐる。そして私はそれを見出し認識したことを羨望されねばならぬ）、そして今それが晝と晩とに私を養ひ、自己の周圍に、私自身の内に深き滿足をまきひろげる。そこで私は、比較したり輕蔑したり憎惡したりする必要なしに、他の何物をも願望しなくなる。さて一日習慣はその時をもつた。善き事物は私から離れる――私に今憎惡を吹き込んだ或る物としてでなく、寧ろ平和に、且つ私がそれに飽きてゐる如く、私に飽きてゐて、又あだかも我々が互に感謝の念を有ち合はねばならず、そしてお別れに手を差し伸べたかの如く。既に新しいものが戸口に待つてゐる。そして同樣に、この新しいもの、最終の正しいものであるといふ私の信仰も――滅ぼしがたき愚人にして賢人なる！　私の場合は、食物や、思想や、人間や、都市や、詩歌や、音樂や、教說や、日課や、生活方法などに關する事が然うなのである。一方では私は持續的な習慣を憎む。そして一人の暴君が私の近くに來るやうに、又私の生活の空氣が濃密になる（持續的な習慣が必然にそれから成長して來る――例へば一の役職によつて、同じ人間との斷間なき交際によつて、一定の住所によつて、いつも同じやうな健康情態によつて――と見えるやうに、事件が形成されるとき）やうに思ふ。げに私は私の魂の奥底から、總ての私の困苦や疾病に、また苟くも私に於て不完全であるほどの如何なるものをも有難く思つてゐる。なぜならばそれらのものは、私がよつて以て持續的な習慣を逃げ出し得るやうな、百の裏口をも私に遺して置くからである。勿論最も堪へがたきものは、本當に恐るべきものは、私にまで全然習慣なき生活、絶えず即興作を要求するところの生活であらう。これが私の追放刑であり、私の西比利亞であらう。

二九六

確乎たる名聲。――確乎たる名聲は從前非常に有利な事柄であつた。そして苟くも社會が尙ほ群畜本能に支配されてゐるならば、各人の性格や其職業に不可變の外見を與へる――それらの物が實際にさうでない時にも――のは、今尙ほ彼にとつて最も適切な事である。『人は彼を信頼することが出來る。彼は變らないでゐる』――これは社會の總ての危險なる情態に於て、最も大きな意義を有するところの賞讃である。社會は信頼の出來る、いつでも待ち構へてゐる道具を此者の德に、彼等の功名心に、第三者の省察や欲情に有つてゐることを滿足に感ずる。社會は意見に於て、努力に於て、又不德に於てすらも、此道具的自然を、この自己操持を、この不可變性を、最高の榮譽で以て立派にする。風習の風敎と同時に到處に榮えてゐるところの、榮えてゐるところの斯樣なる評價は、『性格』を敎育し、總ての變化や、覺え直し、自己變改を不評判にする。他の點で斯うした考へかたの利便がどれほど大きくあらうとも、兎に角それは認識に對して普遍的判斷の最も有害な種類である。なぜと云つて丁度、いつも自分のこれまでの意見に反對して躊躇せず自分を宣明しようとする、又一般に我々の中に固定したがる總ての物を信用すまいとする認識者の好意が、此處に罪をさだめられ評判を惡くされてゐるのだから。『確乎たる名聲』と兩立しないものとしての、認識者の氣持は、不名譽と見做される――意見の化石がそれ自身に對する總ての名譽を有つてゐるとき。斯う云ふ評價の禁制の下に我々は、今尙ほ生活しなければならないのだ！　幾千年期の判斷を自分自身に對して、自分自身の周圍に感ずるとき、生活するといふことが如何に困難であるかよ！　恐らくは、幾千年期の間か認識が惡しき良心に取りつかれてゐたことであらう。又多くの自己侮蔑や內密の困苦が最も大なる理智者の歷史の中にあつたに違ひない。

二九七

矛盾し得る。――各人は今日知つてゐる――矛盾に堪へ得るのが文化の高き標徵であることを。加之、或る人々は知つてゐる――より高き人々が、彼のこれまで知れなかつた不正義に對する一の指示を獲る爲めに、自分自身に對する矛盾を願望したり喚起したりするといふことを。しかし乍ら矛盾し得ることは、慣習的なもの、傳統的なもの、神聖にされたものに對する敵意の中に善き良心をもつてゐることは、それはあの双方のもの以上であり、我々の文化の本當に大なる、新しき、驚くべきものである。解放されたる理智者のあらゆる步程の步程である。誰がこれを知つてゐるか？

二九八

嘆息。——私は此洞察を途上に捕へた。そしてそれが私から再び飛び去らないやうにしつかり押へて置くべく、手近なまづい言葉を慌ただしく取上げた。さて今それは斯うしたばさばさな言葉の爲めに死んでしまひ、その中に垂れ下り搖れ動いてゐる。そして私はそれを見る時、もはや殆んど知らないのである——私がこの鳥を捕へたとき、如何にして私があんな幸福をもち得たかを。

二九九

人は藝術家から何を學ぶべきか。——事物が美しくも惹きつけるやうにも熱望すべくも出來てゐないときの(そして私は、それが本來決して左樣に出來てゐないもののやうに思ふ!)、それを我々にまで左樣なるものにする爲め、我々は如何なる手段を有つてゐるか? 此處に我々は醫師から學ぶべき或物をもつてゐる。例へば彼等が苦觀いものを薄めたり、葡萄酒や砂糖を混鉢に入れたりする時なぞに。しかしながら我々は、斯樣なる工夫と方策とをなすことに、本當に絶間なく從事してゐる藝術家から、更により多くを學ばねばならぬ。人がもはや事物の多くを見ないまで、又多くを更に見る爲め、それを見やらねばならぬまで、事物から遠かるとか、事物を脇から、そして一の切口に於ての如く見るとか、事物が一部分假裝し、ただ遠近法的觀望をのみ許すやうに、事物を配置するとか、着色のグラスを通して、もしくは晩紅の光の中に事物を見るとか、如何なる完全な透明をも有しないやうな表皮を與へるとか、斯うした總ての事を我々は、藝術家等から學び、且つ彼等より一層賢くならねばならぬ。なぜと云つて彼等にあつては、藝術が止まり生活がはじまるところに、通例斯うした彼等の精緻な力がやまるからである。しかしながら我々は、我々の生活の詩人でありたい。そして最も先づ最もつまらない、最もありふれた事柄に於て。

三〇〇

科學の序曲。——抑も汝等は信ずるか? ——科學に對して妖術者や、錬金術者や、占星者や、巫女なぞが先驅をし(彼等の約束や豫想を以て先づ、匿された、及び禁じられた力への渴望や好尚を造らねばならなかつた人々として)なかつたとも、尙ほ且つ科學が成立し成長したであらうことを。然うだ、認識の領域内に於て何物かが實現されることの爲め、かつて實現され得たより、限りなくより多くのものが約束されねばならなかつたことを。思ふに、科學の序曲や豫習が、さう云ふものとして實習されたり感得されたりはしないながらに、此處にそれ自らを表示するのと同じやうな仕方に於て、何等かのかけ離れたる時代に宗教の總體もまた實習及び序曲として現れるであらう。思ふに宗教は、

個々の人間がある神の自己滿足全體と彼のあらゆる自己救濟力とを享樂し得ることの爲めの、特別なる手段であり得たであらう。否！　人は問ひたづねることが出來る。そもそも人間はあの宗教的教養や豫備歴史なしに、自分自身に對する飢渴をあとづけたり、自分自身から飽足を抽き出したりすることを學んだであらうか？　プロメトイスは結局次ぎのやうなことを見出す爲めに、先づ、自分が光を盜んだと空想し、それを贈ふのだと空想せねばならなかつたか？——彼が光を熱望したことに於て、光を創造したといふこと、そしてただに人間ばかりでなく神もまた彼の手の業であり、彼の手の中なる泥土であつたといふことを見出す爲めに。總てが造物者の造物に過ぎなかつた——丁度總ての認識者等の迷想や、偷盜や、カウカススの山や、兀鷲や、プロメトイス悲劇全體と同樣に——といふことを見出す爲めに。

三〇一

思索的な人々の妄想。——高級な人々と低級な人々とを差別するのは、前者が名狀しがたくより多くを見聞し、思考しながら見聞すると云ふことである。そして丁度これが人間を禽獸から差別し、上層の禽獸を下層の禽獸から差別する。世界は、人間らしさの高頂へ生え伸びて行く人々にとつて愈々圓滿になる。そこには愈々より多く興味の釣鉤が彼の方へ投げ出される。彼の刺戟の群は絶間なく增して來る。そして彼の快不快の種別も同樣である。高級な人間はいつもより幸福になると共に、より不幸になるのだ。しかし乍ら其場合、一の妄想が彼の持續的隨伴者として終始する。即ち彼は謂へらく、自ら人生その物の大なる觀物聽物の前に、見物聞手として置かれてゐるのだと。彼は其本性を思索的なものであると云ひ、其際、彼自身が人生の本當の作者であり、續作者であるといふことを看過する。又彼自らが固より此劇の俳優と、所謂實行的人物と非常に異つてゐるけれども、尙ほより多く舞臺の前の單なる觀覽者やお客と異つてゐるといふことを看過する。作者としての彼には、たしかに Vis contemplativa（思索力）と彼の所作への回顧が固有である。けれども同時に、そして最も先づ、實行的人物に缺げてゐる Vis creativa（創造力）が同樣である——外觀や流俗の輿論が如何に云はうとも。まだ存在しないところの事物を、評價や、色彩や、重量や、遠近法や、段階や、肯定や、否定なぞの永久に成長する世界全體を、實際に斷間なく作るのは、我々が考へたり感じたりする者である。這の我々から成されたる作物は絶えず所謂實際的人物（前述の如く我々の俳優等）から學ばれ實習され、血肉と現實とに、否日常事に飜譯される。苟くも現前の世界に於て價値を有するほどのものは、その本性に從つて、それ自體の中に有つてゐるのでない。自然は常に無價値である。むしろそれに一たび

一の價値が贈與されたのだ。そして我々が此贈與者であつた！　我々こそ、人間に何等かの意義ある世界を作つたのだ！　しかし乍ら丁度此智識が我々に缺げてゐる。そして一たびある瞬間にそれを捕へても、次ぎの瞬間にはまたそれを忘れてしまつた。我々は、我々思索的な人間は、我々の最善なる力を誤認し、我々自らを一段低すぎて評價する。我々は我々があり得たほど、それほど得意でもなく、それほど幸福でもないのである。

三〇二

最も幸福な者の危險。――こまやかな感性とこまやかな趣味とを有つこと。正當の手近かな食物に慣れるごとく、精神上の選まれたるもの最善なるものに慣れること。一の强壯なる、大膽なる、敢爲なる魂を享樂すること。常に一の視察を待ち構へるごとく最惡事を待ち構へながら、又見出されざる世界や、海や、人間や、神々に對する願望に充たされながら、安らかな目としつかりした歩調とを以て人生を通りぬけて行くこと。各の快活な音樂に耳を傾けること――あだかも、そこに恐らく勇敢な人々や、軍人や、航海者やが短き休息と悅樂とをなすかの如く、又其瞬間の最も深き享樂の中に涙から、幸福な者の深紅なる憂愁全體から壓倒されるかの如く。かうした總ての事が自己の所有物であり、自己の情況であることを、何人か願はざるものぞ！　それはホメエルの幸福であつた！　希臘人の爲めに彼等の神々を、否自分自身の爲めに自分自身の神々を發明した人の情況であつた！　しかし乍ら我々をして次ぎの事を忘れざらしめよ。魂の中に斯うしたホメエルの幸福を有つてゐるとき、人は太陽の下にあつて最も苦患し易き生物である！　そして唯だ此價を拂つてのみ人は、生存の波浪がこれまで岸邊近く洗つてゐたところの最も貴重なる貝殼を購ふのである！　其所有者として人は、愈々苦痛に對し敏感になり、あまりに敏感になり過ぎる。即ち、一寸した不快や嫌惡でも、結局ホメエルに人生をいやにならすべく十分だつた。彼は年若き漁夫が彼に課したる愚かなる一小謎語を、解き去ることが出來なかつた！　然うだ、かうした小さな謎が最も幸福な者の危險なのである！

三〇三

二人の幸福な者。――げに此人間は、その年若さにもかかはらず、生活の即興作を心得てゐる。そして最も敏感な觀察者をも驚嘆させる。すなはち彼は、絶えず最も冒險的な賭事をやるのだけれど、如何なる失敗をもしないやうに見える。人はあの、聽衆も手の神聖な無過誤を歸したかつた（死ぬべき各の者が過つごとく、彼等も折々過つのにもかかはらず）やうな、即興音樂の名人達を想起させら

れる。しかし乍ら彼等は實習を積んで居り、發明的であり、またいつでも、一彈指一氣色が彼等を驅り立てるやうな最も偶然的な音調を、直ぐに題意にかなつた構造の中に織り入れ、その偶然に美しい意義と魂とを吹き込むべく待ち構へてゐる。ここに全く異つた人間がある。その人には實際、彼の意欲したり計畫したりする一切の事が失敗する。彼が時あつて其心をむけたところのものは、既に幾度か彼を深潭の方へ、沒落の直ぐ近くへ導いた。そして彼の尙ほそれから逃れた場合も、たしかに唯だ『一寸した損害を受けた』だけの事でなかつた。汝等は、彼がその事の故に不幸であると思ふか？　彼は屁く自から、自己の願望と計畫を左樣に重要視しないことの決心をした。『これが私に成功しないならば』と彼は自からに言ふ、『思ふにあれがやがて私に成功するであらう。そして要するに私は、私が何等かの成功に對してより、私の不成功に對してより多く感謝するの義務なきや否やを知らない。私は我武者羅であるべく、牡牛の角を持廻るべく出來てゐるのか？　私にとつて價値及び生活の成果をなすところのものは、ほかの何處かにある。私の誇りは、また同樣に私の悲慘はほかの何處かにある。私は生活についてより多くを知つてゐる。なぜならば私は左樣に屢々それを失はんとしたからである。そして其故にこそ私は、汝等一同より生活のより多くを有つてゐるのである！

三〇四

我々がすることによつて、我々はせずに置く。——實際のところ、『これをするな！　あきらめよ！汝自らに打ち克て！』と言ふ、あの總ての道德は私の趣味に適はない。これに對して私はあの道德をひいきにする。何物かを爲すべく、再び爲すべく、朝から晩まで、そして夜も其事を夢想すべく、苟くも私ひとりに可能である限り、それを善く爲すことのほか、全く何物をも考へぬべく私を刺戟するところの、あの道德をひいきにする！　かく生活する人からは、斯樣なる生活に屬しないものが、ひとつびとつ脫落して行く。憎惡も反感もなしに彼は、今日これが明日あれが彼に暇乞ひして行くのを見る——各のより活潑な微風が樹木から剝ぎ取る黃朽葉のやうに。或は彼は、それが暇乞ひして行くのを全く見ない。それほどしつかりと彼の目は、脇や、後や、下をでなく、彼の標的を、一體に前方を見守る。『我々の行爲は、我々のやらないで置くものを決定せねばならぬ。我々がすることによつて、我々はせずに置く。』斯くそれが私をよろこばし、斯く私の Pheitum（決定された事物）が言ふのである。けれども私は、目をあけたままで私の窮乏に達しようと欲はない。私は總ての消極的な德を好まない——その本質が否定であり、あきらめ自體であるやうな德を。

三〇五

自制。——自分自身を自分の力の中に取り込んでしまふことを、最初に且つ最上に人々へ命ずるところのそれらの道學先生は、それに依つて一の獨特な病氣を彼の上へ持つて來る。即ち總ての自然なる衝動や嗜好に關する間斷なき敏感を、そして謂はば一のむづ痒さを。よしあとで何が彼を撞き、引き、誘ひ、驅り立てようとも（內から、もしくは外からして）、いつも此敏感な者には、あだかも今彼の自制が危險に陷つてゐたかのやうに見える。彼はもはや如何なる本能にも、如何なる自由なる皷翼にも信賴することが出來ず、絕えまなく防禦的態度を以て、自分自身に對し武裝して、鋭い不信の目を以て立つ——自ら作つた城堡の永久の番人として。然うだ、彼は其地位に於て偉大であり得る！しかし乍ら彼が今、他人にまで如何に堪へがたくなつてゐるか、自分自身にとつて如何に困難に、如何に貧しくされ、魂の最も美しき偶然性から切りはなされてゐるかよ！ 然り、總ての其以上の教訓からさへも！ なぜと云つて我々は、我々自身でない事物を何等か學ばうと欲するとき、折々我々自らを失くすることが出來ねばならぬから。

三〇六

ストイイク派とエピクウル派。——エピクウル派は、彼の極度に敏感なる理智的構造に適應した地位を、人物を、事件をする選擇すら。彼は爾餘のものを——即ち、大抵の物をあきらめる。なぜならば、それが彼にとつてあまり强く且つ重過ぎる賄ひであるだらうから。それに對してストイイク派は、石ころでも毒蟲でも、グラスの破片でも、蝎でも構はず呑み込み、そして嘔吐を催さずにゐることの實習をやる。彼の胃腑は結局、生存の偶發事が彼の中へ詰め込むところの一切の物に對して無頓着になるわけである。彼はアルギエルで知られるところの、アッサウアの亞刺比亞宗派を想ひ起させる。此等の無感覺な連中と同じく彼もまた、彼の無感覺の展示に際して招待客を有ちたがる。丁度それをエピクウル派はなしにすましたがる。彼は實にその『庭園』を有つてゐるのである！ 運命の即興作に材料となるやうな人々にとつては、暴烈な時代に、そして突然な變り易き人々に倚賴して生活するやうな人々にとつては、ストイイク主義はまことに結構なものであるかも知れない。しかしながら、運命が彼に一の長い絲を紡ぐことを許すと豫知するところの人は、エピクウル派的に進退するのを可とする。精神的勞作に專心した總ての人々は、これまで然うしたのである！ けだし彼等には精緻なる

敏感性を沒却してしまひ、その代りにはりねずみのはりをもつたストイイク的な硬い皮を拵へて貰ふといふのは、損失の中の損失であつたらう。

三〇七

批評のためになるやうにとて。――汝が從前一の眞實もしくは眞實らしさとして愛したところの或る物は、今日汝にまで誤謬のやうに見える。汝はそれを汝から衝きのける。そして汝の理性がその點に於て一の勝利を獲たもののやうに想像する。しかし乍ら思ふにあの誤謬は、汝が尙ほ別人であつた時分――汝はいつも別人である――總ての汝の今日の『眞實』と同樣に、汝にまで必要であつた。汝がまだ見得なかつた多くの物を汝にまで蔽ひかくした一の外皮として。汝の新しき生活が（汝の理性でなく）、汝に對するあの意見を殺した。汝はもはやあれを要しない。そして今ひとりでに壞滅する。非理性はうぢむしの如くそれから光の方へ匐ひ出る。我々が批評を使用するとき、そして何等の出鱈目なもの非人格的なものでない。それは少くとも甚だ屢々、皮を衝き破るところの生き生きした活動的な力が我々の內に存在するといふことの證左である。我々は否定する。また否定しなければならぬ。なぜならば、我々の內に或る物が生き且つ自らを肯定しようと欲する故に――我々が恐らくはまだ知らない、まだ見ないやうな或る物が！　以上の事を、批評のためになるやうにとて。

三〇八

各の日の歷史。――汝にあつては、何が各の日の歷史を成すか？　それがよつて以て成立するところの汝の習慣を視よ。それは無數の小さな臆病や怠慢の產物であるか、それとも汝の勇敢や創意ある理性の產物であるか？　双方の場合がそんなにも異つてゐるとは云へ、人々が汝に同一の賞讃を附與したこと、また汝がどちらの場合も同じく實際に同一の効用を彼等へもたらしたことは可能であつたらう。しかしながら賞讃や、功用や、體面は、ただ一の善き良心をのみ有うと欲する人にとつて十分であり得た。けれども汝にとつては、良心についての意識を有する汝腎臟探索者にとつては十分でない！

三〇九

第七の寂寥から。――ある日漂泊者はその背後に扉を閉ぢ、ぢつと立ち停まつて、そして啼泣した。やがて彼は言つた、『眞實なもの、現實的なもの、外觀的ならぬもの、たしかなものへの此傾向及び衝動よ！　如何に私がそれを嫌ひであるかよ！　何故に此暗鬱な熱情的な驅逐者が丁度私に追ひ從ふか！

私は休息したがつた。けれども彼はそれをさせない。如何に多くの物が、躊躇すべく私を誘惑しないことぞ！　到處に私に對するアルミイダの園がある、從つて常に胸中の新しき分離と新しき苦さとが！　私は更に足を、この疲れたる傷ついたる足をすすめなければならぬ。そして止むを得ざる故に、私は屢々、私を繫ぎとめ得なかつた最も美しいものに憤然たる回顧をなげる——それが私を繫ぎとめ得なかつた故に！」

三一〇

意志と波と。——あだかも何物かに到達するのが問題であつたかのごとく、此波が如何に熱望的に押し寄せて來るかよ！　如何にそれが恐ろしき急ぎを以て、巖穴の奥深き隅々までも匐ひ込むかよ！　それは誰かに先だたうとしてゐるやうに見える。そこには價値を、高い價値を有する何物かが匿されてゐるやうに見える。さて今それは何程かより緩々と、矢張りまだ興奮に眞白くなつたままで引き返す。それは失望してゐるか？　それは求めたところの物を見出したか？　しかしながら既に一の他の浪が、前のより一層熱望的に暴烈に近づいて來る、その魂がまた祕密や寶物發掘の熱望に充ちてゐるやうに見える。斯樣に浪は生活する。斯樣に我々は、意欲する者共は生活する！　此上を私は言はない。かやうにとや？　汝等は私を信用しないか？　汝等は私を怒つてゐるか、汝等美しき物は？　汝等は、私が汝等の祕密を、すつかり裏切つてしまふことを恐れるのか？　いざ！　唯だ私を怒り、汝等の綠の危險なる自體を能ふだけ高く持ち上げ、私と太陽との間に一の障壁を築け——現在に於ける如く！　げに、綠の薄明と綠の電光とのほか、今や世界に何物も殘つてゐない。汝等の欲する如く爲せ、汝等倨傲なるものよ、悅樂と惡心とから咆哮せよ。或は再びむぐり込み、汝等の綠玉を深みに注ぎ、汝等の果てしなき白き泡沫の髻をその上に投げかけよ。それは私にまで總て宜しい。なぜと云つて、總てが汝等と左樣にうまくなつて居る、そして私が總ての事に對して汝等と左樣にうまくなつて居るから。如何にして私が汝等を裏切るであらうぞ！なぜと云つて——よく聽け！——私は汝等と汝等の祕密とを知つてゐる。私は汝等の種族を知つてゐる！　汝等と私と、我々はげに一の種族に屬してゐるのだ！　汝等と私と、我々はげに一の祕密を有つてゐる！

三一一

斷尖。——我々はいつも勇敢ではない。そして我々が疲れるとき、我々の一人は恐らく次ぎのやうに悲嘆するであらう。曰く、『人々を苦め惱ますのは左樣に困難である——おお、それが必要であるほ

どに！　懊惱を與へるものを、我々が我々の爲めに保持して置かうと欲しないとき、包みかくされて生きるのは我々に何の益ぞ？　むしろ雜沓の中に生活し、そして總ての者に對して犯されるべき、犯されずにゐないやうな罪を、各人に贖ふことの方がよくはないか？　愚かなる人々の場合は愚かに、浮誇なる人々の場合は浮誇に、狂熱者の場合は狂熱に？　大體に於て斯くも法外なる程度の奔逸にあるとき、それが正當ではなかつたか？　私が私に對する他人の意地惡について聞くとき、私の最初の感情が報復でなかつたか？　さらばそれは正しい！――私は彼等に對して言ふやうに私自身に見える――私は汝等と左樣に僅かしか一致してゐない。そして私自身の側に左樣に多くの眞實を有つてゐる。これからのち、汝等がなし得るだけ屢々、私の費用で以て面白く過ごせよ！　ここに私の缺陷や失策があり、ここに私の狂妄があり、私の沒趣味があり、私の昏迷があり、私の涙があり、私の浮誇があり、私の梟的隱蔽があり、私の矛盾がある！　ここに汝等は笑はねばならぬ！　さらば笑ひ且つ悅べ！　私は缺陷や失策が悅樂を與へることをねがふところの、事物の律法や本性を嫌はない！　固より、かつては『より立派な時代』があつた。その時代では、人が各の多少なり新しい考を有つてゐるとき、自らを左樣に缺ぐべからざるものに感じ得た――それを携へて街へ出で、各の人間に呼ばはりかけるべく、「見よ！　天國は近けり！」と。私は、私のゐないとき、私のゐないことを悲しまぬであらう。我

我はいづれも皆缺くべからざるものでない！』しかしながら前にも言つた通り、我々が勇敢であるとき、我々は左樣に考へない。我々は全然その事を考へないのである。

三一二

私の犬。――私は私の苦痛に一の名稱を與へた。そして彼を『犬』と呼ぶ。彼は他の如何なる犬とも同じやうに忠實で、同じやうに厚かましく、同じやうに恥知らずで、同じやうに面白く、同じやうに賢明である。そして私は、彼を顎のさきで指圖したり、私の癇癪玉を彼の上に破裂さしたりすることが出來ない――他の人々がその犬や、奉公人や、細君なぞに對してするやうに。

三一三

如何なる殉教畫をも。――私はラファエルのやうにやらう、そして最早如何なる殉教畫をも書くまい。壯美が殘忍に結びついてゐるやうなところに、壯美を搜し求めないでも濟む位に、壯美な物は十分澤山にある。加之、私の功名心は、私が私自身を壯美なる處刑吏にしようとしたとき、聊かも悅びを見出さないであらう。

三一四

新しき家畜。——私は私の獅子と私の鷲とを身邊に有ちたい——私が何時でも、私の強さの如何に大きいか小さいかを知るべき、暗示や豫兆をもち得ることの爲め。私は今日彼等を見下ろして、そして彼等を恐怖せねばならぬか？　さて彼等の私を見上げて、恐怖するやうな時が復つて來るだらうか？

三一五

最終の時に就いて。——暴風雨は私の危險である。私はオリヴァ・クロムウエルが彼の暴風雨の爲めに滅んだやうに、私がその爲めに滅ぶところの私の暴風雨を有つであらうか？　それとも、先づ風に吹き消されるのでなく、むしろ自分自身にあきあきして來た光として、燃えきつた光として消え去るであらうか？　最後に、それとも、私は燃え切つてしまはないことの爲めに、自分自身を吹き消すであらうか？

三一六

預言者的な人々。——預言者的な人々が甚だ苦しみの多い人々であるといふことに對して、汝等は如何なる感じをも有しない。汝等は唯だ、彼等に一の佳き『賜物』の與へられてゐることをのみ思ひ、また自らそれを有ちたいとねがふ。だが私は、一の比喩によつて私自身を表白して見たい。如何に多く、禽獸が、空氣や雲の電氣によつて苦しみ得ることぞ！　我々が見るごとく、彼等の中の或る種類は、天候に關して預言者的な能力を有つてゐる。例へば猿なぞがそれだ（歐羅巴に於てすらよく觀察され得るごとく——そして唯だに動物園於てのみならず、ヂプラルタアルに於ても）。しかしながら我々は、彼等の苦痛が——彼等の爲めに預言者であるといふことを考へない！　一の強い積極的な電氣が突然、一の近づいて來るところの、まだ一向に見えない雲の影響の下に、消極的な電氣へ變つてしまひ、天候の一變化が準備されるとき、それらの禽獸は、敵が近づいて來るかのやうに振舞ふ。そして防禦か逃避かへ身仕度をする。大抵の場合彼等は潛匿する。彼等は惡しき天候を天候として理解せず、寧ろ、その手を彼等が既に感觸してゐるところの敵として理解するのである！

三一七

回顧。——我々は生涯の各時期に於ける本當のパトスを、それとして減多に意識しない——我々が

その中に立つてゐる限りは。そして常に、それが其後我々に可能な、理性的な唯一の情況であり、パトスでなくして全くエトスである（希臘人と共に話したり差別したりするならば）といふやうに考へる。音樂のなにがしかの調子は今日私に、一の家を、また非常に孤獨な生活を想ひ起さした。そして同時に、その時私の經驗してゐた感情をも想ひ起さした。私は永久にさうして生活し續けられると思つた。しかし乍ら今や私は、それが全然パトスであり欲情であつたこと、此痛ましく元氣の好い、慰め勵ます音樂に比すべきものであつたことを理解する。さうした物を人は、幾年もの間有ちつづけるべきでない。永久に亙つてならば尙更の事である。でなければ人間が、這の星に對して餘りに『超現世的』になるであらう。

三一八

苦痛の中なる智慧。——苦痛の中には、快樂の中にあるだけの智慧がある。苦痛は快樂と同じく、最高級の種屬保存力に屬してゐる。苦痛にしてさうしたものでなかつたならば、それは夙く已に滅亡してゐたであらう。それが傷害するといふことは、それを斥ける何等の論據にもならぬ。傷害するのはそれの本質である。私は苦痛の中に、『帆を捲け！』とさけぶところの船長の號令をきく。さまざまな仕方に帆を張ることを、勇敢なる航海者なる『人』は、習得してゐなければならぬ。でなかつたらば、餘りに速かに彼の上へ幕が下り、大海原が餘りに早く彼を呑み盡したであらう。我々は減少された精力で生活することをも知らなければならぬ。苦痛が其保安の信號を與へるや否や、精力を減少すべき時である。何等かの大きな危險が、一の暴風雨が近づいてゐる。そして我々は出來るだけ『膨脹』しないのがいいのである。成程、大きな苦痛の近づくとき丁度反對の號令に聽くところの、そして暴風雨の押し寄せるとき最も尊大に、最も戰鬪的に、最も幸福に見えるところの人々はある。然り、苦痛自體が彼等にその最大の瞬間を與へるのである！　それは英雄的な人々であり、人類の大なる苦痛の持參者である。一般に苦痛が要するのと丁度同じ辯護を要する、それらの少數の、若しくは希なる人人である。そして實に！　それが彼等に拒否されてはならない！　彼等は種屬を保存し、種屬を進捗する最高級の力である——彼等が安逸に反對し、かうした種類の幸福の前に彼等の嫌惡をかくさないといふ、ただそれだけのことによつてであらうとも。

三一九

我々の經驗の解釋者として。——一種の正直は總ての宗教創始者及び類似の人々に緣のないものだつ

た。彼等はその經驗を認識の良心事項にしたことがない。『私は本當に何を經驗したのか？　あの時何が私の中に、また私の周圍に起つたか？　私の理性は十分に明らかであつたか？　私の意志は感性のあらゆる欺瞞へ對置されて居り、また幻想的な物に對する防禦に於て勇敢であつたか？』彼等の中なる何人も斯く問はなかつた。今日尙ほ總ての親愛なる宗教的なる人々が斯く問はない。彼等は寧ろ、理性に反したる事物への渴望を有つてゐる。そしてそれを滿足さすべく、餘りに面倒な事をしたくない。かくて彼等は『奇蹟』や、『再生』を經驗したり、天使の聲を聞いたりする！　しかしながら我々は、我々他の者は、理性を渴望する者は、時毎に、日毎に、科學上の試驗に於けるごとく、それだけ嚴密に我々の經驗を注視しようとする！　我々自身が我々の實驗であり、實驗材料でありたいとねがふのである。

三二〇

再會に際して。——(A)私はすつかり汝を理解してゐるか？　汝は探り求めてゐるか？　今の現實の世界の間に於て、汝の隱所と星とは何處にあるか？　汝にも福祉の餘剩が來り、汝の生存が正當な理由を與へられるやうに、汝は太陽の中に何處に自らを橫へ得るか？　各人をして自分自身の爲めに

それを爲さしめよ——汝は私へ言ふやうに見える——そして普遍的なものに關する話を、他人や社會に對する心遣ひを彼の心から取り去らしめよ！　(B)。私はより多くを意欲する。私は如何なる探求者でもない。私は私自身の爲めに固有の太陽を創造しようとねがふ。

三二一

新しき用心。——我々をしてもはや、刑罰や、非難や、改善に就いて左樣に多くを考へしめるな！　我々は滅多にある個人を變へ得ないであらう。そしてそれが我々に成功したとき、恐らくは思ひもよらず他の或るものがまた成功したであらう。我々が彼によつて變へられたのである！　寧ろ我々をして心を用ゐしめよ——總ての來るべきものに對する我々自身の影響が、彼の影響に比肩し凌駕するやうにと！　我々をして直接の戰ひに於て爭はしめるな！　そして此事は、總ての非難や、刑罰や、改善の要望の場合にも通用する。寧ろ我々をして我々自らを愈々高めしめよ！　我々をして我々の模型に、愈々輝かしき色彩を與へしめよ！　我々をして我々の光によつて他人を暗からしめよ！　否！　我々は彼の爲めに自らより暗くなりたくない——總ての刑罰するもの不滿足なるもののやうに！　我我をしてむしろ脇へ寄らしめよ！　我々をして看過せしめよ！

三二二

此喩。――その人にあつては、あらゆる星辰が旋回軌道の上を動いてゐる、といふやうな如何なる思想家も、最も深い思想家でない。一の巨怪なる宇宙を見入るごとく自己を見入り、銀漢を自己の内にもつてゐる人は、總ての銀漢が如何に不規則であるかをも知つてゐる。彼等は生存の混沌や迷宮にまで連れ込むのである。

三二三

宿命に於ける幸福。――宿命が我々をして暫くの間我々の敵手の側に於て戰はしめたとき、それは我々に最大の榮譽を與へてくれる。けだし、それによつて我々は、一の大なる勝手にまで豫定されてゐるのである。

三二四

生活の中程に於て。――否！　生活は私を欺かなかつた！　年を經るに從つて私は、むしろそれをより豐富な、より熱望すべき、より神祕なものに見出す――生活は認識者の一の實驗であり得て、義務や宿命や欺瞞であり得ない、といふあの思想が、大なる解放者が私のところへやつて來たあの日以來。そして認識自體は、それは他の人にとつて何等か別のものであり得る。例へば安息の床であり、或は安息の床への道であり、或は娯樂であり、或は鎖閉であり得る。私にとつては認識自體は、英雄的感情も其舞踏場や鬪武場を有するやうな、危險と勝利との世界である。『生活は認識の手段』――かうした原理を胸中に置いて人は、唯だ勇敢にのみならず、愉快に生活し愉快に笑ふことも出來る！そして先づ戰爭と勝利とを善く理解せずして、そもそも何人か善く笑ひ善く生活することを理解しようぞ？

三二五

偉大に屬するところのもの。――大なる苦痛を加へる力と意志とを自分自身の内に感じないとき、何人かよく大なる事を成し遂げるであらうぞ？　苦しみ得るといふのは最もつまらない事である。その事に於ては薄弱な婦人も、奴隷すらも屢々名人の域に達する。しかしながら、人が大なる苦患を被らせ、その苦患の叫びを聞くとき、内的の困苦と疑懼との爲めに死滅しないといふのは、それは偉大な

る事柄である。それは偉大に屬するところのものである。

三二六

魂の醫者と苦痛と。

——總ての道德を說く人々は、總ての神學者等と同樣に、一の共通な不行儀を有つてゐる。總ての者は人々に說得しようと努める——人々が甚だ重い病氣に罹つてゐるといふこと、また荒つぽい最終の思ひ切つた治療の必要であるといふことを。そして人々が總體としてそれらの敎師等に、幾世紀の間、餘りに熱心に傾聽した故、人々の甚だ重い病氣に罹つてゐるといふあの迷信の或るものは、遂に實際に彼等を征服した。そこで彼等は今や、あまりに容易く太息をつき、もはや人生に何物をも見出さないやうになつてゐる。そしてお互に陰暗な面附をしあつてゐる——人生に堪へるのが全く困難であつたかのやうに。實際を云ふと彼等は無茶苦茶に其生活を確信して居り、それに愛着して居り、また不快な物を打却し、若痛や不幸から刺をぬき去る爲め、名狀すべからざる奸策詭計をうんともつてゐる。私の見るところを以てすれば、人々は常に苦痛や不幸に附いて誇張して談るやうである。あだかもその事で誇張するのが善き生きかたでもあるかのやうに。一方では人々は、苦痛に對して無數の輕減方法のあるといふことに附いて、故意に默してゐる。例へば知覺昏迷だとか、

熱病的な思想の擾亂だとか、安靜な地位だとか、善き惡しき追憶や、目的や、希望や、殆んど麻醉劑の効果を有するさまざまな種類の自尊心や同情だとか云ふやうな方法のあることを。ところで最高度の苦痛にあつては、失神が自らにして起つて來る。我々は甘みを我々の苦みの上に、とり分け魂の苦みの上に滴らすことを十分に善く心得てゐる。我々は我々の勇敢や壯美の中に、並びに屈從やあきらめのより高貴なる譫妄の中に救治策を有つてゐる。一の損失は辛うじて一時間だけ一の損失である。何等かの仕方でそれと共に一の賜物がまた天から我々へ落ちてゐる。例へば一の新しい力が。そしてよし、それが力への一の新しき機會にすぎなかつたらうとも！　道德を說く人々が姦惡なる人間の內的『慘苦』に就いて何を幻に描いたかよ！　彼等が熱情的な人々の不幸について、そもそも如何なる僞りを言つたかよ！　さうだ、僞りと云ふのは此場合正當な言葉である。彼等は斯うした種類の人々の過剩なる幸福を本當によく知つてゐた。けれども死のごとく默つてゐた。なぜならば、それは總ての幸福が欲情の滅却や意志の默殺と共にのみ成立し得るといふ彼等の理論の否定であつたから！　そして最後に總ての斯うした魂の醫者の處方や峻刻なる根本的治療に關しては、次ぎのやうにたづねることを許される。曰く、この我々の生活は實際に、十分痛ましく煩はしいものであるか？——克己的な生きかたや其木石化を以てそれに代へ、利益になるほどに。我々は克己的な行きかたで病みわづら

はねばならぬほど、それほど病みわづらつてゐないのである！

三二七

眞面目にとる。――理智は大抵の人々の場合、なかなか運轉させにくいところの、一の氣の利かない、陰暗な、鳴りきしむ器械である。彼等は此器械をつかつて、善く考へたいと思ふとき、『物事を眞面目にとる』と稱する。おお、彼等にまで善く考へるといふことが、如何に煩はしくあらねばならぬかよ！　人間といふ可憐なる禽獸は、善く考へるとき何時でも、善き機嫌をなくするやうである。卽ち彼は、『眞面目に』なるのである！　そして、笑や悅ばしさのある處には、思考が何の役にも立たないのである。かくの如く此眞面目な禽獸の先入見は、總ての『悅ばしき智識』に對して言ふ。いざ、さらば！　我々をして、それが一の先入見であることを指示せしめよ！

三二八

愚劣に傷害を加へる。――ひどく頑固に確信を以て說かれたる、自己中心の不都合といふことに對する信仰は、たしかに、大體に於て自己中心に傷害を加へる（私が幾度も反復するであらうごとく、獸群本的にまで都合よく！）――とり分け、それが自己中心から善き良心を取り去り、我々をして自己中心の中にあらゆる不幸の本當の源泉を求めしめたといふことによつて。『汝の私慾は汝の生活の災厄である』――かくの如く說敎が數千年に亘つて鳴り響いた。それは前述の如く、私慾に傷害を加へた。そしてそれから多くの精神を、多くの朗らかさを、多くの獨創力を、多くの美を奪ひ去つた。私慾を魯鈍にし、醜惡にし、そして毒害した！　一方ではまた古代哲學は、災厄の今一の根本的源泉を敎へた。ソクラテス以來思想家等は次ぎの如く說敎することに倦みつかれなかつた。曰く、『汝等の無思慮や愚劣は、規則通りの無意味な汝等の生き方は、隣人の意見への汝等の服從は、汝等が滅多に幸福になれない所以の理由である。我々思想家は思想家として最も幸福なものである』と。此場合我々をして決定せしめるな――愚劣に對する此說敎が、私慾に對するあの說敎より、それ自らの爲めに、より善き理由を有したかどうかを。しかし乍ら、それが愚劣から善き良心を取り去つたのはたしかである。此等の哲學者は愚劣に傷害を加へたのである。

三二九

閑散と懶惰。――亞米利加人共が黃金を手に入れやうと努めるときの仕方には、印度人風な、印度

人の血に特有な野蠻性がある。そして彼等の仕事の息を切らした慌だしさは、新しき世界の特有なる惡德は、既に傳染によつて舊い歐羅巴を野蠻にすべく、また全く驚くべき精神の缺乏をその上に播き擴げるべく始めてゐる。今や人々は休息を瞰ちてゐる。久しく考へ込むことすらも殆んど良心の苛責を感ぜしめるのだ。人々は時計を手にしながら考へる――目を財政新聞の上に注ぎながら、中食をたべるやうに。人々は、絶えず何物かを『怠慢しかねない』人の如くに生活する。『何もしないよりか、寧ろ何かをせよ』――此主義も、すべての文化やすべての高き趣味を締め殺してしまふところの紐である。そして丁度、明白に總ての形式が勞働する者の斯うした噪急の故に消滅するごとく、形式に對する感情其物も、運動の諧調に對する耳目もまた消滅する。これに對する證據は、今日到處に要求されてゐる無作法なる明瞭の中にある。人が苟くも人々と眞率でありたいと思ふ總ての處にある。友人や、婦人や、近親や、子供や、教師や、生徒や、指導者や、君主等との交際にある。人々は最早、儀式に對して、廻りくどい鄭重に對して、娯樂のあらゆる esprit に對して、また一體に otium（閑散）に對して如何なる時をも力をも有しない。なぜと云つて儲けをねらふ生活は絶えず、絶えまなき矯飾、もしくは欺瞞、もしくはだしぬきに於て、窮盡するまでも精神を消費することを强いるからである。今や本當の德は、或る事を他人よりも少き時間の内にしてしまふことである。されば許されたる眞率には唯だ希なる時間だけがある。ところで其時間の中に人々は勞れてゐる。そしてただに『寛』がうとするだけでなく、其脚を無樣に踏みのばさうとする。人々は今日丁度このやりかたで彼等の手紙を書く。その樣式や精神は常に本當の『時代の標徴』であるだらう。若し尙ほ社交に於て、また藝術に於て享樂があるならば、それは過勞を强いられた奴隷の自らに給するやうな享樂である。おお、我々の教養ある、教養なき人々の間に於ける『悦樂』の節制について！　おお、總ての悦樂の斯うした增加するところの猜疑について！　勞働は愈々あらゆる善き良心を自分の味方に引きつけてしまふ。悦樂への嗜好は既に、自らを『休養の要求』と呼んでゐる。そして自らを恥づかしく思ひはじめてゐる。『人はそれを彼の健康に負うてゐる』――かく人々は、彼等が遊山に出かけるところをつかまつたときに言ふ。否、やがては、人々が冥想生活（卽ち、思想や友達をつれての散歩である）への嗜好に、自己侮辱や良心の苛責なしには服從し得ない、といふところまで行くであらう。ところで！　昔はそれが反對であつた。仕事は良心の苛責を經驗さした。家系の立派な人は、必要が彼を仕事にまで强いたとき、その仕事をかくしたものである。奴隷は、彼が何等か侮蔑すべき事をしてゐるといふ感情から壓迫されながら働いたものである。『すること』自體が何等か侮蔑すべき事であつたのだ。『高貴と名譽とは otium と bellum との中にのみある』――かく古代人の先入見は言つてゐたものである！

三三〇

喝采。――思想家は喝采と拍手とを要しない――彼にして彼自身の拍手を確信してゐるならば。しかしながら、後者を彼は缺ぐわけに行かない。これもなしに、また一體のあらゆる種類の喝采もなしにやつて行けた人々があるか？　私は疑ふ。そして最も賢き人々に關してすらもタアチトゥスは、賢き人々の場合に於てすらも、光榮に對する欲求は、彼等の蟬脫する最終のものなのだから）と――これが彼にあつては、『曾つてなし』を意味してゐる。

三三一

騷々しさに耳を擧されるよりも寧ろ始めから聞えない方が。――曾つて人々は呼聲を立てようと欲した。今ではそれがもう十分でない。なぜならば市場があまりに大きくなつてゐるから。それは今や喊き聲であらねばならぬ。その結果、善き咽喉も叫び涸らされ、最善の商品が嗄れた聲で提供されてゐる。市場の叫喊と嗄聲となしには、今やもう何等の天才もないのである。今は固より思想家にとつて惡しき時代である。彼は二の喧噪の間に尙ほ彼の靜けさを見出し、彼が耳の聞えなくなるまで、それだけ長く聞えないふりをしてゐることを學ばねばならぬ。彼にしてまだこれを學ばないでゐた限り、彼は勿論苛立たしさと頭痛とから破滅することの危險に置かれてゐる。

三三二

惡しき時間。――恐らく如何なる哲學者にも、一の惡しき時間があつたであらう――『人々がよし私のつまらない議論を信じてくれなかつたとしたところで、私に何の關係があらうぞ？』と、彼の考へたやうな時間が。さて其時、何等かのいたづらな鳥めが彼のそばを飛び過ぎ、そして囀り言つた、『お前に何の關係があらうぞ？』と。

三三三

認識するとは何の謂ひぞ？――Non ridere, non lugere, neque detestari, sed intelligere!（笑ふのでなく、嘆くのでなく、憎むのでなく、理解するのである）とスピノオザは、例の通りの素樸な崇高な調子で言つてゐる。しかしながら、終局に於て這の intelligere（理解）は、あの三の物が依つて以て、我

我にまですつかり感得されるやうになる形式のほかの何物であるか？　嘲弄したり、愁訴したり、呪詛したりする、さまざまな、矛盾し合つた衝動からの一の成果のほかの何物であるか？　一の認識が可能である前に、各の斯うした衝動は先づ事物または事件に對する其一面的な見解を持ち出してゐなければならなかつた。そのあとに此等の一面的なもの同志の闘爭が起つた。そして折々それから一の中間、一の安靜、三方何れもをの一の是認、一種の正義及び協約が起つた。なぜと云つて、正義及び協約によつて總ての斯うした衝動が、存在の中に自らを主張し、互に權利を保持し得るからである。我我には唯だ此長い經過の最終の和解の場と總勘定とだけが意識されるのだが、その我々は其爲めに考へる――intelligere（理解）は何等か和解的なもの、正しきもの、善きもの、何等か本質的に衝動に反對なものであると。それは衝動相互の一定の關係であるのだけれど。隨分久しい間、意識的思考だけが思考と見做されて來た。今や始めて、我々の精神的活動の大部分が、我々に意識されずに、感得されずに經過するといふことの眞理が、我々の上に明るくなつてゐる。けれども私は思ふ、ここに爭闘し合つてゐるところの此衝動は、互に感得され合ひ、傷けられ合ふことを十分によく心得てゐるだらうと。あらゆる思想家等の襲はれるあの突然の竭靈は、そこに其根源を有つてゐるのかも知れない（それは戰場に於ける竭靈である）。然り、恐らく我々の戰闘的內部には、多くの隱れたる英雄主義がある。

けれども固より、スピノオザの謂つたやうな、神聖な、永遠にそれ自らに安んずるところの何物もない。意識的の思考は、そして特に哲學者の思考は、最も虛弱な、從つて比較的に最も柔和な最も靜穩な種類の思考である。されば哲學者こそ最もたやすく認識の性質について迷はされ得るのである。

三三四

人は愛することを學ばねばならぬ。――これは音樂に於て我々の經驗するところである。我々は先づ一體に樂旨や諧調を聞くことを、聞き分けることを、聞き盡すことを、それだけで一の生命あるものとして切りはなしたり限界を置いたりすることを學ばなければならぬ。次ぎにはそれに堪へるべく、その緣遠さにも係はらず、その樣子や表情に對する忍耐を、それの奇異なるものに對する寬容を働かすべく、骨折と好意とがなければならぬ。最後には、我々がそれに慣れてしまふ、我々がそれを期待する、我々がそれの缺乏を我々の缺乏と感ずる場合を招致する。そして今それは、其拘束と蠱惑とをはたらかしつづけ、我々が其謙讓なる狂喜した愛着者になつたまで休めない――それを要求し、復それを要求して、この世界から何等のより善き物を要求しないやうな愛着者になつたまで。かくの如きは、ただに我々が音樂に於ける場合だけの事でない。丁度その樣に我々は、我々が今愛するところの總て

の物を、愛することを學んだのである。我々は結局いつも、緣遠き物への我々の善意、我々の忍耐、公正、溫良に對して報ひられる――その緣遠き物が徐ろに其ヱエルを脱ぎ棄て、自ら新しき名狀すべからざる美として表現されることによつて。それは我々の欺待に對するそれの感謝である。自分自身を愛する者もまた、此方法に於てそれを學んだであらう。そこには如何なる方法もない。愛をもまた人は學ばなければならぬ。

三三五

物理學萬歲！――如何に多くの人々が抑も觀察することを知つてゐるぞ？　さてそれを知つてゐる少數者の間に、如何に多くの者が自分自身を觀察したことぞ！『各人は自分自身に最も遠い』――これを總ての腎臟探索者が彼等の不愉快にまで知つてゐる。そして、『汝自らを知れ』の言葉は、神の口から人間に語られたる、殆んど一の意地惡である。けれども、自己觀察の左樣に絶望的であるといふことを、他の何物よりも善く證明するのは、殆んど各の人の道德的行爲の本質について語られるときの仕方である。あの敏速な、すき好んでの、信念のある、饒舌な仕方に加へて、その目附きや、その微笑や、その愉快な熱心やである！　人々は汝に言はうとするやうに見える、『しかしながら、私の親愛なる人よ、それは正に私の事である！　汝は、答へることの權能ある人に汝の問をむける。なぜと云つて私は、この事柄に於ての如く他の何事に於ても、左樣に賢くはないのだから。さらば、人が「それは正しい」と判斷するとき、彼が從つて、「それ故にさうならねばならぬ！」と論決し、そして今、彼が斯く正しいと認め、必要と見做したところのものを爲すとき、彼の行爲の本質は道德的である！』しかしながら私の友人よ、汝はそこに一の行爲の代りに三の行爲に附いて私へ談つてゐる。例へば、『それは正しい』のやうな汝の判斷も一の行爲である――一の道德的な仕方に於て、また不道德的な仕方に於て、判斷されることが出來なかつたか？　何故に汝は、これを、そして丁度これを正しいとするか？――『何故ならば、私の本心が私にさう告げる。本心は決して不道德的に語らない。それは實に、何が道德的であらねばならぬかを先づ決定するのだ！』――しかし乍ら、何故に汝は汝の本心の言葉に聽くか？　そして如何なる程度まで汝は、かかる判斷を眞實な誤謬なきものに見做すべき權利を有するか？　この信仰に對して――そこにもはや何等の本心もないか？　汝は理智的本心に就いて何物をも知らないか？　汝の『本心』の背後なる一の本心に就いて？『それは正しい』といふ汝の判斷は、汝の衝動や、好きや、嫌ひや、經驗や、無經驗の中に履歷を有つてゐる。『如何にそれが成立したか？』と汝は問はなければならぬ。そして更に問はなければならぬ、『それに耳を藉すべく、實際に

何が私を衝動するのか？』と。汝は將校の命令を聞く健氣なる兵士の如くそれに耳を藉すことが出來る。或は命令する者を愛するところの婦人の如く。或は命令書を恐怖するところの詔諛者や卑怯者の如く。或は對抗して言ふべき何物をも有たぬ故に、服從するところの馬鹿者の如く。一言にして言へば、汝はさまざまな仕方に於て、汝の本心に耳を藉すことが出來る。しかしながら、汝がこの判斷かの判斷を本心の言葉として聞くといふことは、從つて、汝が何物かを正しいと感じるといふことは、汝がかつて汝自らを反省しなかつたといふこと、又子供の時分から汝に正しいと言ひ傚されてゐるものを、盲目的に受け容れるといふことの内に其原因を有つてゐる。或は、パンや名譽がこれまで、汝の其義務と呼ぶところの物と共に、汝に分たれてゐたといふことの内に原因を有つてゐる。それが汝に『正しい』のは、それが汝にとつて汝の『生存條件』と見えるからだ（ところで、汝が生存の權利を有するといふことは、汝にまで否定すべからざることに思はれるのである！）汝の道德的判斷の執拗さは、尙ほ且つ正に人格的みじめさの、非人格性の一證左であつたかも知れない。汝の『道德力』はその源泉を汝の我儘の内に有つてゐたかも知れない——或は、新しき理想を觀ることの汝の無能力の内に！　そして要するに、汝がより精緻に思考し、より善く觀察し、より多くを學んだならば、汝は此汝の『義務』や、此汝の『本心』を、總ての情況の下にもはや義務だとか本心だとか呼ばないであらう。一體に道德的判斷なるものが如何にして成立したかに關する洞察は、汝に此等の哀切な言葉をいやにならせるであらう——丁度、例へば『罪惡』だとか、『靈の救ひ』だとか、『贖罪』だとか云ふやうな他の哀切な言葉が、汝にいやになつてゐる如く。さて今私に、範疇的命令に就いて語るは、私の友人よ！　そんな言葉は私の耳に擽つたい。そして私は、汝が左樣に眞面目にしてゐる前をも憚らず笑はねばならぬ。私がそれによつて想ひ起すところの老カントは、彼が『自體に於ける事物』を——また一の甚だ滑稽な事柄だ！——こつそり手に入れた罰として、『範疇的命令』に忍び込まれ、心中にそれを携へて再び『神』や、『魂』や、『自由』や、『不死』なぞへ迷ひ歸つたのである——その檻へ迷ひ歸つた狐のやうに。そして彼の力と賢さとが、この檻を破つたのであつた！　如何に？　汝は汝の中に範疇的命令を嘆賞するか？　汝の所謂道德的判斷の此『執拗』を？『私と同樣に、總ての者が此點に於て判斷せねばならぬといふ感情の此『絶對性』を？　むしろ其點に於ける汝の身勝手を嘆賞せよ！　そして汝の身勝手の盲目や、つまらなさや、控目を！　けだし、自分の判斷を普遍的律法として感じるのは身勝手である。そして又、盲目な、つまらない、控目な身勝手でもある。なぜならばそれは、汝がまだ汝自らを發見しなかつたこと、汝自らにまだ如何なる固有の、最も固有の理想をも造り與へなかつたことを裏切つてゐるからだ。けだしこれは到底他人の（總ての者の場合を措くとして

も)理想であり得なかつたからである！『此場合各人が斯樣に行爲せねばならなかつた』と、やはり判斷するところの人間は、自己認識に於てまだ五歩を進んでゐないのである。でなかつたら彼が知るであらう――同じやうな行爲といふものがありもせず、あり得べきでもないといふことを。爲されたる各の行爲が、一の全く獨特な眞似の出來ない仕方で以て爲されてゐるといふことを。そしてそれが各の將來の行爲に關しても同樣であらうといふことを。行爲のあらゆる規定は（あらゆるこれまでの道德の、最も內的な、精緻な規定すらも）、唯だ粗惡なる外面にのみ關係してゐるといふことを。それで以て、なるほど平等の外觀が、けれども唯だ一の外觀が到達され得るにすぎないといふことを。各の行爲が、それへの望見もしくは失回願に於、透徹すべからざる事柄であり、またさうした事柄たるをはないといふことを。『善良』、『高貴』、『偉大』に關する我々の意見が、我々の行爲によつて證明されは得ない（なぜならば、各の行爲が認識すべからざるものである故）といふことを。我々の意見や、評價や、物價表がたしかに、我々の行爲の機構に於ける最も強大なる槓杆に屬してゐるといふことを。しかしながら、各個の場合に對しては、その機構の法則が跡づけがたいといふことを。されば我々をして我々自らを、我々の意見や評價の淨化に、また新しき特有なる物價表の創造に拘束せしめよ。しかしながら『我々の行爲の道德的價値』については、我々は此上穿鑿立てすることを欲しない！　然り、私の友人よ！　他人に關する道德的饒舌全體について言ふと、もういやになつてゐるべき時である！　道德的に法廷に立たされるといふのは、我々の趣味に反してゐなければならぬ！　我々をして此饒舌と此惡趣味とを委ねしめよ――過ちを少しばかりさきの方へ、時を通して引きずつて行くよりほか、もはや何等の爲すべきものを有たぬ人々、また自らかつて現在であることのない人々へ――從つて多くの者共へ、大多數者へ！　しかし乍ら我々は、我々があるところのものに成らうと欲する――新しきものに、一邊きりのものに、比較すべからざるものに、自分自身の爲めに立法するものに、自分自身の爲めに創造するものに！　そして此目的の爲めに我々は、世の中のあらゆる律法的必然的なものの最善なる學習者發見者にならなければならぬ。我々はあの意味に於て、創造者であり得ることの爲め、物理學者であらねばならぬ――これまでは總ての評價や理想が物理學を知らぬことに、或はそれと矛盾することに土臺を置いてゐたのだけれど。されば、物理學萬歳！　そして我々をそれを抑しやるところのもの――我々の正直は更に萬々歳！

三三六

自然の貪婪――何故に自然は、人間の內的な充實に應じて、これにより多く、かれにより少く、

彼をして輝かしめないほど、彼にまで吝嗇であつたのか？　何故に大なる人間は、その出入りに於て太陽の如き美しきあざやかさを有たないのか？　さらば人々の間なる總ての生活が、如何に遙かに暖昧ならぬものであつたらうよ！

三三七

將來の『人情』。――私が遠き時代の目を以てこの時代を打ち眺めるならば、私は現在の人間に於て、『歴史感』と呼ばれたる彼の固有の徳と病氣とより、何等のより著しきものを見出し得ない。それは歴史に於ける或る全く新しいもの緣遠いものへの性向である。この萠芽に幾世紀及び以上が與へられるならば、それから結局まことに驚くべき匂をもつた同樣に驚くべき植物を生じ、その植物の爲めに我我の舊い地球は前より一層愉快に住めるやうになつたかも分らない。我々現代の人間は、將來の甚だ力强い感情の連鎖を、作り上げはじめてゐる――我々は、我々が何をなしつつあるかを殆んど知らない。殆んど我々には、一の新しい感情がでなく、むしろ總ての舊い感情の除却が問題であるかのやうに見える。歴史感はやはり左樣に貧弱な冷い或るものである。そして多くの人々が氷凍からの如く、それから襲撃され、それによつて更により貧弱により冷くされる。他の人々にまでそれは、忍び寄る時代の徵標と見える。そして我々の遊星は彼等にまで、自分の現在を忘れる爲めにその靑春時代の歴史を書くところの憂鬱な病人と見做される。全くのところこれは這の新しき感情の一體貌である。人間の歴史總體を自己の歴史として感じ得る者は、一の巨怪な概括の中に感覺する――健康を考へる病人の悲みや、靑春の夢を考へる老人の悲みや、愛する者を奪はれる愛着者の悲みや、理想の滅び行く殉教者の悲みや、何物をも決定しないのに、負傷や友人の喪失をもたらした戰の夕に於ける勇者の悲みやを。しかし乍ら、あらゆる種類の悲みの斯うした巨怪なる總量に堪へるのは、そして尙ほ且つ、自分のあとさきに數ケ年の眼界を有する人間として、あらゆる過去の精神のあらゆる高貴さの相續人、義務ある相續人として、あらゆる舊貴族の最も貴族的なもの、同時に新貴族（それに著しきものを、如何なる時代もまだ見もせず、夢に見もしなかつた）の初生兒として、戰の第二日の夜明けに、曉紅と其幸福とに挨拶するところの勇者であるといふのは、人類の最も舊いものや、最も新しいものや、喪失や、希望や、征服や、勝利や、斯うした總てを彼の魂の上に取るといふのは、斯うした總てを結局一の魂の中に有ち、一の感情の中に包容するといふのは――これは尙ほ且つ、これまでまだ人間の知らなかつた一の幸福を附與せねばならなかつた。力や愛に充ち、涙に充ち、笑に充ちたる神の幸福である。その幸福は夕方の太陽の如く、絕えず其盡きせざる富から出て、大海に注

がれる。そしてまた太陽の如く、最も貧しい漁人さへなほ金の櫓でこぐとき、最も富有に自らを感ずる！　この神聖な感情が其時呼ばれる――人情と！

三三八

苦患及び同情ぶかきものへの意志。――何よりも先づ同情ぶかき人間であるのは、汝等自らに有益であるか？　そして汝等がさうあるとき、苦患する者にまでそれが有益であるか？　だが我々をして第一の問ひに答ふることなく、しばらくその儘にして置かしめよ。我々が最も深く最も個人的に苦患するところのものは、殆んど總ての他の人々にまで解しがたく近づきがたい。その點に於て我々は隣人からかくされてゐる――彼が我々と食卓を共にしてゐるときすらも。しかし乍ら、我々が苦患するものとして認められる處では何處でも、我々の苦患は淺薄に說明されてゐる。緣遠き苦患から共固有な人格的なところを剝ぎ取つてしまふのは、同情的感情の本質に屬してゐる。我々の『恩惠者』は我我の敵以上に、我々の價値及び意志を小にする。不幸な人々へ示される大抵の恩惠に際しては、そのとき同情者がよつて以て運命を弄ぶところの理智的輕卒の中に、何等かの怒發させるものがある。彼は私にとつて或は汝にとつて不幸と呼ばれるところの、內的連繫及び錯湊全體について何物をも知らないのである！　私の魂の全經濟や、不幸による其淸算や、新しい源泉や需要の發出や、舊い傷の癒着や、過去全體の放棄や――不幸に結びつけられ得る斯うした總てものは、親愛なる同情者を煩はさない。彼は扶助しようと欲する。そして考へない――不幸の人格的必要のあるといふことを。私にも汝にも、恐怖や、不自由や、貧乏や、眞夜中や、冒險や、やみくもや、失敗が、その反對なものと同樣に必要であるといふことを。否、神祕的に表白すれば、自己の天への道は常に、自己の地獄の耽樂を通るものだといふことを。否、それについて彼はなんにも知らない。『同情の宗教』（或は『心臟』）が扶助することを命ずる。そして人々は、最も速かに扶助したとき、最も善く扶助したやうに思つてゐる！　汝等が汝等の同胞に對して有つのと同じ心持を、この宗教の徒なる汝等が、實際汝等自らに對しても有つならば、汝等が汝等自らの苦患を一時間も汝等の上に橫はらしめまいとし、絕えず總てのあり得べき不幸を豫防するならば、汝等が苦患や不快を一體に惡として、忌まはしきものとして、滅ぼすべきものとして、生存の上の汚點として感ずるならば、さらば汝等は汝等が同情の宗教のほかに、更に今一の宗教を胸の中に有つてゐる（そして、これは恐らくあれの母であらう）――安易の宗教を。ああ、汝等が人間の幸福について如何に僅かに知つてゐることぞ、汝等安易な、そして人の善き人々よ！　なぜと云つて幸福と不幸とは、兄弟姉妹であり、双生兒である。一緒に大きくなつたり、

若しくは汝等の場合に於けるがごとく、大きくならないでゐたりするところの双生兒である！　だが、今は第一の問題に引き返さう。彼の道を去らないでゐることが、そもそも如何にして可能であるか！　絶えず何等かの叫びが我々を脇へ呼びよせる。我々の目はそのとき如何なる物をも減多に見ない――一時我々自らの事を去つて飛び込んで行くのが、必要になることなしには。私はそれを知つてゐる。そこには私自らを私の道から迷はせるさまざまなちやんとした、賞讃すべき仕方がある。實に非常に『道徳的な』仕方がある！　然り、今日の同情道徳の説教家の意見は、これこそ、これだけが道徳的であると謂ふところまで行く――斯く彼の道から迷ひ、隣人を助けに出掛けるといふことだけが。私は同じく確實に知つてゐる。私はただ、一の現實的困迫の見えるところに身を委して置きさへすればよい。さうすれば私は、同樣に失はれてしまふ！　さて一人の苦患してゐる友人が私にまで、『見よ、私は間もなく死ぬであらう。どうか私と一緒に死ぬことを私に約束してくれ』と言つたなら、私はそれを約束したであらう――自由の爲めに戰ふあの山國の小民族を見ることが、彼に私の手と私の命とを差出すところまで私を連れ行くであらうごとく（苟くも善き理由に對して惡しき實例を選ぶならば）。全くのところ、その上、總ての斯うした同情を起させ助けを呼び求めるものの中には、祕密の誘惑がある。我々『自らの道』こそは、餘りに峻酷であり、餘りに執拗であり、他人の愛や謝恩から餘りに遠ざかつてゐる。我々はそれから、それや我々の最も固有な本心から、ちつともいやいや乍らでなく逃げる。そして他人の本心の中に、『同情の宗教』の愛すべき殿堂の内へかくれる。今何等かの戰爭が發生するや否や、それと共に常に、丁度ある民族の最も高貴なる者共の中に、一のたしかに祕密にされた悦びが發生する。彼等は狂ひ悦んで死の新しき危險へ飛び込んで行く。なぜならば彼等は祖國の爲めに犧牲になることに於て、結局かの久しく求められてゐた許しを――彼等の目的を避けることの許しを有つやうに思ふからだ。戰爭は彼等にとつて、自殺への迂路である。但し善き良心を有つての迂路である。さて此處に或る事について默するとも、私は次の如く私に言ふところの私の道徳について默したくない。曰く、汝が汝自らに生き得ることの爲め、かくれたものの中に生きよ！　汝の時代に最も重要と思はれるものについて知らずに生きよ！　汝自らと今日との間に、少くとも三世紀の皮膚を置け！　そして今日の叫びは、戰爭や革命の喧噪は、汝自らに一の囁きあらねばならぬ！　汝はまた助けようと思ふであらう。しかしながら、その困厄を汝がすつかり理解してゐる（一の苦患と一の希望とを汝と共通にしてゐる故）やうな人々――汝の友人達をのみ、そして汝が汝自らを助けるときのやうな仕方に於てのみ助けようと思ふであらう。私は彼等を、より勇敢に、より忍耐强く、より單純に、より愉快にしたいとねがふ！　私は今日左程に僅かな人々が理解するところの、またかの同

情の說教家が最も僅かに理解するところのものを、同獸を彼等に敎へたいとねがふ！

三三九

Vita femina ——一の作品の最終の美しさを見ること、そのことの爲めには、總ての智識や總ての善き意志も十分でない。最も希なる仕合せなる偶然を要する——雲のゼエルが一たび其頂きからはなれ、太陽がその上に燃えかがやくことの爲め。我々はこれを見る爲め、丁度正しき地位に立たねばならぬだけでない。丁度我々の魂自體がゼエルを其高頂から取除かねばならなかつた。そして一の支持を有し、それ自らの支配者たることを失はぬやうに、一の外的な表白と比喩とを要せねばならなかつた。しかしながら斯うした總てのものは、左樣に希に同時に結合される——仕事であらうとも、行爲であらうとも、人間であらうとも、自然であらうとも、總ての善きものの最高頂が、これまで大抵な人々にとつて、最善な人々にとつてすらも、何等かのかくれたもの、包まれたものであつたといふことを、彼が信じたかも知れないほどに。しかし乍ら、それ自らを我々に現はすところのものは、一度だけそれ自らを我々に現はすのだ！　希臘人は實に祈つた、『二だび、また三たび總てが美しく！』ああ、彼等は其時神々に呼びかけるべく善き理由を有つてゐた。なぜと言つて、非神的な現實は我々に全然美なものを與へないか、ただ一度だけ與へるかだから！　私は言はうと思ふ、世界は美しい事物に充ち溢れてゐる。だがそれにもかかはらず、美しい瞬間や斯うした事物の示顯に於て貧しい、甚だ貧しい。しかし乍ら恐らくこれは生活の最も强い魅力であらう。生活は美しい可能性の金鏽を施したゼエルを、それ自身の上に置く——見込みのある、抵抗するところの、內氣な、嘲笑的な、同情ぶかき、誘惑的なものを。然り、生活は婦人である！

三四〇

臨終のソクラテス。——私はソクラテスが爲した、言つた、また言はなかつたところの總てのものに於ける、彼の勇氣と賢明とを嘆賞する。最も倨傲な若者をも戰慄し歔欷せしめた、アデンのあの嘲弄的な愛着的な怪物は、捕鼠者は、唯だに世の中の最も賢き饒舌家であつただけでない。彼は沈默に於ても同じやうに偉大であつた。私は、彼が生命の最終の瞬間に於ても寡言であつたことを希つた。さらば恐らく彼は、更により高き階級の精神に屬してゐたであらう。死であつたか、或は毒藥であつたか、或は敬虔であつたか、或は意地惡であつたか、兎に角何物かが、あの瞬間に於て彼の舌を弛めた。そして彼は言つた、『おお、クリトオンよ、私はアスクレエピオスに一羽の牡鷄を借りてゐる』と。此滑稽な

凄ろしい『最終の言葉』は、耳を有する人々にまで、『おお、クリトオンよ、人生は一の病氣である！』と云ふ意味になる。それが可能であるか！　快活で、總ての目の前に軍人の如く生きてゐた彼のやうな人間が――悲觀家であつた！　彼は生活に對する善良なる樣子を裝うてゐ、一生彼の最終の判斷を、彼の最も內面的な感情を包みかくしてゐたに過ぎない！　ソクラテスは、ソクラテスは生活に苦惱した！　そして彼もそれに對して復讐した――あの包みかくされた、恐ろしき、信心ぶかき、そして濱冒的な言葉で以て！　ソクラテスのやうな人間も尙ほ且つ復讐せずにゐられなかつたか？　彼の豐饒なる德の中にも一粒の宏量が不足してゐたのか？　ああ、友人よ？　我々は希臘人等をも凌駕せねばならぬ！

三四一

最大の重荷。――或る日もしくは或る夜、或る鬼魔が汝を追うて汝の最も寂寥なる寂寥にまで忍び寄り、そして次ぎのやうに言つたらどうだらう！――『此生活を、汝が今生活して居り、また生活して居つた如く、汝は今一度、そして幾回となく生活しなければならぬ。そしてそれには何等の新しい物がないであらう。むしろ各の悲痛や、各の歡樂や、各の思想や嘆息や、汝の生活のあらゆる言ふべからざる小事大事が、汝に歸つて來なければならぬ。しかも總てが同じ並行及び繼次に於て。さて同樣に此蜘蛛や樹木の間の此月光やが、同樣に此瞬間と私自身とが。存在の砂時計はいつまでも廻轉するであらう。そしてそれと共に、塵埃の塵埃なる汝が！』汝は汝自らをほり出し切齒をなし、さう言つたところの鬼魔を呪咀しなかつたであらうか？　それとも汝は、汝が彼に『汝は神である。そして私は決して神的なものを聞かなかつた！』と答へたであらうやうな、巨怪なる瞬間を、曾つて經驗したか？　あの思想が汝の上に勢を獲たならば、彼は汝がある如く、汝を變化し、恐らくは搗き碎くであらう、總ての物各の物に關する『汝は今一度、更に幾回となくこれを意欲するか？』といふ問は、最大の重荷として汝の行動の上に橫るであらう！　或は如何に汝が汝自らに、及び生活に好感を有つやうにならねばならぬことぞ？――此最終の永久の裁可及び批准を願望するより、より多く何物をも願望せぬやうに。

三四二

Incipit tragoedia（ここに悲劇ははじまる）。――ツァラトゥストラが三十歲になつたとき、彼はその故鄕とウルミイの湖とを去つて山へはいつた。ここに彼はその精神とその寂寥とを享受した。そして

十年間といふものそれに倦怠しなかつた。けれども終に彼の心は變つた——そしてある朝彼は曙紅と共に起き出でて太陽の前に進み、かく太陽に語つた、『汝、大なる星よ！　汝の照被するところのものがないとき、汝の幸福は何であつたらう！　十年の間汝はこの私の洞へやつて來た。私と、私の鷲と、私の蛇とがなかつたならば、汝は汝の光と汝の道とにあきてしまつたであらう。けれども我々は朝毎に汝を待ち、汝から汝の氾濫を受け、それに對して汝を祝福した。見よ！　私は、餘りに多くの蜜を集め過ぎたる蜜蜂の如く、私の智慧にあきあきしてゐる。私は、差し伸べられる手を要してゐる。私は、賢き人々が人々の間に今一たび彼等の愚かさを悅び、貧しき人々が今一度び彼等の富有を悅ぶやうになるまで、施與し分配したいと欲つてゐる。その爲めに私は深みへ降つて行かなければならぬ。汝が夕々に汝のかなたへはいり、尙ほ幽界に光を齎らすときになす如く、汝豐饒なる星よ！　——私は汝と同樣に沒落しなければならぬ（私の降りて行かうとする人々が沒落と云つてゐるのだ）。されば、嫉妬心なしに餘りに大き過ぎる幸福をも見ることの出來る、汝靜かなる眼よ、私を祝福してくれ！　溢れ落ちようとしてゐる盃を祝福してくれ——水が金色にそれから流れ、到處へ汝の悅樂の反映を持つて行くことの爲めに！　見よ！　此盃は再び空しくならうとしてゐる。』そしてツァラトゥストラは再び人間にならうとしてゐる。——かくの如くにしてツァラトゥストラの沒落は始まつた。

第五書

我等恐怖を知らざる者

Carcasse, tu trembles? Tu
tremblerais bien davantage, si tu
savais, où je te mène.

Turenne.

我々の快活は何を意味するか。――『神が死んでゐる』といふ、基督教の神に對する信仰が信ずるに足りなくなつてゐるといふ、最も大なるより新しき事件は、既に其最初の影を歐羅巴の上に投げはじめてゐる。少くとも、この芝居に對して十分強く且つ精かな目を、目の中の猜疑をもつた少數の人人には、何か太陽のやうな物が沒したやうに、何か舊くからの深い信任のやうな物が疑に變つてしまつたやうに見える。彼等には我々の舊い世界が毎日より夕刻らしく、より不信用に、より緣遠く、より『ふるく』見えずにゐない。けれども、概して人は次ぎのやうに言ふかも知れない。曰く、事件その物がずつと大き過ぎ、遠過ぎ、多くの人々の理解能力を超越し過ぎてゐる――ただそれの知識だけでも到達したと稱せられ得る爲めに。何が實際に起つたか、そして此信仰の覆滅されてしまつた今日、何が皆潰崩せねばならぬか(例へば我々の歐洲道德全體の如く、それが此の信仰の上に築かれて居り、此の信仰に倚りかかつて居り、此信仰の中に融け込んで居つたのだから)を、既に知つたところの多くの人々に附いては語らないまでも。今切迫してゐる破碎や、壞敗や、沒落や、覆滅の斯うした長い波及及び連續を、誰が今日十分に洞見したか?――恐怖の此巨怪なる論理の敎師及び豫告者として、

曾つて似た物も起つたことのないやうな、暗冥や日蝕の豫言者として、後日をつとめねばならぬ爲め……我々天成の解謎者すらも、今日と明日との間に据ゑられ、今日と明日との間なる矛盾に緊縛されて、謂はば山の上に待つてゐる我々すらも、歐羅巴を立所に包んでしまふにちがひない諸の影が、今已に見えるところへ來ねばならなかつた、來るべき世紀の初子であり月不足兒であるところの我々すらも、這の我々すらも、此晦冥に對する正當な同情なしに、我々に對する心遣ひや恐怖なしに其出現を考へて見るとしたら、結局それが何なのだ？　事に依つたら我々は尙ほ、此出來事の直接の結果の下に立ち過ぎてゐるのか？　——そして此直接の結果は、我々自らに對するその結果は、事に依つたら期待されたかも知れないところのものと反對に、聊かも悲哀でなく陰慘でなく、寧ろ一の新なる記述しがたき種類の光や、幸福や、輕減や、慰籍や、奬勵や、曙紅のやうである……全くのころ我々哲學者及び『自由思想家』は、『舊い神が死んで』ゐるといふ報道に徴して、一の新しい曙紅に照被されてゐるといふやうに感じる。我々の心胸には其際謝恩や、驚嘆や、豫覺や、期待が漂り流れる。結局地平原は再び我々に開放されてゐるやうに見える——それが朗らかでないとした場合にも。結局我我の船は再び海へ出かけて行くことが、どんな危險を冒してでも出かけて行くことが出來る。認識者の各の敢爲は再び許される。海は、我々の海は再びそこに開放されてゐる。事に依つたら、未だ曾つて斯樣に『開放された海』といふものはなかつたかも知れぬ。

三四四

如何ほど我々も尙ほ敬虔であるか。——科學に於ては、確信が何等の公民權を有しないと言はれるのは、理由のあることである。唯だ確信が一の假說に、一の實驗の豫備的見地に、一の統制的虛構に屈從すべく決心した時ばかりである——認識の領域への近接や、加之其内に於ける一定の慣値が確信にまで許し與へられるといふのは。但し、それは常に、警察的監視の下を、不信用の警察の下を去らないでゐるといふことの制限を伴つてである。だが、更により嚴密に見たならば、確信が確信たることを休める場合にのみ、それは科學へはいることを許されるといふわけのものではないか？　如何なる確信をもはや自らに許さなくなつたときにのみ、科學的精神の訓練が始まるのではなかつたか？……それは恐らく然うであらう。唯だ依然として疑はるべきは、この訓練が始まる爲め、常に一の確信のあること、しかも爾餘一切の確信を犧牲にしてしまふほど命令的な絶對的な確信のあること、それを要しないかどうかといふことである。人の見る如く、科學も一の信仰を土臺にもつてゐる。『前提なき』科學なるものは全くない。眞實が必要であるかどうかの問題は、ただに前以て肯定されねばな

らぬだけでなく、『何物も眞實より以上に必要でなく、それに比べると爾餘一切の物が第二義的の價値を有するに過ぎない』といふ命題や、信仰や、確信が表白されるに至るまで肯定されねばならぬ。眞實への斯うした絶對の意志、それは何であるか？　それは、自らを欺かれしめまいとする意志であるか？　それは欺くまいとする意志であるか？　けだし斯うした最終の仕方に於ても、眞實への意志が說明され得たのである――『私は欺くまい』と云ふ概括の下に、『私は私自らを欺くまい』と云ふ個別の場合が包容されるのであつたらば。だが、何故に欺かないのか？　だが、何故に自らを欺かれしめないのか？　第一のに對する理由が、第二のに對する理由と、まるで別な領域に横はつてゐることを注意せよ。人は、欺かれるのが有害であり、危險であり、致命的であると云ふ假定の下に、自らを欺かれしめないのである。此意味に於て科學は一の久しき賢さ、一の用心、一の有用であつたらう。けれども、それに對しては、當然反對を持ち出すことが出來た。如何に？　自らを欺かれしめまいと欲するのは實際、より少く有害で、より少く危險で、より少く致命的であるか？　汝等はそもそもから存在の性格に附いて何を知つてゐるか？――より大なる便益が絶對的に不信用な物の側にあるか、それとも絶對的に信用出來る物の側にあるかを、決定し得ることの爲め。しかしながら、いろいろの信用といろいろの不信用と、双方の物が必要であらねばならぬとしたら、眞實が如何なる他の物よりも、加之如何なる他の確信よりも重要であるといふ、科學の土臺になつてゐる其絶對の信仰を、其確信を、科學は何處から取つて來ることが出來たか？　此確信は、眞實と不眞實とがふたつながら常に有用なものとして自らを證したならば、成立し得なかつたであらう。かくの如く――今否定しがたく存在してゐるところの、科學に對する信仰は、此の如き功利的打算に其起源を置き得なかつた――寧ろ『眞實への意志』の『是非とも眞實』の反功利や危險が、絶えず彼に證明されるといふことにもかかはらず。『是非とも眞實』、嗚呼、我々は一の信仰を他の信仰のあとに、此神壇の上に犧牲にささげて屠つたとき、十分に善く理解するのである！　從つて、『眞實への意志』は、『私は私自らを欺かれしめまい』と意味しないで、寧ろ――そこには如何なる選擇の餘地もない――『私は欺くまい、私自身をすらも欺くまい』と意味してゐる。かくて我々は消德の地盤へ來たのである。なぜと云つて、人をして希くは徹底的に自から問はしめよ、『何故に汝は欺くまいとするか？　――とり分け、それが外觀を有たねばならぬとき、(そしてそれは有つてゐる)。生活が外觀を目當に、換言すれば誤謬や、欺瞞や假托や、眩惑や、自己眩惑なぞを目當にもくろまれてゐた時、又一方では事實として生活の大なる形式が最もあぶなくない nonexpressis の側に自らを示した時の如く。斯かる意向は、お手柔らかに表白すれば、一のドンキホオテ主義であり、一の小さな狂熱的亂心であり得た。けれどもそれは更に或る

より悪しきものであり得た。即ち、生活に敵對した、破壞的な一の原理であり得た……『眞實への意志』、それは死への隱然たる意志であり得た。かく、「何故の科學か？」と云ふ問ひは、「生活や、自然や、歴史が不『道德』であるとき、一體に何を目的の道德か？」と云ふ道德問題へ連れ歸るのである。何等の疑ひもなく、眞實なる人間（科學に對する信實が彼を推定させるときのやうな、あの思ひ切つた極端な意味に於て）は、それでもつて生活や自然や、歴史の世界と、別な一の世界を肯定する。そして彼がこの『別な世界』を肯定する限りに於て、如何に？　彼は丁度それでもつてこの世界を、我々の世界を否定してはならないか？　……しかし乍ら私の念頭に置いてゐるものが今理解されるであらう。曰く、科學に對する我々の信仰に基礎をなすものは、依然として尙ほ一の形而上學的信仰である。そして・し我々今日の認識者も、我々神を無視する反形而上學的な人間も、我々の火をやはり、千年も年をとつた信仰、プラトオの信仰ででもあつたところの、「神は眞實である、眞實は神的である」といふあの基督教的信仰が焚きつけた燃えさしから取つて來るのである……しかし乍ら、このもの自體がいよいよ信ず可らざるものになるならば、何物も誤謬であり、盲目であり、虛僞であることのほか、もはや神聖なものとして自らを證明しないならば如何に？　——神自らが我々の最も持續的な虛僞として自らを證明するならば如何に？

問題としての道德。——人格に於ける缺陷は、到るところにそれ自身へ復讐する。虛弱な、抹殺された、自分自身を拒否し非認するところの人格は、もはや如何なる善き事物にも適當しない。それは最も哲學に適當しない。『無私』は天上に於ても地上に於ても何等の價値を有しない。大なる問題はすべて皆大なる愛を要求する。そして大なる愛はただ、自分自身の上にしつかり坐つてゐるところの、力强い圓滿な精神の人々にのみ可能である。これは或る思想家がその問題に對して人格的な關係をもち、そのうちに彼の運命や彼の困厄や彼の最善の幸福をすらも有するといふことになるか、それとも『非人格的』な關係をもつてゐて、ただ冷かな好奇的な思想の觸角をもつて觸つたり摑んだりすることが出來るに止まるかといふ、最も重要なる差別を生ずる。後の場合に於ては、如何に多くのことが約束されやうとも、何物もそれから出て來ない。なぜといつて大なる問題は、それが理解されるにしても、畦や弱蟲に自らをつかまへさせない。それが永久以來のそれの趣味である——しかもすべての天晴な婦人と共通して有するところの趣味である。ところで、書物に於てすらも私がまだ、道德を問題として知り、この問題を自分の個人的な困厄、苦惱、耽樂、欲情として知つたところの人間と

して、道德に對しかうした地位を占めたらしい何人にもあはないといふのはどうしたことであらう？明かにこれまでは、道德が全然問題でなかつた。寧ろ人々があらゆる不信や不和や矛盾のあとで、一致しあつたところの地盤である。思想家等が自分自身からさへも安息し、息をつき、生きかへつたところの神聖にされた平和の場所である。私は道德的價値判斷の批評を敢てしたところの何人をも見ない。これに關して私は科學的好奇心の、氣儘な遣つて見づくな心理學者及び歷史家の想像力の試みをすら不足に感じてゐる――それはたやすく問題を先取し、何がつかまへられるかをほんとうに知ることなしに翼をつかまへるのだ。やつとのことで私はこれらの感情や評價の成立史を供給する目的で貧しい若干の與件を發見した（その歷史はそれらのものの批評とは別なものであり、更に倫理體系の歷史とも別なものである）。個別的な一の場合に於て私は、かうした種類の歷史に對する嗜好や天分を奬勵するためあらゆることをなした。けれどもそれは、今日私に見えるであらう如く無益であつた。この道德歷史家（特に英吉利人）から學ぶべきものは多くない。彼等は通例尙ほ一定の道德の勢力の下に立ち、無意識的にそれの鎧持や從者の役を演ずる。そして恐らくは尙ほ眞心から、道德的行動の特性が禁欲や、克己や、自己犧牲に、或は同感や同苦に成立するといふ基督敎的歐羅巴の民衆的迷信を反復する。彼等の前提に於ける通例の誤謬は、彼等が民衆の、少くとも文明的民衆の一致といふやうなものを、或道德の命題に關して主張するといふことである。そしてそれから汝に對しても私に對しても絕對の拘束を演繹するといふことである。或は反對に色々な民衆の場合道德的命題が必然に色々であるといふ眞實の、彼等へ明かになつたあとでは、すべての道德の不拘束性を論結するといふことである。そのいづれも同じやうに大なる子供らしさである。彼等の間なるより頭のいい連中の過ちは、ある民衆のその道德に關する多分愚劣な意見を、或はすべての人間的道德に關する人間の意見を、發見したり批評することである。したがつてその由來や宗敎的の認可や、自由な意志の迷信なぞを取扱ふ。そして丁度さうすることに依つて、この道德そのものを批評したやうに思ふのである。けれども『汝當になすべし』といふ訓戒の價値は、尙ほ根本的にそれに關するやうな意見から、また恐らくそれの上に伸び茂つた誤謬の雜草から違つて居り獨立である。丁度そのやうにたしかに病人共に對する或藥種屋の價値は、病人が科學的に、或はおばあさんの如く醫藥に就いて考へるかどうかといふことから尙ほ完全に獨立してゐる。一の道德はそれ自ら一の誤謬から大きくなることが出來た。けれどもこの洞察を以てしても、その價値の問題はまだ觸接せられなかつたであらう。かくの如く何人もこれまで道德とよばれたるすべての醫藥の中で最も有名なものの價値を吟味しなかつた。その目的に對しては最も先づ、彼が問ひ訊されるといふことが必要だ。いざ！　これこそは我々の仕事である。

三四六

我々の疑問記號。——しかし乍ら汝等はそれを理解しないか？　全くのところ、我々を理解するためには一の努力が必要であらう。我々は言葉をもとめる。我々は恐らくまた耳をももとめる。だが我我は何物であるか？　我々が單純に一の舊い言ひ廻しでもつて我々自らに名づくるに、神を無視するものをもつてし、不信心なるものをもつてし、或はまた不道德家をもつてするとも、我々は尙ほ且つそれでもつて自らを形容されたと思ふことから遠いであらう。我々はその際我々の心的情態がどんなものであるかを、人々が理解すべく、好奇心に富んだ私の友人諸君よ、諸君が理解し得べく、餘りに曉過ぎる段階に於て悉く皆三のものである。否！　我々はもはや自分の不信仰からやはり一の信仰を、一の目的を、一の殉教をさへも調達せねばならぬ、解放されたものの痛ましさや欲情を有しない！

我々はこの世界に於て全然神的に事物が秩序をたてられてゐないといふ、加之人間的な尺度にしたがつてさへも理性的に、慈悲深く、或は正當に秩序をたてられてゐないといふ洞察に浸透されて居り、そしてそれ故に冷酷になつてゐる。我々は我々の生きてゐる世界が無神的であり、不道德的であり、『反人間的』であることを知つてゐる。我々はそれを餘りに久しく不正に欺瞞的に、しかし乍ら

我々の崇敬の願望や意志にしたがつて、卽ち一の需用にしたがつて我々自らへ說明した。けだし人間は一の崇敬動物であるからだ！　しかし乍ら彼はまた不信な動物でもある。そして世界が我々の信じたるものを値しないといふのは、まづまづ我々の不信が結局捕捉したる最も確實なものである。それだけ多くの不信があれば、それだけ多くの哲學がある。我々は世界がより少く價値をもつてゐるといふことを言はるるやうに氣を注ける。人が現實世界の價値を超越し得たる價値を案出しようと希望したときそれが今日我々にまで滑稽にさへ見える。丁度そこから我々は、久しい間知られないでゐた人間的浮誇及び反理性の放逸なる迷妄からの如く引き返したのである。この迷妄は近代の悲觀主義のうちにその最終の表白をもつてゐた。一のより古いより強い表白を佛陀の敎のうちにもつてゐて。しかし乍ら基督敎もそれをもつてゐる。そしてもとより疑はしげに且つ曖昧にではあるが、尙ほ且つ同樣に誘惑的であることを失はないのである。『人間對世界』の態度全體は、『世界を否定する』原理としての人間は、事物評價の尺度としての、またつひに存在自體を自分の秤盤の上に置き、それを輕過ぎるやうに思ふところの世界の審判者としての人間は——かうした態度の異常なる乾燥無味はさういふものとして我々の意識へ來り、そして我々を嫌がらせる——我々は『人間及び世界』が並べられ、『及び』といふ小さな言葉の崇高な僭越によつて分たれてゐるのを見出すとき笑ふ。しかし乍らどう

したのだ？　我々は丁度それでもつて、笑ふものとして、人間の輕蔑にただ一歩を進めたのではないか？　したがつて悲觀主義に於て、我々に認識される存在の侮蔑にも？　我々は丁度それでもつて、一の矛盾の猜疑にまで、我々がこれまで我々の崇敬をもつて寛ろいでゐた世界と――その爲め我々が恐らく生活に堪へるのであらう――我々自らである別の世界との猜疑に陷らないか？　それは我々自らに關する一の撓げ難き、徹底的な、最も深刻な猜疑で、我々歐羅巴人をいよ〳〵甚だしくいよ〳〵惡しく虜にしてゐる。そして容易く來る可き時代を次の如き恐る可き選擇の前に置くことが出來た。曰く、『汝等の崇敬を放棄し去れ、然らずんば――汝等自らを！』後者は虛無主義であつたらう。しかし乍ら前者も亦虛無主義でなかつたらうか？　これが我々の疑問記號である。

三四七

信仰者と信仰に對する彼の需用。――人が繁榮する爲めに、如何に多く信仰を要するかは、彼がそれに自らを支へてゐる故に覆滅することを欲しなかつたやうな如何に多くの『確乎たるもの』を要するかは、彼の力（或は、より明白に云へば、彼の弱さ）の尺度である。私の見るところをもつてすれば、蓄い歐羅巴にあつては今日もなほ大抵の人々が基督教を必要とする。それ故にそれはやはり信仰を見出す。なぜといつて人間はかうしたものだから。即ち、一の信仰個條が千度も彼の前で辯駁されてもいい。それでも彼がそれを要するとしたならば、彼は幾度となくそれを『眞實』として受けとるであらう――バイブルに言つてある、あの有名な『力の表明』にしたがつて。ある人々は尙ほ形而上學を要する。けれども、今日廣い民衆の間に科學的實驗論的に自らを放射するところの、あの嗜暴な確實への願望も、どんなにしてでも何物かを確保したいといふ願望は（この願望の熱烈さの爲めに確實の設定がより輕易に、より怠慢になされるのだけれど）、――これも矢張手掛かり、支持への願望である。換言すれば、あらゆる種類の宗教や、形而上學や、信念を、造りはしないけれども保存するところの、あの弱さの本能である。全くのところ、總べての斯うした實證論的な體系の周圍には、或る悲觀論的な陰暗の煙霧が立てこめてゐる。疲勞や、宿命觀や、幻滅や、新しい幻滅を前にしての恐怖のやうなものが――でなければおほつぴらにされた憤恨や、不機嫌や、むしやくしや腹の無政府主義や、そのほか苟くも虛弱感情の徵候若しくは假面であるほどの一切の物が。依つて以て我々の最も悧巧な同時代者等が、みじめなる片隅や細路に於て、例へば祖國主義（佛蘭西でchauvinismeと稱せられ、獨逸で"deutsch"と稱せられてゐるところの物を、私は斯う呼ぶのである）に於て、或は巴里の自然主義（それは自然の中から唯だ、嘔吐を催させると同時に喫驚させるところの部分をのみ取立て

て露出する――人々は今日此部分を好んで In veritè Vmie と稱する）に做つた美學的片隅信條に於て、或はペテルブルグのお手本にならつた虛無主義に於て（卽ち、無信仰に對する信仰――その爲めの殉教にまでの――に於て）、迷ひ込んでしまつたところの氣ぜはしさすらも、常に先づ信仰や、手掛かりや、脊椎や、支柱に對する需要を示してゐる……信仰は常に、意志の缺乏してゐる處に最も多く熱望される、最も痛切に要求される。なぜと言つて、意志は命令の情動として、自主及び力の決然たる特徵であるからだ。換言すれば、人が命令することを知ること少ければ少いほど、彼は愈々痛切に、命令する者を、峻嚴に命令する者を、神だとか、君主だとか、自分だとか、醫者だとか、聽悔僧だとか教義だとか、黨派的良心だとかいふものを憧憬する。思ふにそれからして、佛教基督教といふ二の世界的宗教が、その成立原因を、とくにその急速なる傳播の原因を、巨怪なる意志の疾患に有つてゐたかも知れないことが推定されたであらう。そして實際にそれは然うだつた。双方の宗教が、意志の疾患によつて馬鹿げたところまで高められ、絕望にまではいつて行く、『汝は當になすべし』への願望に出會つた。双方の宗教が衰弱の時代に於ける狂信の教師であつた。そしてそれによつて無數の人々にまで一の手掛かりを、意欲することの一の新しき可能性を、一の意欲の享樂を提供した。けだし狂信は、虛弱なはきはきしない人々も連れ行かれ得べき（その時から勢力を得てゐる、格段なる視點及び感點の過饒營養――肥大症――に都合よく、官能的理智的體系全體を催眠にかけたやうなものとして）唯一の『意志力』である。基督教徒はそれを彼の信仰と呼ぶ。或る人間が、彼の命令されねばならぬといふ根本信念へ到着するとき、彼は『信者』になる。これに反して、自己決定の悅樂及び力が、意志の自由が考へられたであらう。その場合一の精神が各の信仰に、確實への各の願望に別れを告げる――あんな具合に細い索や可能性の上に自らを支へ得ることに、そして絕壁の上にすらも尙は且つ舞踏することに慣れて――といふやうな。かくの如き精神が自由精神 par excellence であらう。

三四八

學者の素性に就いて。――學者は歐羅巴に於て、他の如何なる特殊の地床をも要しない一の植物の如く、あらゆる種類の身分や社會的條件から成長して來る。それ故に彼は、本質的に且つ心にもなく、民主的思想の支持者に屬する。しかし乍らこの素性は自らを裏切る。もし人がどれだけか、或る博學な書物、科學的な論說なぞに於て、學者の理智的個人的好惡――いづれの學者もさういふものをもつてゐる――を見つけ出し、現場を取り抑へることに彼の目を慣らしたならば、彼は殆んど常にその後に學者の『履歷』を、彼の家系を、その職分や業務の特色に至るまで目睹することが出來たであらう。

『それは今や證明されてゐる、私はそれを完了してゐる』といふ感情が表白されるとき、學者の觀察點から覗き出て、『出來上つた仕事』を賞讃するのは、一般に彼の血や本能のうちなる祖先である。證據に對する信仰は、幾時代にも亘る勞働種屬に於て、『よき仕事』と見做されたものの徴候に過ぎないのである。一例を擧げよう。さまざまな材料を整理したり、抽斗に分類したり、一體に系統をたてたりするのが、いつも主要の任務であるところの登記係や役所の書記等の息子等は、彼等が學者になつた場合には、彼等が或る問題に系統をたてたといふことでもつて、その問題を殆んど解決されたもののやうに思ふ性癖を示すのである。そこには、結局系統をたてる頭といふに過ぎないやうな哲學者がある。彼等にあつては、父の業務の形式が內容になつたのである。分類をすることの、範疇の表を作ることの天分はあるものを裏切りしめす。人は何等の罰を加へられることもなしにその兩親の子供ではないのだ。或る辯護士の子供はまた研究者としても辯護士であらねばならぬであらう。彼は第一の考慮に於て彼の側に有利な點を主張し、第二の考慮に於いて恐らくは正當でありたいとねがふ。新教派の牧師や學校教師の息子等は、あのナイイフな信用でもつて認識される——卽ち、彼等は學者として、彼等の條項がただ眞心から熱情をもつてもち出されただけであるとき、あのナイイフな信用でもつてその條項が既に證明されてゐるもののやうに思ひ込むのである。彼等は人々に信じられてゐるといふ事にすつかり慣れきつてゐる。それが彼等の父親にあつては『しやうばい』に屬してゐたのである！これに反してある猶太人は、彼の職業上周圍及び彼の民族の過去に順應して、『人々から信じられるといふことに最も少く慣れてゐる。このことに關して猶太人學者等を觀察せよ。彼等はいづれも皆論理に、換言すれば推理によつて同意へ强いることに重きを置く。彼等は、人種的並びに階級的反感が彼等に對して存在してゐる場合にも、人々が彼等を信じたがらない場合にも、右の如きやりかたでもつて勝たねばならぬことを知つてゐる。けだし、何物も論理より以上に民主的でない。論理は人物の如何なる形貌をも知らない。そして曲つた鼻をも眞直い鼻としてうけ入れるのである。（ついでながら歐羅巴は論理的にものを考えることに關して、淸純な頭の習慣に關して、少なからず猶太人に負ふところがある。特に、この慨歎すべく非理性的な人種として、今日も尙ほまづ『頭を洗』はねばならぬところの獨逸人等はさうだ。猶太人が勢力を及ぼし得た如何なるところにも、彼等はより緻密に解剖すべく、より尖鋭に推論すべく、より明白によりきれいにかくべく致へた。彼等の問題は、常にある民衆を『理性へ』つれて行くといふことであつた。）

三四九

再び學者の素性に就いて。――自分自身を保存しようと欲するのは、ある困厄情態の表白である。力の擴大を目あてにし、かうした意志に於て隨分しばしば自己保存を問題にし且つ犧牲にするところの、本當の生活衝動のある制限の表白である。個々の哲學者が、例へば肺癆のスピノオザの如きがあだかも所謂自己保存の衝動に於て、決定的なものを見た、見ねばならなかつたとき、それは徵候的なものとして問はるべきだ。それは丁度困厄情態に於ける人間であつた。我々の近代の自然科學がスピノオザの教義とあれほど絡み合つてゐるのは（最終に且つ最も甚だしいのは、『生存の爲めの闘爭』に關する彼の理解しがたく一面的な說をともなへるダアヰン主義に於てである）、恐らく大抵の自然研究家の素性に依ることであらう。彼等はこの關係に於て『民衆』に屬してゐる。彼等の先祖等は、暮らしをたてて行くことの困難を直接經驗から餘りに知り過ぎたところの、貧しく賤しい人等であつた。英吉利のダアヰン主義全體の圍りに、人間の多過ぎる息苦しい英吉利の風が吹いてゐる。齷齪やつてゐる細民の臭みのやうなものが漂つてゐる。しかしながら人は自然研究家として、彼の人間的な片隅からはひ出して來なければならぬ。そして自然には困厄情態でなく、むしろ過剩が、加之愚劣にさへ近い浪費が支配してゐる。生存の爲めの闘爭は一の除外例に過ぎない、生活意志の一時的制限に過ぎない。大小の闘爭はどんなところででも、あたかも生活の意志であるところの力への意志にしたがつて、優越を問題にし、成長や擴張を問題にし、力を問題にしてゐるのである。

三五〇

Hommes religiosi（宗教的人物）の名譽にまで。――教會に對する闘爭は、ほかの事物もある中により信じ易い、より皮相的な性質の人々が、より重々しい、より深みのある、より冥想的な、即ちより意地惡き、より猜疑深き人々（生存の價値に關する久しい間の不信用と共に、自分自身の價値に就いても考へ込んだところの）の支配に對する闘爭である。民衆の卑俗な本能が、彼等の官能的な陽氣さ加減が、彼等に對して謀叛したのである。羅馬教會全體が、北國に於ていつも誤り解せられるやうな、人間の性質に關する南國的な猜疑の上に土臺を置いてゐる。その猜疑に於て南歐羅巴は深奥なる東方の、年老いたる神祕な亞細亞やその冥想の遺產を相續した。新教主義は朴直な、誠實な、皮相な人間に都合よき民衆的叛亂である（北方人は南方人よりも常にお人善しで、そして淺薄であつた）。しかし乍ら佛蘭西の革命は始めて『善良なる人間』に王節を完全に且つ嚴に引渡した（羊に、驢馬に、鵝鳥に、そして治しがたく淺薄な、喚きたてる、また『近代的觀念』の顚狂

院に向いたやうなすべてのものに)。

三五一

僧侶的な性質の人々の名譽にまで。——私の思ふところをもつてすれば、民衆が智慧だと思つてゐるところのものから(そして誰が今日『民衆』でないか?)、草叢に横はり生眞面目に反芻し乍ら生活を打ち眺めるところの、あの賢明な牛的な沈着や、敬虔や、田舍牧師的溫厚から、それから哲學者等は常に最も遠いものとして自らを感じた。恐らくは、彼等がそれに對して十分に『民衆』でなく、十分に田舍牧師でなかつたからであらう。民衆に最も遠く横はるところのものに就いて、最高の問題や最も至重の責任性のあらし雲のうちに絶えず生きる、生きねばならぬ(したがつて全然干渉的にでなく外面的にでなく、無頓着にでなく、安全にでなく、客觀的にでなく)認識者の大なる欲情に就いて、民衆が何物かを理解し得たことを、哲學者等はまた恐らく最も晩く信ずるやうになるであらう。民衆は一の全く異つた種類の人間を崇敬する——それが自ら『賢人』の理想になつてゐるとき。そして最善なる言葉と名譽とをもつて丁度かうした種類の人間に服事することには、千百の權利をも有してゐる。卽ちそれは溫厚な、實眞面目な、そして內氣な僧侶的性質である、それに親近な性質である。そ

れらの人々に賞讃が、智慧に對するあの民衆的な畏敬に於て當て嵌まるのである。そして民衆は、これらの人々に對してより以上に何人に對して感謝の念をもたねばならなかつたか——その民衆に屬して居り、その民衆から來るところの、然し乍ら神聖にされた、選ばれた民衆の幸福の爲めに犧牲にされたところの——彼等自らは彼等自らを神の犧牲に捧げられたと思つてゐる——これらの人々に對してより以上に。その人々の前の民衆が、無事に彼等の心情を吐露するやうな、その人々に依つて民衆が、彼等の祕密や、彼等の心配や、更により惡しきものを脫却し得るやうな人々に對してより以上に(なぜといつて『自らを傳達する』ところの人間は自分自身を脫却する。そして『懺悔した』人間は忘却するから)。ここに一の大なる需用がある。卽ち、心靈上の不淨に對しても下水やきれいな洗滌液が必要である。急速な愛の流れが、また非公共的衞生法のかやうなる役目に對して間にあひ、且つ犧牲になるところの强い、謙讓な、純潔な、心情が必要である。なぜといつてそれは一の犧牲である、僧侶は人身御供であり、且つ引き續いて人身御供であるから……民衆はかくの如き犧牲にされた、沈默した、眞面目な『信仰』の人々を、賢人と見做す。言ひ換へれば聰明になつたものとして、彼等自身の不たしかさに比較して『たしかな』ものとして見る。誰れが民衆から言葉とかうした畏敬とを取り上げようとねがはうぞ? しかし乍ら、反對にそれが正當である如く、哲學者等の間では僧侶も亦

やはり『民衆』と見做され、『識者』と見做されない。なぜなれば、何よりも先づ、彼等自らが『識者』を信じない、そして丁度この信仰及び迷信のうちにすでに『民衆』の臭氣を放散するからである。希臘に於て『哲學者』といふ言葉を案出し、自らを賢明と稱するけばけばしき驕傲を、精神の俳優どもに委し去つたのは、謙讓であつた――ピタゴラスの如き、プラトオの如き自遜と自主とのあんな怪物の謙讓であつた。

三五二

如何なる程度まで道德がなくて濟まし兼ねるものか？　――裸な人間は一般に恥づべきものである――私は我々男性の歐羅巴人に就つて言つてゐるのだ（そして決して歐羅巴婦人に就いて言つてゐるのでない！）。假りに、最も愉快なる食卓の仲間が、突然ある魔術者の魔術によつて自らの着物を剝ぎとられたとせよ。私は、ただが愉快な心持がなくなり、最も强い食欲が取り去られただけであるまいと思ふ。我々歐羅巴人は、衣服と稱するあの假面をどうしても缺くことの出來ないもののやうに思はれる。ところで『道德的人間』の假裝は、道德的方式や作法觀念の下になされる。彼等の掩蔽は、義務だとか德だとか公共心だとか正直だとか自制とかいふ慨念の下になされる我々の行動の好意ある陰匿全體は、その丁度同じやうによき理由をもつことが出來なかつたか？　私はこれでもつて、人間の意地惡さや賤しさが、言ひ換へれば、我々の內なる惡しき野獸といふやうなものが包み匿されねばならぬと謂ふのでない。私の考へは反對に、我々がまさに野獸としてこそ恥づべきものであり、道德上の被服を要すると謂ふのである。歐羅巴に於ける『內的人間』が『見られ』得べく（美しくあるべく）、全く十分に兇惡でないと謂ふのである。歐羅巴人が道德に於て自らを包み匿すのは、彼が『馴』獸であるべくよき理由を有するところの病氣してゐる、病身な、不具な動物になつてゐるからである。彼が殆んど出來損ひであり、半ばな、ひよろひよろの、不きつちやうなものなぞであるからである……道德的被服を要するのは猛獸の猛々しさでなく、むしろ念入りな中途半ばと憂慮と自分自身に對する倦怠とをもつた群居動物である。道德は歐羅巴人をきれいにする――我々をしてそれを承認せしめよ！　――より高貴な、より重要な、より立派なものに於て、『神聖な』ものに於て。

三五三

宗教の起源に就いて。――宗教創立者のほんとうの發明は第一に、Disciplina voluntatis（意志の訓練）として働き、同時に倦怠を追ひ拂ふ一定の生き方と日常的習慣とをすることにある。次には、この

生活がよつてもつて最高の價値に照されるやうに見えるところの解釋を、それに與へるにある。そこでそれは人が奮鬪し求めるところの、ある事情の下にその生命を賭するところの財物になる。實際は此二の發明の中第二の物がより大切である。第一の物、卽ち生活のしかたも通例既にそこにあつた。けれども他の生活のしかたと相並んでであり、また如何なる價値が內在するかの意識なしにであつた。宗教創始者の趣意や獨創性は通例、彼が生活のしかたを見るといふこと、彼がそれを選び出すといふこと、それの如何なる目的に用ゐられるか、如何に說明され得るかを、彼が始めて洞察するといふことの中に現はれる。例へば耶蘇（或は保羅）は、あの羅馬の領州に於て細民の生活を見出した。謙讓な有德な壓抑された生活を見出した。彼はそれを解釋した。彼は最高の意義及び價値をそれに置いた。そしてそれと共に、各の他の生活の仕方を侮蔑する勇氣や、穩やかなモラビア派の狂信や、漸次成長して來て遂に『世界を征服』せんとしてゐる（卽ち羅馬を、また全帝國のうちなるより高き階級を）ところの、祕密な地下的な自己信賴を置いた。佛陀も同樣にあの種類の人間を見出した。しかも、懶惰から善良で且つ親切である（とりわけ癲でない）ところの、同じく懶惰から禁欲的に、殆んど求むる心なしに生活するところの彼の民族のあらゆる身分や社會的階級の間に撒き散らされてゐるのを見出した。彼は如何にかくの如き種類の人間が必然に、その重荷の全體をもつて、かの現世的困苦（卽ち一般に勞働や行爲）の回歸を防止すべく約束するところの、一の信仰へ轉り込まねばならぬかを理解した。この『理解』が彼の天才であつた。宗教の創始者には、自らをまだ同種類なものとして認識しなかつたところの、一定の平均的な種類の人間に關する智識の心理學上の間違ひなさがある。彼等を結合するものは彼である。この限りに於てある宗教の創立は常に一の長い認識祭になる。

三五四

『種の守護神』に就いて。——意識の（より正しくいへば、自分を意識するやうになることの）問題は、如何なる程度まで我々がそれを洞察し得たかを、我々の理解し始めるとき、そのとき始めて我々の前に現はれて來る。そして理解のこの始めに於て、今生理學や動物學（それはかくてライプニッツの先驅的暗指に追つつく爲め、二世紀を要したのである）が我々を据ゑ置く。なぜといつて我々は考へたり、感じたり、意欲したり回想したりすることが出來た。我々はまた言葉のあらゆる意味に於て『行動する』ことが出來た。それにも拘らずすべてのものは我々の『意識にはいつて來る』（比喩的にいはれる如く）ことを要しなかつた。生活全體が、謂はば鏡のうちにそれ自身を見ることなしに可能であつたらう。實際に現在に於てすらも我々の生活のはるかにより大なる部分が、やはりかうした反

映をなすことなしに動いて行く如く。そして我々の考へるところの、感ずるところの、意欲するところの生活も同じである――これが年のいつた哲學者に如何程なさけなく聞えやうとも。意識が大體に於て不用であるとき、それは抑々何の爲めのものか？　今人々がこの問題に對する私の答と、そのことによつたら脱線的な推定に耳をかすであらうならば、私には次のやうに思はれる。曰く、意識の精かさと強さは常にある人間（あるひは動物）の告達能力に比例して居り、その告達能力がまた告達の必要に比例して居る。この場合後者は、その必要の告達やそれをわからせることの名人である個人的人間自身が、同時にその必要に對して最も多く他人に頼りすがらねばならなかつたかの如く、さういふ具合に理解さるべきでない。だが、人種及び時代の系列全體に關しては、それがさういふ具合であるやうに私に見える。需用が、困厄が自らを告達すべく、お互に急速に且つ精かに理解し合ふべく、久しい間人々に強いたところには、結局告達のかうした力や技術の過剰がある。謂はば漸次蓄積された、そして今亂費してゐる相續人を待つてゐたところの一の財産である。（所謂藝術家等はこの相續人である。演說家や說教家や著作家等も同樣に。すべてが、一の長い鎖の未端に來るところの常に『晩く生れた』ものであるところの、言葉の最もよきとり方に於て、且つ前述の如くその本質に於て亂費者であるところの人々である）。この觀察にして正しいならば、私は次の推定に進み行くことが出來る。

曰く意識なるものは告達の必要の壓迫の下にのみ發展したのである――最初からそれはただ人と人との間に別して命令するものと服從するものとの間にのみ必要であり有用であつた。そしてまたこの有用の程度に比例してのみ發展したのであると。意識はほんとうを言ふと人間と人間との間なる連絡の網細工たるに過ぎない。ただかくの如きものとしてのみ彼は發展せねばならなかつた。隱遁者的な並びに猛獸的な人間はそれを要しなかつた。我々の行動や、思想や、感情や、運動が――少くともそれ等のものの一部分が――意識のうちへはいつて來るといふことは、人間を支配するところの恐るべき久しい間の『ねばならぬ』の結果である。彼は最も危險に迫つた動物の如く救助を、保護を要した。彼はその同僚を要した。彼はその困厄を表白したり、自分をわからせるやうにしたりすることを知らねばならなかつた。そしてかうしたすべてのことの爲めに彼は、何よりも先づ『意識』を必要に感じた。したがつて彼自ら、何が彼に缺けてゐるかを『知る』こと、如何に彼が感じてゐるかを『知る』こと、また何を彼が考へてゐるかを『知る』ことを必要に感じた。なぜといつて、今一度述べるならば、人間は各の生きものと同じく、絕えず考へてゐる。けれどもそれを知らない。意識的になる思考は、それの最小部分たるに過ぎない。我々は謂ふ――最も皮相な、最も惡い部分たるに過ぎない。なぜといつてこの意識的な思考だけが言葉にかて、言ひ換へれば告達記號（依つてもつて意識の起原が

表はし示されるところの）に於てなされる。要するに、言葉の發展と意識の（理性のでなく、むしろただ理性が自意識的になることだけの）發展とは、手をとりあつて行く。單に言語だけが人間と人間との間なる橋梁として役立つのみならず、顏附きや壓着や身振も亦同樣に役立つといふことを、更に進んで承認せしめよ。我々の感官的印象も我々自らの意識すること、それらのものを固定し得る、そして謂はば我々自身の外に置く力は、それらのものを記號によつて他のものどもへ傳へることの必要が增大するに比例して增大した。記號を發明する人間は同時に、いよいよ鋭く自分自身を意識する人間である。ただ社會的動物としてのみ、人間は彼自らを意識するやうになることを學んだ。彼はやはりまだそれをやつてゐる。彼はいよいよ餘計にそれをやつて行く。人々に明白である如く、私の考へはかうだ――意識は本來人間の個人的生存に屬するのでなく、むしろ彼のうちなる社會的並びに群獸的性質に屬するのである。それから論結される如く、意識はただ社會的並びに群獸的功利に關係してのみ精妙に發展してゐる。そしてそれゆゑ我々の各は、自分自身を出來るだけ個性的に理解しようといふ、『自分自身を知らう』といふ最善の意識あるに拘らず、尙ほ且つ常に自分自身のうちなる非個性的なもの、我々の『平均的なもの』をのみ意識へ持つて來るであらう。我々の思想のものは絕えず意識の性格に依つて、彼のうちに勢力ある『種の守護神』に依つて、謂はば票決され、群獸的遠近法

にまで翻譯し戻される。我々の行動は根本的にいふと、ある比較すべからざる仕方に於て悉く皆個人的で、獨特で、無制限に個性的である。それについては何等の疑をも容れない。しかし乍ら我々がそれらのものを意識に翻譯するやいなや、それらのものはもはやさう見えない……これは私が理解する如く、ほんとうの現象論であり遠近法論である。動物的意識の性質は次のやうな考へを含蓄してゐる。曰く、我々の意識し得た世界は皮相的記號的世界たるに過ぎない、概括された凡庸化された世界たるに過ぎない。意識されるすべてのものは、丁度そのことに依つて淺薄に、貧弱に、比較的愚劣に、普通に、標徵に、群獸的特徵になる。すべての意識的になることには、一の大きな、根本的な腐敗が、僞造が、皮相化が、そして概括が結びつけられてゐる。最後に成長するところの意識は一の危險である。そして最も意識的な歐羅巴人の間に生活するところの人はあまつさへ、それが一の病氣であることをさへ知るのである。人々の想察する如く、この場合私の關心してゐるのは主觀客觀の對立でない。かうした區別を私は、今尙ほ文法（通俗形而上學）のつめとみに絡まつてゐる認識論學者等に委ねる。それは『ものそのもの』と現象との對立でもない。何故といつて我々はさやうなる差別を爲し得るほどにも十分に『認識』しないのである。我々は認識に對し、『眞實』に對して全然何等の器官をも有しない。我々は群獸的人間の、種の爲めに有用であり得るだけ、丁度それだけ多くのものを『知る』（或

は信ずる、或は空想する)。そしてここに『有用』と稱せられるものすらも、結局はまた一の信仰であり想像であるに過ぎないのである。そしてことによつたらば丁度、我々がその爲めにいつか滅亡して行くところの、あの最も致命的な愚劣であるかも知れない。

三五五

『認識』といふ我々の概念の起源。――私はこの說明を街上からとる。私は民衆の中のだれかが言ふのを聞いた、『彼は私を認識した』と。その際私は私自らに問うた――民衆は實際認識といふ言葉によつて何を理解するか？　民衆は『認識』を求めるとき何を求めるか？　何等かの見知らぬものが何等かの知られたものへ連れ戻されねばならぬといふ、それ以上のことでない。そして我々哲學者は、我我は認識によつて實際より多くのものを理解したか？　知られたもの、即ち我々が慣れてゐて、もはやそれを驚かないやうなもの、我々の日常的なもの、我々の固着する何等かのきまり、我々が自らの寛いでゐるのを知るやうなすべての、各のもの――如何に？　認識に對する我々の需要は丁度この知られたるものに對する需要ではないか？　すべての見知らぬもの、慣れないもの、疑はしきもののうちに、もはや我々を不安にしないやうな何物かを發見しようとする意志か？　我々をして認識せしめるのは、恐怖の本能であり得なかつたか？　認識者の悅びは丁度、取り返されたる安全感情の悅びであり得なかつたか？　……この哲學者は世界を『觀念』へ連れ戻したとき、それを『認識した』と空想した。ああ、それは『觀念』が彼にまで左樣に識られて居つた樣に親しいものであつた爲めでなかつたか？　彼がもはや『觀念』の前に左樣に僅かを恐れた爲めでなかつたか？　おお、認識者のかうしたこのおちつき！　我々をして希ぐは彼等の主義及びそれに關しての世界の謎の解釋を見しめよ！　彼等が事物に於て、事物の間に、事物の後に、殘念乍ら我々にまで非常によく知られてゐるあるものを再び見出すとき、例へば我々の九九の表だとか、我々の論理だとか、我々の意欲熱望だとかを再び見出すとき、彼等が直ちに如何に幸福であるかよ！　なぜといつて『知られてゐるものは認識されてゐる。』その點に於て彼等は一致してゐるのである。彼等の間なる最も思慮深きものどもすらも、少くとも知られたるものが知られざるものより容易く認識出來ると思つてゐる。例へばそれは、我々に知られた世界である故に、『內面的な世界』から、『意識の事實』から出て行くやうに嚴重に命じられたと思つてゐるのである。誤謬の誤謬よ！　知られたものは慣れたものである。そして慣れたものは『認識する』のに、即ち問題として見るのに、即ち知らないものとして、遠いものとして、『我々の外』に居るものをして見るのに骨が折れる……心理學及び意識要素の批評――人が殆んど言ひ得たる如く不自

然科學――に比較して、自然科學の大なる確實性は、丁度、それらのものが知らぬものを最小として とるといふことに基礎を置く。ところで一般に知らぬものでないものを對象としてとらうとするのは 殆んど矛盾した、馬鹿げた何物かである……

三五六

如何なる程度に於て歐羅巴がいよいよ『より藝術的』になるであらうか。――生活の顧慮は今日尙ほ――左樣に多くのものが强迫することを休やめた我々の過渡時代に於て――殆んどすべての男性的歐羅巴人に一定の役割を、彼等の所謂職分を强迫する。ある人々にはその際自由が、かうした役割を自ら選ぶことの外觀上自由が殘されて居り、大抵の人々にはそれが選び與へられる。その結果は隨分妙なものである。殆んどすべての歐羅巴人は晩年に至つて彼等の役割と彼等自らとを混同する。彼等自らが彼等の『より演技』の犧牲である。彼等自身が忘れた――彼等の『職分』が決定したとき、如何に甚だしく偶然や、氣まぐれや、出たらめが彼等を片づけて仕舞つたかを、そして如何に多くの他の役割を彼等が恐らくは演じ得たかを。なぜといつてそれが今や餘りに晩すぎるから！　より深く立ち入つて見れば、彼等の役割から實際性格が出來て居り、彼等の藝術から自然が出來て居る。ある時代には人々が固い信任の心を以て、否徹底な心をもつて丁度この職業に對する、丁度この生計に對する彼の宿命を信じた。そしてその中に偶然を、役割を、出たらめなものを、全く認識しようと欲しなかつた。身分や、同業組合や、世襲的の職業上特權が、この信念の助けによつて、他の、中世に特徴をなすところの、まだそれから兎に角持續といふ一の讃むべきものを殘存してゐる（そして持續は地上に於ける最上級の價値である！）ところの大きな「社會」塔の怪物を建立すべく成功した。併し乍らそこには反對な時代、ほんとうに民主的な時代がある。その時代には人々がこの信念を段々と忘れる。そしてある無遠慮な信念と反對な見地とが前景へ現はれて來る。これはペリクレスの時代に先づ認められるあのアテンの信念である。いよいよ歐羅巴の信念にもならうとしてゐる今日のあの亞米利加の信念である。それによつて各人は、殆んどあらゆることをなし得るやうに、殆んどあらゆる役目を演じ得るやうに思つてゐる。それによつて各人は、自分自身で試驗し、即興作をなし、新らしく試驗を仕直し、悅びをもつて試驗する。それによつてすべての自然が休まつて藝術が出來上る……希臘人は、まづこの役割信仰――何らば藝術家信仰――に入つてから、よく知れ渡つてゐる如く、一歩一歩の奇異なるそして各の點に於て模倣を値しない變化を經驗した。彼等は實際に俳優になつた。そしてかくの如きものとして彼等は盤惑した。彼等はすべての世界を征服し、最後に『世界の征服者』をすらも征